

---

# 甘党絵描きが幻想入り

甘宮ソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

甘党絵描きが幻想入り

### 【Nコード】

N9779W

### 【作者名】

甘宮ソラ

### 【あらすじ】

八雲 紫はスキマをどこかへ繋いでいた。藍が理由を聞くと、暇だから遊びで繋いでいる、と言う。藍はため息をついたがそれも理解できる。最近の幻想郷は暇すぎて仕方がない。

そんな時、スキマから誰かが入ってきた。そしてその日から、事件は起こる。

## 暇すぎる幻想郷（前書き）

この物語は幻想入りを書いた東方二次創作品です。うp主の独自設定。キャラ崩壊等起きている場合がございます。そういうのが苦手な方は速やかに戻るボタンを。それでもおkと言う方は、ごゆっくりとお楽しみ下さい。

## 暇すぎる幻想郷

### 幻想郷。

ここでは人間だけではなく、神や妖怪、妖精などが暮らしている。毎日変わらず、平穏な日々が続いている。しかし時には事件も起きる。

異変が起きたり、外の世界から何かが来たり、誰かがやってきたり。そんな時は皆で事件を解決する。でも毎日そういうことが起きるわけではない。今現在幻想郷は、事件も何も全く起きない、ただただ穏やかな毎が続いている。

単刀直入に言えば「ヒマ」ということになる。

そんな中、何かを企てる者が一人……。

「紫様。」

八雲 藍はスキマを眺めている八雲 紫に問いかけた。

「あら、藍。どうしたの？」

「いえ、昨夜から気になっていることがあるんですが、その……。

」  
藍は横目で隙間を見た。

「なぜ、ずっとスキマを作っているんですか？中の目がこんなトロンとしているスキマもはじめてみた……。」

「それだったら貴女も納得するはず。昨日の夜からずっと頑張っているスキマの苦労も報われるくらいの理由を教えるわ。」

紫は人差し指をぐっと藍に突きつけた。

「理由はただ一つ！」

「ひとつだけなんだ……。」

紫は険しい表情で藍に言った。

「暇だったからよ！！！！！！！！！！」

「ですよー。（まあ、わかってましたけど。）」  
とりあえず藍は気になる事を問いかけてみた。

「しかし、一体何処にスキマを繋いでいるんですか？」  
すると紫は普通に説明をしてくれた。

「それは私にも分からないわ。スキマを作ったときに適当に選んだものだから。」

「はあ。でもなぜそのようなことを？」

紫は怪しい笑顔を浮かべた。

「決まってるじゃない。だってそっちのほうが・・・、」

紫は拳を硬く握り締めた。

「面白いじゃない・・・ツツツ！！！！！」

「ですよー。」

——博麗神社——

博麗神社の庭では、霊夢が掃除をしていた。

「・・・ふう。駄目ね。ずっと掃除なんかしてても暇になるだけだわ。」

すると向こうから声が聞こえてきた。

「おーい、霊夢ウ。」

「あら、魔理沙に、アリスじゃない。何か用？」

「暇だから遊びに来てやったぜ。相変わらずしけた顔だな。」

「ふーん。にしても、アリスがわざわざ来るなんて珍しいわね。」

「わ、私だつて来なくてきたわけじゃ・・・。た、ただ魔理沙がどうしても付き合ったっていうから・・・、ぶつぶつぶつぶつ。」

「なんか言ったか？」

「な、何も言ってないわよ！！！！！」

ギヤーギヤー言っているアリスを放っておいて、霊夢と魔理沙は会話を続けた。

「なあ霊夢ー。せっかく遊びに着たのに何もなかったのは無しだぜ？せめてお茶とお菓子くらいはほしいぜ。望み薄いけどな・・・。」  
「お茶をたかりに来たのなら、せめてお賽銭くらい入れていってほしいわ。もうお賽銭箱の中身はペリ力すらないんだから。あとアリスうるさい。」

「うるさいってなによ！」

「金持ってたらず苦勞しないぜ。それに暇で暇で仕方ないんだよ。アリスも同じ意見らしいぜ。あとなんだよペリ力って。欲しいなら地下帝国防行って働いて来い。」

「はあ、まあ暇なものには意見は一致だけど・・・。」

3人が何か暇をつぶせるものがないか悩んでいると横から声をかけられた。

「だったら面白い記事ありますよー」

霊夢はまたため息をついた。

「はいはい、どうせいつものくだらない記事じゃ・・・。」

射命丸 文はニコニコ笑っている。

「って、のわっ・・・！！あ、文・・・？！」

「どーも、霊夢さん。お暇ということなのでこの特別号をお見せますー！」

文はズいっと新聞紙を差し出してきた。

「あ、ああ・・・。まあいつもの記事だとは思っけど・・・。」

「まあ、そうおっしやらずに。じゃあ私はまだいくところがありますので、失礼します！」

そういつて文は高速で飛んでいった。霊夢は新聞を無言で見っていた（どうせいつものくだらない記事だろうし、一体何処に面白い記事なんて・・・。）

しかし書かれていたことは意外な記事だった。

「ん・・・？」

霊夢は記事を読んだ。

「・・・八雲 紫が謎の目的地にスキマを作った。何かが幻想入りしてくるのも時間の問題・・・？」

魔理沙も釣られて記事を読んでいる。

「八意 永琳が新しい薬を開発。しかし未だに効果は判明していない。」

写真には薬の入ったビンが写りこんでいる。

「ね、願いを書き込めば必ず叶う本が存在するらしい。人間の里ではブーム？」

アリスは意外な本の存在を知って驚いている。

3人は新聞をずっと見ていた。

### ——紅魔館ベランダ——

「そう、わざわざご苦労様。」

「いえいえ。では、ありがとうございました。」

文は紅魔館から飛び出て行った。

ベランダにいるレミリア・スカーレットは新聞を手にとっている。

「ええ、こちらこそ。ではこれはもらっておくわ。じゃあ。」

文は手を振って飛んでいった。

「お嬢様。お茶をお持ちいたしました。」

十六夜 咲夜はレミリアの前に紅茶を置いた。

「あら、有難う咲夜。気が利くわね。」

「文から新聞を貰ったんですか。一体どんな内容だったんですか？レミリアは新聞を眺めた。」

「さあ・・・。不思議ではあるけど、あまり変わりはないわね。変わってるといえば、こーりんの店が白蟻に食われてるくらいしか・・・。」

「それけっこう問題ですよ。あ、でもこの願いが叶う本なんかパ

「チュリー様は食いつくんじゃ？」

レミリアは紅茶を飲んだ。

「ん・・・、それもそうね。」

とりあえずパチユリーのところへ報告に行く事にし、屋敷内へと入ろうとした。

「ところで、妹様は？」

「フランは今頃屋敷の中で遊んでいるわ。小悪魔に面倒を見てもらっているから、そこまで心配する事もないわね。あの子はああみえてけっこうおとなし」

[illegible]

突然のフランの叫びがとどろき、咲夜とレミリアは吃驚してしまっ

「フ、フラン……。一体なにをそんなに怒ってるの？」

フランは涙目になってきた。

「うう……。だって、だってえ……。」

次の瞬間、フランはまるで全てを破壊しそうなほどの声量で不満を零した。

「今まで以上に暇なのに、私は外に出れないんだよ?! もう暇で暇で仕方がないんだもん! お外! お外出たいい! ! ! ! !」

今度は不満をぶつけようとしたのか辺りを蹴散らし始めた。

「ちよ、ちよつとフラン！家の中で暴れないで！さ、咲夜！止めてえっ！！！」

「い、妹様！おやめになつて下さい！小悪魔が・・・、小悪魔がなんかもう幼稚園児に振り回されるクマの人形みたいに・・・！！！」  
「これ以上暇になるならお姉様の身包み剥いで売りまくっちゃうぞ  
おおお！！！」

「工工、是非！」

「咲夜ああああ！！！！！」

——永遠亭——

「んー、どうしようかしら。これ。」

八意 永琳はある薬を見て唸り声をあげていた。

奥の扉が開き、鈴仙・優曇華・イナバが入ってきた。

「？・・・、師匠。どうかしたんですか？」

「ん、ああ・・・。ちよつと昨日の夜からね、暇なんで新しい薬を作ってたんだけど、途中薬の香りのせいで寝ちゃってて・・・。」

「夜の変な叫び声や爆発音ってその変な薬が理由だったんですか！？」

優曇華は思わず薬から退いてしまった。

「はあ・・・、はあ・・・。あ、でもその薬って、」

優曇華は横目で薬を見た。

「一体どんな効力があるんです？なんか色が全体的に黒い・・・。」

その薬は色が黒く、禍々しいオーラを放っているようにも見える。

「さあ、私にも分からないわ。なんせ寝ちゃったから。材料リストはあるにはあるけど、調べ終わるのは少し時間がかかるかもしれないわ。」

「はあ・・・。」

「ま、それは私に任せといて。それより、庭の掃除をしてきてくれ

る？ 姫は相変わらずごろごろしてるし、てゐはどこかに出かけちゃ  
つてみたいなの。」

「分かりました。」

そついつて優曇華は部屋をでた。それと同時に永琳はため息をつい  
た。

「私としたことが失態だったわ。早く効力調べないと・・・。」

永琳は背もたれの椅子にもたれかかった。

「・・・にしても、」

永琳は窓から空を眺めた。

「本当に、暇なのよねえ。」

空からは何かが飛んでいるような姿が見えた。

## 暇すぎる青年

空から飛行機のエンジン音が聞こえてきた。辺りからは子供の遊ぶ楽しそうな声が響いている。

公園のベンチにワイシャツ姿の青年が座っている。容姿は普通。なのに頭には猫のような柔らかい素材のかわいらしい帽子を被っている。いかにもおかしい格好だった。

「ああー、暇だなあ。だれかからかいたい……。」

甘宮ソラ、という名の青年は嘆いていた。こここのところ暇で暇で仕方がない。得意の漫画を描いてもネタが思い浮かばない時もあるし。まあ、大好きな甘いもの食べてるときは幸せだけど。

「……。」

ソラは鞆を見た。鞆を開けると、中には色々なものがつまっていた。「さて、漫画の絵描いところかな。」

ソラは頭を屈めて絵をかき始めた。

するとネコ帽が落ちてしまった。

「あ……。!」

慌ててネコ帽を拾うとゴムを確認した。

「ああ、緩くなっちゃってる……。」

どうにか戻そうと試行錯誤しているといつの間にか子供達がたかっていた。

「ねーねー兄ちゃん。なんでそんな変な帽子被ってるの?」

ソラは子供達をみた。

「決まっているだろう。猫が大好きだからだ。あと犬も。」

「変なのー。変なのー。」

と子供達がからかっている。

「変なのとはなんだ変なのとは。これでも自作だぞ。」

それでも子供達は笑いながら去っていった。

「全く。まあ、悪気はないんだろうな。」

ゴムを直しながら自分の描いた絵をみた。

「・・・ああー、なんかこう、描いた絵が飛び出るとか、それと同じ効果が現れる絵が描けるとか、という厨二的なこと起きてくねえかなあ。」

そう嘆いてソラはベンチに横たわった。

彼は厨二病な面もある。まあ、漫画家志望で、小説も描いて、尚の事少しばかりマニアな面もある。人柄はいいとはされているが、親友からは甘党ドSって言われてるし、演劇仲間からはただの楽しい面白い奴といわれる。それは嬉しいのだが、やはりこう、面白い展開がないとつまらない。でもそうもいつてられない。高2だし、来年は受験だし、漫画家目指さなきゃいけないし。大変な毎日だ。

「はあ・・・。とりあえず、」

青年は目を瞑った。

「寝る。」

鞆を枕代わりに寝てしまった。

数時間がたった。

子供達がトイレの隅で騒いでいた。

「ねーねー、なんだろこれ。」

「知らない。うねうねしてるね。」

「ねえ、なんだか怖いよ・・・。家かえろ？」

子供達は得体の知れないものを見て怖がっていた。子供達がキヤーキヤー騒ぐ叫び声でソラは目を覚ました。

「んああ・・・？」

重たい身体を起こして、子供達が騒いでいる方向へ向かった。

「どうしたー？なんか怖いものでも見つけちゃったのかー？」

「あ、変な兄ちゃん。これ、こっちきて！」

ソラは手を引かれたので、焦ってかばんを持ってネコ帽を手で押さえた。

「な、なんだなんだ!」

連れて行かれたのはトイレの隅。無理に引っ張られてきたのでソラは少し息を切らしている。

「ほら、これ。」

「怖いよー!」

ソラは片目で目の前を見た。

「は、はあ・・・!?」

正直、驚いた。

目の前にあったのは、動画サイトでもよく見かける、東方projectの有名なもの。

スキマだった。

「な、なんでこれが、こんなところに・・・?」

夢でも見ているのだろうか。東方で見かけるスキマが、この現実世界で発生している。こんなことが起きていいのだろうか。

「・・・。」

「兄ちゃんどうかした?」

「凄い驚いた顔してるよ?」

はつきりいつて子供達がなんていつてたのかわからない。正直少し嬉しい面もあった。夢であれど、意識はしっかりしている。

「・・・。」

ソラは頂垂れた。

「?・・・兄ちゃん、どうかした?」

ソラは両手を中に突き出した。そして次の瞬間、

「なんか知らんが来たああああああああああああああああああ





幻想へ……。 (前編)

「あら、ようやく何か入り込んだみたいね」

紫は早速スキマを覗き込んだ。

「やつとですね。でも一応注意はしておいたほうがいいんじゃない？」

「大丈夫大丈夫!! さあ、なにがかかったのかしら」

藍はため息をついた。

(本当に大丈夫なんですかねえ……。まあ、楽しそうにしていればこっちも気が楽になるし、問題が起こるわけでもな)

突然物凄い木の割れる音とドゴっ! という、金槌頭蓋骨を叩き割ったようなエグい音が鳴り響いた。

「ん、ドゴ……。？」

紫はあまりにも悲惨な状況になっていた。悪く言えばみせられないよ状態。

「ゆ、紫様あああああああ!？」

「ああ、れ、霊夢が……。ああ、そんなとこ、らめえ……。」  
藍は紫を黙視していた。すると天井から木の屑がパラパラと落ちてきていることに気がつき、ゆっくりと天井を見た。

天井にはドデかい穴が空いていた。

「い、一体……。何が……。」

何が入り込んできたんだ？

その光景は博麗神社からも見えた。

「うおっ!？」

魔理沙は驚いていた。

「な、なんだありや……。!」

「ば、爆発・・・?!」

霊夢も同じように驚いていた。

「で、でも・・・。」

驚きながらも冷静を取り戻しているアリスは空高く飛び立っている謎の物体を見た。

「爆発だつたらもつと被害がひどいんじゃない・・・。」

爆発音みたいな音は徐々に小さくなっていき、やがて放物線を描いて地上に向かっていった。

「あ、おちてくぜ。」

「あそこ、迷いの竹林のほうね。」

3人は黙ってその光景を見ているだけで動こうとはしなかった。

「・・・。」

ソラは半目になってあたりを見回していた。

「うん、そうだな。俺も少し冷静になろう。だが、この状況でどうやって落ち着いていられる。」

ソラは腕を組んだ。

「まず甘いものを食べて、そこからまず地上へとおりたとうではないか。ここらへんが竹やぶってことは、まず人がいる可能性はある。日本ってこともだ。コレで安心だ。でも・・・、」

ソラは顔を蒼くした。

「どうしてこうなった・・・。」

原因はソラが竹やぶに引っかかってしまい、身動きが取れないため。しかもワイシャツの裾の部分が上手い具合に引っかかってしまい、首が絞まる。

「おええ・・・。は、早く降りねえとマジでやばい、かも・・・。」  
ソラは決心した。

「よし、まあここは竹をつたっておりることにする・・・」

突然ワイシャツの引っ掛かりが直って取れてしまった。

「か・・・。」

ソラは地面に向かって落下した。

「マジかああああああああああああああああ！！！」

勢いよく地面に落下した。

「ぐわらばっ！」

それでもソラはゆっくりと起き上がった。

「うむ、計画通り（？）だな。さて、まずここはどこかを調べないと――」

「お、おい・・・。」

ソラは声がした方向を向いた。

「大丈夫か？」

目の前にいたのは藤原 妹紅だった。ソラは目を真ん丸くさせて死んだような感じな驚き方をしている。

「・・・？」

突然ソラは逆方向を向いて考え出した。

（ええ・・・?!?!?!?なぜ、なぜだ!?なぜ俺のベスト3にはいる妹紅が目の前に・・・!?あ、ありえない。とうとう俺がおかしくなったのか?それとも本当に目の前に妹紅が!?いやまてれれれ冷静になれ。素数を数えるんだ。あれ、素数ってどれだっけ?んなことどうでもいい!多分さつき頭を打ったのが原因だ。しかもこれは夢の可能性がある。だが、覚えている。俺はさつきスキマに入った記憶が。曖昧だが、それは・・・。いや、それも夢の可能性が高い。しかし妙にリアルすぎる。じゃあ、これは現実なのか?目の前に妹紅がいるのも・・・。

いや、喜ぶな!これは俺がおかしくなったんだ。あまりにも幻想郷を求めすぎるためにこんなことになったんだ。そう思うと頭が冴えてきたぞ。そろそろ起きて馬鹿な親友共のところへいこう。そしてこんな夢を見たと自慢しよう。そうだ。ふりむけば誰もいないさ。



「何これ、カッコいい!!!」

チルノはネコ帽を拾って被り始めた。

「うおおお!!!」

そこ頃、優曇華は竹やぶの近くで蹲っていた。

「な、なに。今の？」

大きな買い物袋をぶら下げていた優曇華は心配そうに空を見ていた。  
「今の爆発音。こちらへんに落ちてきたなあ。ひょっとして異変？  
ここの所何も起きなかったから妖精たちが悪戯でもしかけたのかしら・・・？」

心配してきたがこちらに被弾の可能性もなさそうなので、安心して  
永遠亭に戻ろうとした。

「・・・てゐの奴、手伝ってっていっておいたのにいなくなっちゃ  
って・・・。おかげで一人で買出しになっちゃったじゃない・・・。」

「

優曇華は真横の竹林を見た。

「さっきの音。よくわからないけど、爆弾だったりしないかしら？  
永遠亭に落ちてたらずいわ・・・。」

優曇華は真剣に考え始めた。

「でももしこれが本当に異変だったとしたら・・・。少なくとも幻想郷で何かが起こる可能性がある。だとしたら今頃霊夢や紫さんも動いてるはず・・・。私も一応警戒しとかなきゃ・・・。」

しかし今の問題は爆発音ではない。この買い物袋の異常なまでの重さだった。

「・・・その前に私の腕に異変がおこるんじゃないやあ・・・。早く帰って腕を休めよう。いくらなんでも、」

優曇華は真横を見た。

「重すぎ・・・。」

なぜかそこに可笑しなものがあつた。見たことない造型のもの。これはまるで岡○太郎作のあの塔そっくりなものだった。

「……なにこれ?!」

思わず優曇華は退いてしまった。

「師匠ー!竹林辺りに変なものが……!!!!」

と、優曇華と同じ背丈くらいの太陽の塔を抱えてきた優曇華。

「その重そうな塔と重いはずの重い物袋をぶら下げてくる貴女も相当変に思われるわよ?」

「そ、それだけじゃなくて……!さつき変な爆発音もあつたし、それにこの竹林に落ちてきたみたいだし……!大丈夫なんですか!?!」

永琳は薬の効力を調べている。

「大丈夫なんじゃない?こつちまで被害は来てないし、そこまで怖がるような事でもないわ。」

「で、でも……。」

永琳はこつちを向いた。

「優曇華。最近暇なのは分かるわ。たしかにこういうことにも敏感になるかもしれない。でもたかが爆発音よ?そんなの弾幕勝負やつてれば普通に発生するわよ。」

「そうですね……?」

二人がギャーギャーやっている光景を、壁の影から見ている姿があった。

てゐが目を怪しく輝かして覗いていた。明らかに何かを狙う獣の目。その目線の先にはあの謎の薬。変な塔も気になるが手に入れたいのあの薬。

「うつさつさ……。」

てゐは気付かれないように小刻みに近づいた。

「とにかく、危険とわかったら逃げ出してくださいよ?」

「わかったわ。どうでもいいから姫起こしてきてよ。」

「もう・・・。」

優曇華が動こうとした時、てゐは動きを止めた。

（・・・ばれる？）

しかし幸運が訪れた。むこうから輝夜の声が響いてきた。

「えーりん。お腹すいたー。」

輝夜の声が響いた瞬間、優曇華と永琳は別の出口の方を向いた。その瞬間をてゐは狙い、薬を奪った。

（ちよろい・・・！）

そしててゐは俊足で外へと出た。

竹林あたりを疾走しているてゐは怪しく笑っていた。

「くくく・・・。危なかったけど、今回は容易く取れたウサ。」

てゐはこの先どんな悪戯をしようか考え出した。

「さあー、はやくそんじょそこらの人間とか妖怪にこの薬を・・・。」

「

すると竹林の中から声が聞こえてきた。

「ん・・・？」

そこにいたのはソラと妹紅だった。

「サンキューな。落とした絵一緒に探してくれて。」

ソラは手に絵の入ったケースを抱えている。

「まあ、見られたのは流石に恥ずかしかったけれども・・・。」

妹紅は絵を見て少し微笑んでいる。

「いや、でもこれいいよ。背景綺麗だし。」

「いや、あはは／＼／」

てゐはその光景を黙ってみていた。

（あそこにいるのは、姫の遊び相手と、誰？ここは確か私が掘った落とし穴デンジャー区域。そしてなんかいいムード。そして興味深いのはあの男が抱えている箱！）

その時、てゐに電流走る！

（あそこは数多くの落とし穴がある。そして二人は向かい合うようにたっている。とりあえずあの男を落とし、あの箱を手に入れる。

だが、どうやって取ろう・・・。）

「ほら、とりあえず無くした帽子探しに行こう?」

てゐが目をギンギンに輝かせた。

（帽子・・・だと。そうと決まれば・・・!）

てゐは竹林の中に隠れた。

「まあ、案外帽子も早く見つかるかもしれないぞ?」

「とはいっても、幻想郷って広いしなあ・・・。」

すると奥から声が聞こえてきた。

「あー、へんなぼーしおちてるー!」

その言葉を聞いた妹紅は声のした方向を向いた。

「あ、ほら。早速それらしい言葉が――」

ソラは目を輝かせて物凄いスピードで走り出した。

「真っ赤な誓いいいいいいいいいいいいいい!!」

「つて、おい!早いつて・・・!走ると危ないから!ここらはちょっと・・・!」

「大丈夫だって!俺別に危なくつても気にしないから、心配な」

ソラは見事落とし穴にはまった。

「いゝいゝっ!」

「案の定綺麗に落とし穴に落ちたあ!」

ソラはおかげで絵の入ったケースを空中高く放り上げてしまった。

すると竹林の中からてゐが出てきた。

「!」

てゐは笑いながらケースを手にとった。

その頃ソラは落とし穴の真ん中あたりで手足を伸ばして踏ん張っていた。

「ふんごおおおおおおおっ・・・!」

落とし穴の底には先が尖った竹が何本も突き刺さっていた。

「あ、危ねえ・・・!」

すると笑い声が聞こえてきた。

「あーっはっはっはっは!!!!」

ソラは震えながら真上を見た。

真上にはてゐがケースを抱えて笑っている姿があつた。

「はっはっは！ざまあみる！お前みたいな駄目なやつは一生そこでブルブル震えてろー！うつさっさー！変な絵ばっかだなー！」

「・・・。」

てゐは竹林を抜けて走り出した。

「その落とし穴ははまれば抜けるのに時間がかかるから追いかけて来れないもんねー！」

妹紅は青い顔をしててゐが走り去つた光景を見ていた。

「くーやさかつたらとつと私を追いかけて・・・。」

ソラは目をガン開きにしててゐを追いかけていた。なぜか手には尖つたGペンを持っている。

「・・・・・・みる？」

ソラはにたりと笑い始めた。

「逃げてみるよ・・・。その代わり、捕まつた時どうなるかはわかるよな？」

てゐは本能的に悟つた。この男は、敵にしてはいけない存在だと。

「・・・う、うさああああああああああああ！！！」

「！！！」

「符符ふふひひひっひひ非違ひひあははははははh！！！！！！」

「！！！！！」

笑い声かも分からない声でけたけたと笑いながらソラはてゐを追いかけ始めた。

「・・・あいつ、ひょっとしてすごい恐ろしいんじゃない？」

妹紅はだた遠ざかっていく2人を見守るだけしかできなかった。



すね。」

その後ろから犬走 椛がやってきた。

「文さん。やっぱり見に行くんですか？」

「当たり前です。多分原因はスキマ妖怪のスキマのせい。何かが幻想郷に入り込んできたでしょう。これは記事にせざるを得ません！ちよつとにとりにいって捕獲道具をもらってきてください！」

椛は驚いてしまった。

「捕まえるつもりですか！？」

「捕まえて何か面白い記事をかきます。相手が生物であることを祈ります！」

そっぴい残して文は飛び立った。

「はぁ……。」

「んー。」

西行寺 幽々子は竹林上空を見つめている。

「どうかしたんですか？」

魂魄 妖夢は素振りの練習をしながら幽々子に問いかけている。

「……妖夢。ちよつと様子を見てきてくれない？」

「竹林辺りですか？ヤツパリ気になるんですね。」

「ええ。なんかね、変な感じがするのよねえ。」

「変な感じ、ですか？」

「何かが入り込んできた、というより、誰かが入り込んできたみたいね。でも普通じゃないわねー。なんでかしら。」

妖夢は首をかしげた。とりあえず自分も気になるので、様子を見に行く事にした。

「それじゃあ、行ってきます。」

「お土産よろしくねー」  
♪

「**橙。**少しの間紫様を頼めるか？」

「はい！わかりました！」

橙は敬礼をした。

「さて、少し様子を見てこなければ。」

藍は外に出た。

「何か嫌なことが起きなければいいが……。」

「う、うさああああああああああああああああああ！！！！！！」

てゐる絵の入ったケースを抱えたまま泣き叫んでいた。

「ごめんなさいごめんなさい……絵は返しますからもうやめてええええええ……」

ソラはまだ怖い顔でてみを追いかけている。

「も、もう駄目……。足が……。」

てゐはもう諦めようと絵を投げた。

「なっ・・・！」

ソラは空中高く放り上げられた絵を取った。

「たくっ！危険なことをしやがって・・・！」

ソラは前をみた。だがいつの間にかてゐはいなくなっていた。

てゐるは木の影に隠れていた。

「はぁ．．．。はぁ．．．。」

てゐは怒ったような顔をしている。

「全く．．．。なんなんだあの変なやつ．．．。」

てゐは辺りを伺った。ソラはもういない。

「ふん．．．。諦めたか。全く、やっぱりあいつは私より弱いんだな。ふふん♪」

ソラはてゐの真横で笑っている。

「はははー♪でもね、そういう奴ほど怖い時つてあるよね♪」

「そうなんだよねー。あたしも時々打たれ弱いときが．．．。」

てゐは真横をみた。

「．．．．．。」

「．．．．にやり。」

その瞬間、てゐは悲痛な叫び声をあげた。

「ん．．．．？」

比那名居 天子は要石に座りながら叫び声の聞こえた方向を見た。

「なに、いまの？」

天子は叫び声のした方向をずっと見ていた。すると誰かが何かを持つて歩いてきた。

「．．．．！」

その光景を見た天子は顔を真っ赤にした。

てゐがロープにぐるぐる巻きにされて宙吊りにされている。そのロープをソラが黒い笑顔で持っている。

「．．．ごめんなさい。」

てゐがポツリといった。

「で？」

「．．．許して下さい。」

「やだ。」

「．．．もうしません。」

「立証がない。」

「．．．すみませんでした。」





「ええ!?」

「なんで驚いてるのよ!今までの文面読み返してみなさい!確実に犯人あんだ!!!!」

ソラは吃驚して後ろを向いた。

「後ろに誰もいないっての!!!!あんたよあんた!えっと、名前!名前教えなさい!」

「大田原源三郎ノ助太(笑)です。」

「偽名いいいいいいいい!!!!大田原源三郎ノ助太(笑)って絶対偽名いい!!!!」

「うるせええええええええええ!!!!俺はソラだああああああああ!!!!間違ってんじゃねえええええ!!!!!!」

といってソラは天子にびんたをかました。

「何でええええええええええ!!!!!!」

天子は地面を転げまわった。

「い、痛い・・・/ / / /」

「よし。てゐいなくなっちゃったから。代わりは天子でいいな。」

「へ?」

ソラは天子の顎に手を添えた。

「え・・・。」

「なにはともあれ、ここであつたのも何かの縁だ。よろしくな、天子。」

天子は少しだけ嬉しくなった。普段幻想郷のみんなは私のことを天子ではなく天子と呼ぶ。でも目の前の人は、優しい笑顔で私のことを天子と呼んでくれた。

「え、あ・・・。よ、よろしく、おねがいします/ / /」

ソラは笑顔で天子の首に首輪をかけた。

「・・・ソ、ソラ・・・さん?これは一体。」

「・・・よっしゃいくぞー。」

そういつてソラは天子を引っ張っていった。

「エ・・・ちょ・・・ええええええ!!!!!!」

てゐは奥に隠れてソラたちを見ていた。

「た、助かったあ……。」「

ソラたちが歩いていったのを確認し、てゐは隠しておいた薬ビンを取り出した。

「こ、こうなつたらこの薬をあの男に……。」「

てゐは怪しい笑顔になり、薬のビンをあけて木々の間から出てきた。「私に屈辱を与えた罪。重いぞ……。」「

てゐはどんどん近づいていった。徐々に怪しい笑顔が怖い笑顔になってきた。

「覚悟っ！」「

と、薬のビンを投げつけようとした。

しかしてゐは足元の石に躓いてしまった。

「えっ……。！？」

てゐは派手に転んでしまい、薬を地面にぶちまけてしまった。

「！？」

ソラと天子は吃驚して後ろを向いた。てゐは転んだまま微動だにしない。

「……。」「

てゐはゆっくりと起き上がり、ソラたちを見つめた。

「……。」「

てゐは涙目になって顔を真っ赤にしている。

「み、見りゆなああああああ！……！」「

噛んじやいけないところで噛んでしまったてゐは走り去ってしまった。

「ああ……。」「

てゐを止めようとしたが、その前に目の前から居なくなってしまった。

「なんなの、あの兎？」「

天子は首をかしげている。ソラはかがんで薬に手をつけた。

「大方、この薬かけて仕返ししようとしたんじゃない？色々と遊ん

「でやったし。」

「・・・ところで、あんた私と会って数分しか経ってないのに、なんでそんなフレンドリーなわけ？」

「とりあえず天子は一番疑問に思っていたことを言った。」

「んー。あれだ。お前は会った事ないんだろうけど、俺は会った事あるからさ。」

「天子はますます分からなくなった。」

「????」

「ま、いいさ。それより、幻想郷案内してくれねえか？俺もここ来たばかりで慣れないんだよ。」

「天子は首輪を見つめた。」

「いや、今の状況だと私、案内されそうな格好だよね・・・。」

「まあ、いいじゃん。」

「ソラたちはまた歩き出した。」

「その時、薬が少しだけ煙を吐いた。」

「ふーん。その外の世界、だっけ？そこでスキマを見つけて、虫に驚いてスキマに落ちちゃって気がついたら幻想郷に居て、そこでてゐに絡まれてそこから今の状況におちいつてるってわけね。」

「そうそう。」

「不思議なものねえ。外の世界なんて。ここよりいいところ？」

「いや、ここより最悪だろうな。」

「へえー。」

「天子とソラは他愛もない話をしていた。」

「首輪外してくれたのは嬉しいんだけど・・・。」

「しっかしほんといいところだなあ。」

「でも気を付けなさいよ。最近暇だったんだけど、時々弾幕が飛んできたり、空から何かが飛んできたり・・・。」

ソラは笑い始めた。

「はっはっは！そんなの避ければいいだけだろ。それに俺案外タフだし。」

するとソラの真上に人影が現れた。

「あ。」

天子は気がついた。

「来るなら来てみるってんだ。はははははははは！」

突然ソラのもとに誰かが降りてきた。ソラが居たところはものすごい衝撃音とものすごい砂煙が大量に舞った。

「げほっ・・・！げほっ・・・！！！」

天子は苦しそうに咳をした。

「ソ、ソラ・・・！？」

次に天子が聞いた声はソラのものではなかった。

「いったあ・・・！」

声は明らかにソラではない。もっと幼い、女の子の声。

「し、失敗しちゃった・・・。」

砂煙が風で消えていった。するとその姿がようやくみれた。

「ま、いつか。屋敷から抜けられたんだし。」

天子は驚いた。

「あ、あんた・・・。」

天子は指差して叫んだ。

「吸血鬼の妹・・・！！！」

ソラの背中に乗っていたのはフランだった。

「あれ？私誰かの上乗ってる？」

ソラは呻き声をあげて地面にめり込んでいた。

「ソラあああああ？！」

「あ、ごめーん。」

フランはぴょんと背中から飛び降りた。

「ちよつと、大丈夫！？」

ソラは口から血を吐いていた。

「げふっ・・・！！！！」

「よ、良かった。生きてた。」

「お兄ちゃん大丈夫？」

ソラはゆっくり立ち上がった。

「だ、大丈夫だ・・・。これくらい・・・。」

「いや、大丈夫じゃないでしょ！だって悪魔の妹だもの！全てを破壊する程度の能力だもの！明らか背骨だけじゃなくて内蔵までぶっ壊れる音響いたもの！」

天子が心配してソラに歩み寄った。

「・・・ねえねえ、お兄ちゃん。」

フランはソラを上目遣いでみた。

「ん、なんだ？」

「お兄ちゃんみた事ないけど、ひょっとして爆発音の人？」

「ああー。まあそうだよ。あと上目遣いで俺くらいの年の人にあまり話しかけちゃいけないぞ。その種の人は怖いからな。」

「?・・・よくわからないけど、あんな凄い爆発音出せるってことは、お兄ちゃん強いのか？」

「んー、強いのかは分からないけどなあ。まだ能力も持っていないみたいだし。」

天子は心配してソラを止めようとした。

「ちよつと・・・！危険だから弾幕勝負はしないほうがいいって！この子まじでつよいから！」

「いやー、いいじゃん。だって外に中々出れないんだろ？遊んでやったほうがいいじゃん。」

心配している天子とは裏腹にフランは大いに喜んだ。

「やったあ！それじゃあこれで、」

突然フランは吸血鬼みたいな目つきで空をにらんだ。

「コレで心置きなく壊そうとしても心配ないよね？」

ソラはニツコリ笑顔になった。

幻想へ……。 (後編)

一つの小屋の前に男がたたずんでいた。

「ふむ……。これは参ったね。」

森近霖之助は自分の店のことで悩んでいた。原因は新聞の記事に載っていた通り、白蟻のことだった。どうやら外界から来たもののどれかに白蟻が紛れ込んでいたらしく、ものの見事に家が食われてしまった。

「これじゃあいつ壊れるかわかったものではないな。」

とりあえず『近寄るな。危険!』という看板を立てておいた。

「これでよし、と。」

すると向こうから物凄い轟音が鳴り響いてきた。

「ん？」

咄嗟に音のした方向を向いた。

突如、香霖堂が爆破した。

「……………」

爆風で霖之助のメガネが吹っ飛び、髪の毛が逆立った。

「やばい! まじでやばい!!!」

その真横をソラは猛スピードで通り過ぎた。

「きやはははは!!!! 待ってよ、もうちょっと楽しく遊ぼうよお兄ちゃん」

2人が通りすぎた後、天子が息を切らして走ってきた。

「ちょ……。ま……。早い……。!」

そしてゆっくりと天子も通り過ぎていった。

霖ノ助はただ一筋の涙を流すばかりであった。

「ねえ、もっと見せてよ! お兄ちゃんが壊れるところみたいよ……」

！  
」

フランはケタケタ笑いながら弾幕を浴びせてくる。

「くっそあ、やっぱ弾幕は出ないかあ……。能力はでないのかなあ……。」

とりあえずソラは後ろ向きで走り出した。

「なあ天子い！！！！普段弾幕ってどうやってだしてんの！？」

「え！？普段って言われても……。普通に出せるんだけど……。」

」

「まじかー。」

「キヤハハハハハハハ！」

これ以上はやばい。そう思ったソラはとりあえず逃げようと思った。しかし大量の弾幕が目の前までやってきた。

「うおおおおおお！！？」

吃驚したソラは左手を前に突き出した。

すると突然フランの真横を何かが通り過ぎた。

「……！！」

それは天子の目の前にあった。

「え」

突然天子はピチュった。

「お？」

一番驚いたのはソラだった。

なんとフランの周りに空色の弾幕が大量に配置されていたのだ。

「おおおおおお！！！！」

ソラははしゃいだ。まさか自分が弾幕を出せるとは……。

「おっしゃあ！これでかて」

ソラははしゃぎすぎていたため、目の前にあったフランの弾幕にモロに激突してしまった。

ピチューン！

「きやははははははははははは！！勝ったあ！久々だけど勝っちゃったあ！お兄ちゃん壊れたあ」

フランは飛び跳ねて喜んでいる。

「ソ、ソラ！？」

天子は砂煙で見えなくなったソラを探すようにあたりを見回している。

「ああー、まずいよあ。こんな弾幕を一般人が喰らったら大変な事に……。」

「んー、物足りないなあ。ねえ、お姉ちゃん。」

天子は肩をビクつと震わせてフランを見た。

「お姉ちゃんも遊んでみる？」

「え、い、いや……。痛いのは嫌いじゃないけど死ぬのはちょっと……。てか死ねないし！！！」

「ええー、つまらないなあ。お兄ちゃんも壊れちゃったし……。」

フランがその場から帰ろうとすると、突然フランの頭が驚掴みにされた。

「?!！」

フランはその場で固まった。

「試したことが一つだけある。」

声が聞こえた。

「……。俺の能力はやっぱり俺にちなんだものだったよ。」  
すると砂煙が晴れてきた。

「……。お兄ちゃん？」

ソラがにかつと笑いながら一枚の紙をその場に落とした。

「俺さ、厨二だから、早速能力名を付けさせてもらう。」

同時にその紙が地面に落ちた。

（描符「立体的美術」リアルティアート」）

と、ソラが唱えた瞬間、紙に描かれたものが飛び出た。

「?!?!?!?!」

全員はその場で驚愕した。出てきたのはなんとドデかい弾幕。

「で、でかい!？」

天子は驚いたが、ひとまず逃げようと茂みに隠れた。

フランは目の前の空色の弾幕を見てかすかに笑った。

「・・・綺麗だなあ。お兄ちゃんの弾幕。」

その時、幻想郷が大爆発で揺れた。

「あら、地震かしら？」

幽々子はそれでもニツコリ笑ってお茶とお茶菓子を丁寧に食べ始めた。

「負けちゃったあ。」

フランは地べたにペタンと座って笑っていた。

「いやー、いい勝負だったなあ。」

「ねー。」

天子が駆けつけてきた。

「ちよつと、大丈夫!？」

「おお、天子。いたのか？」

「いたわよ!しかも被弾したし・・・!!!!」

「ソウカソウカー。ゴメンネー。」

「棒読み!」

「はあ、疲れたあ・・・。」

ソラは頭をかいいた。

「あ。」

今まで忘れていた事を思い出した。

「やべ、忘れてた。帽子帽子!」

ソラは走り出した。

「あれ、どこいくの？」

フランはソラに聞いた。

「帽子落としちゃったんだよ！それ探すために歩いてたんだ！」  
「へえー。」

するとフランはあることを思いついてにんまりと笑った。

「えへへー。」

フランは立ち上がってソラに向かってジャンプした。

「ん？」

ソラは後ろをみると、フランが目の前まできていた。

「！？」

そしてフランが肩にのって、肩車してきた。

「ぬぐを！？」

フランは悪戯に笑っている。

「へへへー。負けちゃったから帽子探すの手伝ってあげるよ。」

「手伝ってくれるのか？」

「うん！」

ソラは顎に手を添えた。

（・・・手伝ってくれるのはすげー嬉しいんだが・・・。）

ソラはフランを見た。

（・・・フランを肩車って、明らか大きい子供達にぶち殺される気が・・・。）

「お兄ちゃん、重くない？」

「あ、ああ・・・。」

「よかったあ。じゃあ早速いこー！」

ソラは仕方なく歩き出した。

「ほら、天子。いくぞー！」

ソラは天子を引きずった。

「あん、ちょ・・・痛い／＼／」

「ほんとにいいのか？霊夢。」

霊夢は神社の外を掃除していた。

「いいのよ。どうせくだらないことだろうし、それに何かあったら動きだせばいいわ。まあ、誰かが倒れたり、お賽銭に誰かがお金入れば私自身が動くかもねー。」

「それってテコでも動かないってことかよ。」

アリスは心配している魔理沙の服を引つ張った。

「心配ないわよ、魔理沙。何かあれば動くんだし、私たちが確認してくればいいわ。」

「・・・まあ、そうだな。それじゃあ霊夢、またな。」

魔理沙とアリスは飛んでいった。

「・・・ふん。」

霊夢はお賽銭箱を見つめた。

「はぁ・・・。」

ソラは息を切らしていた。

「はぁ・・・。はぁ・・・。フラン・・・!」

「お兄ちゃん、どう?」

「やめ・・・!も、もう・・・無理、だ・・・!」

「うふふ・・・。苦しがつてるお兄ちゃんかわいいなあ・・・。」

「や、やめろ!それ以上は・・・もう・・・!」

ソラの肩から血が流れ始めた。

「もうそれ以上足バタつかせて肩けったら俺の肩ぶっ壊れる!!!頼むから止めてえええ!!!」

「きゃはははは」

しかしおろすわけにもいかなかった。さっきおろそうとしたら悲しそうな目で見えてくるんだもの・・・。おろすにおろせない・・・。

「・・・はぁ。」

突然視界に影が入ってきた。

「お？」

ソラは空を見上げた。ギャグじゃないぞ。  
空には2つの影が見えた。

「なんだあれ？」

「日傘差してるからわからない！」

「箒だから、きっと魔理沙ね。」

「ほお。」

ソラは呟いた。

「ああー、帽子のことしつてないかなあ。」

天子は疑問に思っソラに聞いてみた。

「そんなに大切な帽子なわけ？」

ソラは必死な形相になった。

「当たり前だろう。あれは猫好き、というか動物好きな俺が大切に  
作ったものだ！愛情の籠った、素晴らしいものなんだ！ていうかこ  
の帽子を色んな奴にかぶせたい！」

するとフランが喋りかけてきた。

「じゃあ私がかぶってあげる！」

「フランはいい子だなー」

天子は息をつまらせた後、強気な顔をして独り言のようにいった。

「うぐっ……。わ、私だつてえ、総領娘だし、かぶればちよっ  
とは様になるのよ？まあ、そんなへんなものかぶるわけはないんだ  
けどー、もしソラがかぶってもいいって言うのならかぶってあげて  
も」

「ああ。あとで恥という名の帽子をかぶせてやるか……。」

ソラは本当に小さい声で喋った。

「え、なに？」

「いや、なんでもない。」

ソラはため息をついた。

「……。いつになったら帽子みつかるのかなあ？」

「歩いてれば見つかるでしょ？」

「いや、だって幻想郷広いし……。帽子に足がついてるわけでもないしさー。」

ソラたちは角を曲がった。

「どうどう？かわいいでしょー！」

そこにはソラの帽子をかぶったチルノが居た。

「う、うん。可愛いけど、それどうしたの？」

大妖精は困り顔でたずねた。

「生け捕った！」

「生け捕っちゃったの！？」

その周りにはリグルや橙やルーミアが居た。

「……。」

ソラは渋い顔でチルノ達を見ていた。そして天子がポツリと呟いた。

「足がついた、というか……。馬鹿がついたわね。」

「ねー。」

ソラはため息をついた。

「まあ、いいや。」

ソラはチルノ達に近づいた。

「この猫かわいいから私のペットにする！」

「大丈夫なの？それ誰かの落し物なんじゃ……。」

「大丈夫なのかー？」

チルノは明るく笑っている。

「大丈夫大丈夫！相手が取り返しに来てもあたいが倒してやる！」

「よし、早速返せ。」

そういつてソラはチルノの服を掴んで持ち上げた。

「！？」

チルノはおるか、周りの皆がソラを見て驚いた。

「だ、だれ？！」

大妖精は少しだけ退いた。

「ああ、ごめんね。この帽子の持ち主。取り返しに来た。」

「そ、そうなんですか？」

リグルは帽子をみた。

「ううー、誰だー！放せー！！！」

「放して欲しかったら帽子を返せ。」

「いやだー！これはあたいが見つけたからあたいんだー！」

「俺のだよ。裏に名前描いてあるし。ソラって。」

大妖精は帽子の裏をみた。そこには小さい文字でしっかりと『ソラ』と書かれていた。

「・・・。」

チルノは不満そうな顔でソラと帽子を交互に見た。そして勢いよく帽子をソラの顔近くにずいっと近づけてきた。多分返してくれるという証拠なのだろう。

「サンキューな。チルノ。」

チルノは残念そうな顔をして、涙目になっている。なるほど、ロリコンはこれを見て生まれるのか。

「あの、」

大妖精がかたりかけてきた。

「ん？」

「なんでチルノちゃんの名前を知ってるんですか？あなた、ここらへんの人じゃないですよね？」

ああ、そういえばこっちのやつらは俺を全く知らないのか。

「ああ、そうだよ。俺ちよーっと遠くから来たんだ。」

「遠くから来たなら、なんでチルノちゃんの・・・。」

「チルノだけじゃないぞ。お前が大妖精で、こっちがリグル。あっちの俺見て目を輝かせてるのはルーミア。あっちの猫耳は橙だろ？」  
みんなは驚いている。すると何かに気がついたのか、橙が声をあげた。

「あ、ひよつとしてあのおっきな爆発音の人？」

「正解。よく出来たなー、ご褒美に飴ちゃんあげちゃう。」

「わーい」

橙は耳をピョコつかせた。

「まあ、帽子の安否は確認できた。さーて、次は何処いこうかなあ。」

するとチルノに目がいった。まだチルノは不機嫌そうな顔をしている。

「……。」

するとフランが小声で言った。

「お兄ちゃん、いくらお兄ちゃんの帽子とはいえ、そんな可愛いものを採られたら誰でも物足りなくなっちゃうよ。なにかいってあげないと。」

「ん、ああ。」

ソラはチルノに近づいた。

「チルノ。」

「何さ。」

「この帽子はな、最強な奴がかぶると馬鹿になってしまう帽子なんだ。」

チルノは興味を持ったようにソラをみた。

「そういう不思議な帽子なんだ。みろ、俺は普通だからかぶっても普通なんだ。もしチルノがかぶったら、天才で最強なチルノは馬鹿で最弱なチルノとなってしまうんだ。」

「……。」

チルノは顔を青くした。

「嘘だ。」

「絶対嘘だ……。」

フランと天子は冷や汗を流した。だがチルノは完璧に信じてしまっている。

「あ、あたいもうかぶっちゃった……。ど、どうしよう！どうしよう大ちゃん！」

「ど、どうしようって言われても、わたしにはどうしようもできないし、」

「うあああああ！あたい馬鹿になっちゃうつうつ！」

するとソラはチルノの頭をなでた。

「なら丁度いい解決方法があるぞ。」

「か、かいけつほうほう！？」

「そうだ、もしこれを受ければ、チルノは帽子をかぶっても最強で天才のままだ。」

「おおー！教えて教えて！」

「俺たちが親友になればいい！」

「なるほど！」

チルノとソラは握手を交わした。

「・・・なんだこれ。」

リグルは平然とその光景を眺めていた。

「つまり、そのスキマに入ってこっちに来ちゃった可能性があるってことですか？」

ソラたちはその場に座り込んで話していた。

「ああ。ちよつと蜂に驚いてな。それで足滑らせてすっぱりだ。」

「じゃあ、やつぱりスキマ妖怪の紫さんに聞くのが一番なんじゃ。」

大妖精はソラにそういつてみた。

「それもいいんだけど、今はこの辺り探索してみたいしなあ。」

すると橙がこちらにかたりかけてきた。

「じゃあ、飴くれたお礼に、私が藍しやまに聞いてみます。」

「おお、それは嬉しい限りだ。」

嬉しくなった橙は素早く八雲家に走っていった。

「あとは、博麗の巫女さんに聞いてみるのはどうですか？」

「霊夢のことか？」

「はい、あの人も結界を操ってますし、何か知ってるかも。」

「そうだな。ちよつくら行ってくるか。行くぞ、フラン。天子。」

するとフランが肩から降りた。

「？」

「ヤッパリ無断で出てきたのは流石にまずいかなって思ったから、一回戻って美鈴に家出してくるって伝えてくるね！」

フランも素早く走っていった。

「ふむ・・・。」

とりあえず見送り、ソラは博麗神社に向かおうとした。

「ソラー！」

今度はチルノに呼び止められた。

「今度はなんだ？」

「次は帽子を貸してよ！あたい待ってるからね！」

正直、この帽子はあまり人の手には貸したくないのだが・・・、

「ああ、じゃあ俺たちの身に何か起こったら、この帽子を貸すから、守り通してくれよ。」

と、ありもしないことを言ってその場を離れた。

「なあ、天子。こっちに俺がきたことで何か支障はあるのか？」

天子は引っ張られながら考え込んだ。

「こっちに来たからって？んー、別に問題を起こさなきゃ大丈夫なんじゃない？第一ソラ 능력はさっきの吸血鬼の妹にやったのだけでしょ？」

「ああ。」

「あれは別に幻想郷自体に支障をきたすものじゃなさそうだし、いいんじゃないかしら？」

「ならいいんだが。」

「今日はなんだか楽しいことになりそうだなあー」

フランはニコニコ笑いながら紅魔館へと向かっていた。

「外に出たのは久しぶりだったけど、やっぱり楽しいな。お姉様には悪いけど、もうちょっと外の世界を楽しまなきゃ。」

テンションをあげて飛んでいると、顔面に何かが当たった。

「痛っ！」

それに気を取られて、体制を崩してしまった。

「あ……！」

フランは見事に地面に尻もちをついてしまった。

「いったあ……！」

フランはその場で悶絶し始めた。

「な、なんなのよオ……。」

あたりを見回したがなにもない。きっと鳥にぶつかったのだろう。

「……ん？」

スカートを見た。スカートは真つ黒な液体で汚れていた。

「な、なにこれ?!」

フランは気持ち悪そうな顔をした。するとフランは真横に転がって、るビンに目が行った。

「……これにはいつてたのかしら？」

流石に怪しい液体は気持ち悪いので、そうそうに帰って替えの服を用意してもらおうと思ったフランは急いで紅魔館へと向かっていった。

突然、かすかに残っていた薬が、煙状になって、そして消えていった。

「お、ここだここだ。」

ソラと天子は博麗神社の石段の真下に来ていた。

「なげー。上りきれるかな？」

「あたしここ上るのはきついわー。」

「じゃあここで待ってる。ちょっと話してみる。」

ソラは天子をおいて石段を登り始めた。

「え、行っちゃうの？」

天子の呼びかけを無視し、ソラは早々と石段に足をつけていった。

半分あたりで息が切れ始め、汗の流れてきた。

「ぜえ……。ぜえ……。こりや流石にきついな。久能山東照宮  
並だ……。」

それでもソラは博霊神社をみたいがために諦めなかった。

ようやく鳥居が見えてきた。

「おー！」

まるで希望を見つけたかのようにソラはスピードを速めた。帽子が  
飛ばないようにしっかりと押さえ、そしてやっと鳥居の真下に到着  
した。

「やったあ！」

汗を拭ってあたりを見回した。

「はあ……。はあ……。誰もいないな。」

あたりは誰もおらず、静かな風の音と鳥の鳴き声しか聞こえなかつ  
た。

「……。留守？」

あたりをキョロキョロしながら博霊神社の賽銭箱の前に立った。

「ふむ……。もつと賑やかなものかと思ってたけど、やっぱりち  
よつとは違うものなのか？」

見回しがてら、賽銭箱の中身を覗いた。

「うわ……。原作どおりすっからかん……。閑古鳥が鳴いてる  
ぞこれ……。」

こりや霊夢もお賽銭を求めるわけだ、としみじみと思った。

「……。まあ、こんな機械減多にないし、原作とおなじ1470円  
を賽銭箱に入れてやろう。どうせ全部揃えてるし。」

そいつって鼻歌を歌いながらお札と小銭を持って賽銭箱に投入した。

「ま、これでちょっとはご利益も・・・って、」

ソラは財布の中身をみた。

「ああ、しまった！千円と1万円間違えて入れちまった！」

焦ったソラは賽銭箱の中身を覗き込んだ。

「も、もうとれねえか？」

コレでは届かない、と観念したソラはその場で鈴を鳴らして両手を合わせた。

「仕方ないか・・・。」

ソラは何か御利益があることを信じて必死に願い事をした。

『えーっと、漫画家になれますように。できれば最初の一万円札が帰ってきますように。』

ソラはかすかに声をあげた。

「えーっと、それからー、」

突然真横から何か乾いた音が地面に落ちる音がした。

「ん？」

ソラの目線の先に、驚いたような顔をしているようにも見える霊夢が立っていた。足元には箒。多分この音だろう。

「あ・・・。」

流石にまずいと思った。見ず知らずの人間がこんなところにやってきてこんなことをしているのは流石に怪しい。

「や、違う！これは、えっと、その・・・！」

どうにか言い訳をしようと焦っていたら、霊夢が足早に近づいてきた。

「ひっ！」

その場を逃げようとしたら手を引っ張られた。

「なあ！」

そしてなぜか抱き寄せられた。

「へ・・・。」

霊夢は物凄く嬉しそうな顔をした。

「あなた、あなた最高！！まさか、あたしの神社のお賽銭箱に1万470円を入れてくれる最高な人がいたなんて！！！！」

霊夢はソラを抱きかかえたまま飛び跳ねた。

「もう、お茶と羊羹と夕飯しか出せないけど寄っていきなさい」

「え、ええええええ！！！！」

ソラはそのまま博麗神社へと引き寄せられていった。

## 微かな異変

フランはこそそと紅魔館の門前に来ていた。辺りにレミリアや咲夜が居ない事を確認した。

「よし、ちよつと美鈴に報告しなきゃ。」

フランは門の前に立っている美鈴に近づこうとした。

「美鈴！」

咄嗟に聞こえた声に反応したフランはすぐに隠れた。

「はい、どうしました？お嬢様。」

美鈴に近づいてきたのはレミリア。

『オ、お姉様！？』

見るからに怒っている。

「いい、ひよつとしたらフランが帰ってくるかもしれないから、そのときは捕まえて私のところにつれてきなさい。」

「妹様をですか？ひよつとして逃げ出しちゃったんですか？」

「そう。あなたはよくフランに遊んでもらってるから多少は仲が良いでしょーし、ひよつとしたら貴女を味方につけるかもしれないから、最初に言っておくわ。フランを見かけたら捕まえてつれてきなさい。」

美鈴は困った顔をしている。

「はぁ……。でも、それは可哀相なんじゃ……。最近はかなり暇でしたし、ちよつとは妹様にも休息を与えたほうが……。」「さすが美鈴。私のことをよくわかっていてくれる！と喜んでいて、と、

「あの子はハメを外すと大変な事をしてしまうに違いないわ！そしてたらグチグチ言われるのは私なのよ？だったらその前に問題を起こさせなくするわ！」

姉としての威厳があるのか、やはりそういうのは許せないらしい。

「で、でも……。」「

戸惑っている美鈴を駒にするようにレミリアは言った。

「もし捕まえてつれてきたら、今までインスタントお味噌汁と普通の海苔とインスタントご飯だけだったのが、咲夜の温かい手作り料理になるでしょうね。」

美鈴は拳を握り締めた。

「お任せ下さいお嬢様！」

フランはその場でずっこけた。

「め、めいりん……。」

もう館内には味方はいなくなった。これでは帰れない。

「……。」

いや、事実見方はいる。今日会ったお兄ちゃんだ。私を倒したほどの強さなら、きつとお姉さまにも……。

そう思ったフランは紅魔館を離れた。

もつと楽しみたい。もつとみんなと遊びたい。そんな思いしかなかった。あの暗い地下牢はいいものではない。もつと広い、明るい、そんな楽しい世界を見たい。

「私は、もつと……！」

「まあ、よろしくね。ちゅうご……、美鈴。」

「ちょ……。まあ、分かりました。」

「私は今から出かけてくるから。」

「あれ？どこか行くんですか？」

レミリアは少しだけ顔を紅くしている。

「う、うん。ちよつと霊夢の所に……。」

美鈴は少しだけ困った感じで笑っている。

「

「そ、そうですか。お気をつけて……。」

「ええ。じゃあ行ってくるわね、めいり・・・中国。」

「なんで言い返したんですか！言い返す必要なかったじゃん！！！」  
レミリアはそのまま博麗神社へと向かっていった。

「はぁ・・・。また咲夜さんがストレスをぶつけて来るんだよなあ。」

一旦庭の手入れをしてこようと門から屋敷内に入ろうとすると、

「おじょうさば・・・。」

思いがけず、涙で顔をぐしょぐしょにしている咲夜に出会ってしまった。

「ひゃうあぁっ！さ、咲夜さん！？」

「な、なんでれいむどどころにいくときはたのじょうなんですがぁ  
(な、なんでれいむのところに行くときはたのじょうなんですかぁ)  
・・・！」

美鈴は困り気味で笑うしかなかった。

藍は結界のすぐ近くに来ていた。

「うむ、変わりはない、か。」

てつきりなにか異変が起こっているのではないか、と思ったが・・・。

「あら、ご苦労様ねえ。」

藍は声をかけられ、後ろを向いた。

「珍しいですね。」

後ろにいたのは幽々子だった。

「結界に異変はなかったようね。」

「ええ。私の思い過ごしでした。しかし、何かが侵入してきたのは確かです。」

「生ける者かしら？」

「分かりません。動かぬものならどこかに落ちているはずですし、竹林の方に落ちたので探しにいかうとしましたが、迷ってしまうと元も子もないので。」

「そう。紫はどうしたの？」

「それが、侵入してきた者がかなりのスピードを出していたので、それにモロに顔をぶつけてしまい、今は気絶しています。」

幽々子は驚いた顔をしている。

「あら、あの紫がねえ……。」

藍は幽々子をみつめた。

「……今日は半分幽霊はいないんですね。」

「ええ、異変の原因を調べがてら、買い物に行かせたから。」

「あまりこきは使わせないほうがいいですよ。」

「ええ、善処しとくわ。」

幽々子はその場を去ろうとした。

「ああ、そうそう。」

藍は幽々子を見つめた。

「誰のかはわからないけど、危険なオーラは感じるわね。」

「……危険な、オーラ？」

「ええ、かなり微弱だけど。」

「……。」

「貴女も気をつけなさい。貴女の式もまだ未熟。常に目を見張っている事ね。」

「……肝に銘じておきます。」

そのまま幽々子は消えていった。

「咲夜には悪いけど、今日は霊夢の所に泊まっていこうかしらね。フランの事も話したいし。」

レミリアは博麗神社の前に降り立った。

「お賽銭は、まあ別に良いわね。いつものことだし。」

神社に近づいて襖をあけようとした。

「ちよつと待った。」

手をはじかれた。

「!？」

レミリアは目の前を見た。そこにはひんにゆ、もとい、伊吹 萃香がいた。

「あんた、鬼じゃない。」

「あんたも鬼じゃないのさ。」

レミリアは萃香を睨んだ。

「ここに何しにきたの？」

「そりゃ霊夢の所に遊びに来たのさ。」

「奇遇ね。あたしもよ。」

「だったら帰りな。ここはあたしと霊夢の巣だ。」

レミリアは牙をむき出しにして怒りを露にした。

「それはこっちの台詞よ。たかが鬼ごときが吸血鬼にはむかうんじやないわよ。」

萃香もレミリアを睨んだ。

「だったら試してみるかい？鬼と吸血鬼、どっちが強いか。」

二人が攻撃態勢に入ると、中から声が聞こえてきた。

「ほら、もつと食べていいのよ？」

「・・・？」

レミリアと萃香は襖を見つめた。

「いいのか？俺そういうのに目がないよ？」

「見た目はアレだけど、味はすごいものよ？ほら、柔らかいでしょ？」  
レミリアと萃香の目が血走った。

「ああ、確かに。食べごろだな。」

「あんま触らないでよ。」

「ああ、じゃあ早速食べるかな。」

なんだか卑猥な言葉に聞こえたレミリアと萃香は賽銭箱の影に隠れ

た。

「れ、霊夢は誰と何をしてるの!？」

「し、知らないよ!何かお菓子を誰かと食べてるんじゃないか!？」

「あの霊夢が幻想郷の誰かにお菓子を差し出すと思う?お賽銭もないのに・・・!」

小声で討論し始めた。それでも中から声が聞こえる。二人はそつと聞き耳を立てた。

『あんなにお金をくれたら、もう何もかも差し出すしかないじゃない。い。』

(な、なにもかも!?)

『そうか。じゃあ剥いていいんだな?』

(む、剥くだと・・・!?)

『もう、食べてイイよ?』

(や、優しい声で食べてイイだと!?!なにを!?!誰を!?)

『じゃあ、頂くとするか。』

耐え切れなくなったレミリアと萃香は中に突撃した。

「霊夢、早まるなアアアアアあああああああああああああああ  
ああ!!!」

「え、何!？」

「お、貧乳鬼コンビ。」

レミリアは牙をむき出しにしてソラに近づいた。

「貴様、あたしの霊夢に何しようとした?」

「え、なにつて・・・。食べようとしたんだけど。」

萃香は霊夢を背中によった。

「危なかったね霊夢。駄目だよ、いくらなんでもお金がなかったからってこんなことは・・・!」

「あんたら、何言ってるの?」

「殺す!なにがなんでもこの猫男は殺す!!!」

「ああ、途中から来たのなら、多分誤解受けてんのか。」

レミリアはグンニグルをソラの目の前に突きつけた。

「誤解だあ？なんだ、言ってみる。」  
ソラはお茶と柔らかい羊羹を口に含んだ。

「早とちりしてすみませんでした。」

レミリアと萃香はソラと霊夢の前で土下座をしていた。

「全く……。」

霊夢はソラから貰ったお金をお財布にしまった。

「んで、あんた達は何しに来たの？」

「遊びに来ました。」

「帰りなさい。」

レミリアと萃香は同時に顔を挙げた。

「なんでよ！」

「今日のお客はソラだけよ。他のやつらは帰りなさい。」

「ちょ、ちよつと待って！この鬼はあれでも、私はお金を多少持つてゐるわ！だから、」

霊夢は暗い顔でレミリアを睨んだ。

「今まで無銭飲食しといて今更なにぼざいてんだこの吸血鬼は……。」

「うぐ……。」

「霊夢ー。あたしは霊夢大好きだからいれてよー。」

「あたしは無銭飲食する鬼は嫌いよ。」

「ちくしょー！」

ソラは困った顔をしてあたりを見回した。

「ま、まあ入れてやるくらいはいいんじゃないのか？」

「……ソラがいうなら、仕方ないわね。」

霊夢は顔を紅くした。

「な……、なんで？なんでソラにはツンデレっぽい一面を見せるの？ていうかデレしかない……。私達長い付き合いじゃない。ね

え、霊夢・・・、霊夢！」

霊夢はソラとお茶を飲み始めた。

「長い付き合いだったわね。」

レミリアは不意に涙を流した。

「ああ、うああ・・・。うわアアアアアあああああああああああああ  
あああああん！！！！霊夢を寝取った罪は重いからなあ！！！！！！」

子供みたいに泣きながら外に飛んでいった。

「いや、寝取ってないんだけどなあ・・・。」

「ま、これにこりたら今度からお賽銭持ってきたさいつての。」

萃香はまだ残っている。

「いやー、しかし霊夢がこれほど気に入るとはねえ。」

萃香はソラの隣に座った。

「あんた、名前は？」

「ソラだ。」

「お、いい名前だねえ。あたしは、」

「萃香、だろ？」

「あれ、知ってるの？」

「ああ。」

「なら話が早いね。霊夢のお気に入りは私のお気に入りで。今後ともよろしく。まあ飲みなよ。」

「いや、俺酒が飲めないんだよね。」

「あれ、苦手？」

「いや、未成年。」

萃香は不思議そうな顔をした。

「・・・人里から来たのかい？」

「いや、外の世界から。」

「ふーん・・・。」

「ま、いいでしょそんなことは。」

霊夢は会話を断ち切った。

「それより、ソラ。今日の夕飯なにがいい？」



「誰が弱いつて？」

「ソ、ソラ！？一体いつまで神社にいいいいだだだっただだあ  
ああああああ！！！！！！」

「感心だなあ。俺のために涙を流すまで待つてくれるとは。」

「だ、だつて待つててつていつてたい・・・／＼／＼／」

「痛い？痛いか。痛いよなそりや。」

「霊夢と萃香はその光景を黙つてみていた。」

「あたし、あの領域には踏み込めないかも。」

「萃香は顔を青くしている。」

「ソラとは話があうかもね。」

「霊夢、それつて自分がSつて自覚がある？」

「だつて人いじるの楽しいじゃない。」

「それには大いに賛同するぞ。」

ソラは天子の頭を鷲掴みにしたまま笑顔で賛同した。

「あんたら怖いわ・・・。」

## 幻想郷の夜

「今日、不思議な青年に会った？」

上白沢 慧音はお茶を汲みながら妹紅の話を聞いた。

「うん。ほら、お昼頃変な爆発音なっただしょ？その原因の人。」

「ああ、あの爆発音か。それで、一体なにを話したんだ？」

「少し話した後、めっちゃ怖い顔で永遠亭の兎を追いかけてった。」

「一体てゐは何をしたんだ・・・。」

「とりあえず、何か怒らせたんだろ。」

妹紅は外を見た。

「それより、今日呼んだ理由は？」

「ああ、忘れていた。実は一緒に夕飯をと思ってな。」

「一緒に夕飯を？」

妹紅はきよんとした。

「ああ、どうやらミステイアがいい酒を手に入れたみたいでな。時にはいい気分酔うのもいいとおもってな。時

「なるほど。確かにいいかもね。」

2人は外に出た。

「しかし、その青年には興味があるな。」

「興味？」

「ああ。不思議な能力や特技を持つてるみたいだし、それに・・・、」

慧音は少しだけ顔を暗くした。

「あまり人を近づけない妹紅と仲良く出来たのも気になるし・・・。」

「なんか言った？」

咄嗟に妹紅からそんなことを言われ、慧音は顔を少し紅くした。

「い、いや、なんでもない！」

てくてくと薄暗い夜道を歩いていくと、目線の先に一つの淡い光が

見えた。

「お、あつたあつた。」

目的のミステリアの屋台についた。

「あ、いらっしやい！」

ミステリア・ローレライは明るい笑顔で妹紅達を迎えた。

「今日は久々にお酒をと思つてな。」

慧音と妹紅はのれんをくぐった。

「皆目的は一緒みたいですねー。」

目的？と疑問に思うと、真横から声が聞こえてきた。

「あら、慧音じゃない。」

慧音達は真横を見た。

「霊夢じゃないか。」

「貴方達もお酒目当て？」

「ああ。」

「分け前が減っちゃうわねー。」

霊夢は不機嫌そうにおでんを食べている。

「相変わらずだな。ところで、一体どんなお酒を仕入れたんだ？」

「ああ、えつとですね、」

ミステリアは足元を探つてとつくりを取り出した。

「これです。焼酎。純度高いんですよ。」

嬉しくなったミステリアは妹紅達の前に猪口をおいて、ゆつくりと焼酎を注いだ。

「みて下さいよ、この透明感！透き通った飲みやすさと深い味わい！手に入れるの難しかったですよー。」

「おお、凄いな！」

慧音は久々に感じる酒のさわやかな香りを堪能し、一口で焼酎を飲んだ。

「ん……。すごいな。本当に飲みやすい。」

「本当だ、いい酒仕入れたなあ、ミステリア。」

すると横から霊夢が会話に介入してきた。

「・・・でも、そのいい酒を悪くする飲み方してる鬼がいるんだけどね。」

全員が一斉にその問題の方向を見た。

「もつと酒もつてこおおい・・・!!」

萃香が焼酎を美味そうにがぶ飲みしている。萃香の足元には焼酎が入っていたであろうとつくりが何十本も転がっていた。

「なんとというか、霊夢もよくつるめるな・・・。」

「慣れれば面白いわよ。」

と、慧音たちと他愛のない会話をしていた。

「よしと。」

ミスティアがお皿に色々な具材を入れ、奥のほうへと向かっていった。

「？」

すると奥からミスティアの声が聞こえてきた。

『お待ちせしましたー。』

『おお、サンキューな。』

誰か入るのか？と妹紅と慧音が奥を覗き込んだ。

「？・・・魔理沙？」

黒い帽子が見える。明らかに魔理沙の帽子だ。しかし見るからに青い顔をしている。

すると霊夢が落ち着いた顔で慧音達に言った。

「ああ、向こうにはあまり行かない方がいいわよ。ま、止めはしないけど。」

「・・・？」

気になって仕方がない慧音達はそろそろ店の奥に進んだ。

「なになに・・・？」

すると目の前にオレンジ色の猫耳の付いた帽子が目にはいった。

「・・・!!？」

次の瞬間、慧音達は驚愕した。

ソラがおでんを食べていた。机の上で。しかし驚いたのはそこじやなかった。問題は座っている椅子のほう。

椅子が明らかに人だった。しかもその正体は顔を紅潮させて息を荒げている天子だった。

「な、なんだこれ!？」

慧音は吃驚して退いてしまった。

「ソ、ソラ!？」

その声に気付いたソラは慧音達のほうを見た。

「おお、妹紅!また会ったな!」

「あ、ああ・・・。」

すると天子がか細い声をあげた。

「ソ、ソラあ・・・。重い、すつごく重いし、膝の甲に砂利が刺さって痛い・・・。なんか、すつごいおかしい気分なんだけど・・・。／＼／」

「そうか。じゃあもつと頑張れるようにおでんをあげようじゃないか。」

ソラは箸でおでんの具をつまんだ。

「はい、がんも。」

そして思いきりがんもを顔面に当てた。

「はうあぁっ・・・!あ、熱いいいいい・・・。／＼／＼／＼／」

「はっはっは・・・。」

ソラは嬉しそうに微笑を浮かべている。

「・・・妹紅。この幽香そっくりな青年が、お昼頃会った不思議な青年、か?」

「・・・うん。」

「ほお、外の世界、から?」

「ああ。ちよいとスキマに吸いこまれてこっちの世界、にな。」

慧音はほろ酔い気分でソラに話しかけた。

「てことは、何か色々知識はあるのだろう？外の世界がどんなのか聞かせてはくれないか？」

ソラは色々思い当たる事を言葉にした。

「うーん、例えば……。広い道を機械が物凄いスピードで走り抜けたら、空を飛ぶ大きな鉄の塊があったり、飛び出して見えるテレビがあったり、まあ便利だけど、あまり面白みはないよ？幻想郷の住人みたいに皆能力を持つてないし、犯罪はけっこう起こるし。」

慧音は唸り声をあげた。

「なるほど……。私の知らない事も多いのだな。勉強になった。

さあ、飲みなさい。」

慧音はソラにお酌をしようとした。

「ああ、いいですいいです。俺、酒飲めないんで。」

霊夢は驚いた。

「あれ、ソラお酒飲めないの？」

「飲めないっていうか、俺まだ未成年だし……。」

その言葉を聞いた皆が首をかしげた。

「……未成年？」

「……。ああ、幻想郷の奴ら絶対に10代の奴とかいねえよな。えつとですね、未成年っていうのは、まだ大人になりきっていない人をさす言葉で、お酒とか飲めない決まりになってるんですよ。」

すると萃香が驚いてソラに近づいてきた。

「そ、そうなの！？じゃ、じゃあそっちの世界の未成年っていう人たちはお酒を飲めないのかい！？」

「飲めないっていうか、大体の人は呑んでませんよ。少し危険な領域に入り込みたい奴らは飲んだりしますけど。」

「なんだあ、もったいないなあ。」

「ほんと、もったいないわね。」

後ろから声が聞こえてきた。皆は咄嗟に後ろを向いた。

そこにいたのは幽々子だった。

「あら、幽々子じゃない。貴女もお酒？」

「お酒も良いけど、夜雀の作る料理も楽しみなのよね。妖夢、座つていいわよ。」

「いえ、私は立っています。」

「いいから、私の隣に座りなさい。」

強引に妖夢は引つ張られ、隣に座らされた。

「あ、は・・・はい。」

妖夢は照れながら幽々子にぴったりくつついた。

「夜雀ちゃん。うな重頂戴。それと新しいお酒も忘れずにね♪」

「はい。」

幽々子の前に焼酎がおかれた。

「・・・あなたね。幻想郷に入り込んできた人は。」

ソラはゆつくりと幽々子のほうを見た。

「・・・ええ。」

「カワイイ帽子ねえ。妖夢にかぶせていい？」

「え、ちょ・・・、幽々子様!？」

「もちろんですとも。ていうかかぶらせてください。」

「勝手に決めないでください!」

妖夢はネコ帽をかぶらされた。それからずっと妖夢はてれたまま顔を俯かせている。

「カワイイなこん畜生。」

ソラは小声で言った。

「でしょう。妖夢はかわいんだから♪」

幽々子は愛でるように妖夢に頬ずりした。

皆が美味しい酒のおかげでほろ酔い気分になって来た。月明りがあたりを照らす中、ミステリアの屋台の周りは盛り上がっていた。わいわいがやがやと酒を飲んだり、会話を楽しんだりした。

特にソラは幻想郷に来たという高揚感からテンションが上がっていた。妹紅に会ったり、天子に会ったり、現実ではありえないことが起こったことがとても嬉しかった。厨二病の彼が能力を手に入れ、実際にフランと戦ったことが、心が跳ねるくらい嬉しかったのだ。

想像以上だった。幻想郷の住人は皆優しく、心が温かい。初めて出会ったこんな俺でも温かく迎えてくれた。やはり日常とは大きく違った最高の場所だった。

「しかし……。」

魔理沙がむりやり萃香に焼酎を一気飲みさせられ、ソラの後ろでぶっ倒れ、幽々子はミステリアを食べようとし、霊夢はかなり酔って慧音と妹紅にグチを零し、天子は顔を紅潮させながら息を荒げている。

あまりにも可笑しな光景だが、これはコレで面白い。自然に笑いがこみ上げてくるほどだ。

「おい天子。どうした？」

魔理沙がふらふらな状態で天子に話しかけた。ソラは天子達のほうを見た。

「んー、別に。ただ砂利に足を付けすぎたせいで傷がついちゃって……。」

「大丈夫かよ。」

「大丈夫よ。痛いけど別に支障はないし。」

天子が自慢げに話している。それを見たソラはミステリアに話しかけた。

「ミステリア。ちょっと焼酎頂戴。」

「あれ、飲めなかったんじゃないですか？」

「別のことに使ったよ。」

純度の高い焼酎を手についたソラは天子に話しかけた。

「天子、膝だせ、膝。」

天子はきよんとした。

「え、な……なんで？」



霊夢と萃香を持ち上げた。

「ほら、そろそろ帰るぞ。」

霊夢と萃香はええー、と不満を零した。

「あんま飲みすぎると馬鹿になるぞ。」

それを聞いた幽々子も、

「そうね。私たちもそろそろおいとましましょうか。」

幽々子はミスティアに言った。

「夜雀ちゃん。焼酎を何本かお土産にちょうだいな。あと食べ物もね。」

「あ、はい。」

ミスティアは支度をした。

「まだ飲み続けるんですか？」

「明日からよ。心配ないわ。」

妖夢はため息を吐いてお土産の袋を手を取った。

「それじゃあ、皆も気をつけなさいね。」

幽々子が飛び立とうとした時、不意にこっちをむいた。

「ソラ、って言ったかしら？」

ソラは呼び止められて幽々子のほうをみた。

「なんですか？」

「ここにきたというのなら、思う存分楽しんでいきなさい。でも、幽々子は微笑を浮かべた。

「おいたは、しちゃだめよ？」

そういつて幽々子達は宙に浮き、消えていった。

「・・・おいた、ねえ。」

ソラは霊夢と萃香を引っ張りがてら声をあげた。

「じゃあ俺たちは帰るわー。霊夢に泊まってくって約束しちゃったし。」

ソラは振り向いて妹紅に言った。

「また明日そっちに遊びにくよ。またな。」

霊夢はソラにグチを零している。

「うがー、まだ飲み足りないぞー！」

「はいはい、あとでフルーティなものでも作ってやるから。」

「なんか、すごいやつだったな。」

慧音は驚きの声をあげていた。

「うん・・・。」

妹紅と魔理沙は同時に頷いた。

「ところで、」

魔理沙は奥のほうを見た。

「ソラが、私を・・・心配・・・。えへへへ♪」

「このDMどうする？」

周りにいた慧音達が同時に言った。

「放置しておけ。」

妖怪の山の頂上。そこには守矢神社がある。夜と言つのもあり、流石に静かだった。

しかし中ではこんな会話が繰り広げられていた。

「この焼酎、流石だね。」

八坂 神奈子はいいい気分の中焼酎を飲んでいる。

「そうだねえ、神奈子。」

その隣では守矢 諏訪子が無邪気に焼酎を飲んでいた。

「しかし、今日はなんだか不思議なことがあったねえ。あの爆発音、外から来た人なんだってよ。」

「え？そうなの？」

「今霊夢の所にいるみたいだね。烏天狗が取材につて張り切ってたよ。」

「へえー。」

「一瞬烏天狗が見に行つて来て、色々教えてくれたよ。どうやらそいつ、かなりの甘党らしい。」

「甘党？」

「甘いものが大好きなやつってこと。」

「へえー、早苗みたい。」

なんて他愛のない会話をしていると、突然外から誰かの疾走する音が聞こえた。

「・・・？」

諏訪子と神奈子は首をかしげた。

「さーて、今は霊夢さんのところにいるとのこと。早速深夜取材です。」

文が飛び立とうとした。

すると後ろから爆走する足音が聞こえてきた。

「あやや？」

文は後ろを向いた。

なぜか後ろからは目を見開いた東風谷 早苗が走ってきていた。

「あややや！？」

早苗が文の前に止まり、文の肩を鷲掴みにした。

「文さん、今すぐ私を霊夢さんの所に連れて行ってください！今すぐ！」

「あややや！？い、いいですが、どうしたんですか？！」

「決まってるじゃないですか！甘いものです！！！」

「へ？！」

文と早苗は博麗神社前に降り立った。

「甘いもの、ですか。確かにその人が甘いものの好きと叫んでいたのは耳にしましたが、それがフルーツ好きにつながりますかね？」

「分かりませんが、私が元いた外の世界にどんなお菓子やフルー

ツがあるのか気になるだけです。」

「目が怖いです。早苗さん。」

早苗は息を荒げながら襖に近づいた。

「ま、まあ……。フルーツが有るとは限らないですし……。第一、私はそこまでフルーツが、大好きなわけじゃ……。い、いや……。大好きですけど、それでも、別に……。ふふふ」

早苗は震える手で襖をあけた。

「お、おじゃまします！」

ソラが声をあげた。

「どうだー。俺が作ったフルーツパフェは。」

霊夢は驚いた顔をした。

「す、すごい。こんな美味しいもの、はじめてかも……。」

萃香も同様の反応をしている。

「すごいなー、こんなもの作れるなんて。」

「だろー。」

早苗は霊夢達が食べているフルーツパフェを黙視した。

そりやもう綺麗なものだった。ソラは料理自体はかじる程度だが、なぜか甘いものを作るときだけは人一倍凄い力を発揮する。自分の好きなものなら尚更だ。フルーツは何処から出てきたかは聞かないでいただきたい。

「描いたものでも食えるんだな……。」

と、ソラは聞こえないようにぼそりと呟いた。霊夢は無我夢中でパフェを食べながら目の前に立っている早苗をちらみした。

「でも、フルーツだからねー。こんなの早苗がみたらまずいことにぶへっ！2Pカラアアアっ！？」

霊夢は咳き込んだ。早苗は物凄い怖い声で霊夢にたずねた。

「霊夢さん。誰ですか？その綺麗なパフェを作ったというその人は。」

霊夢は慌てた。

「あ、い……。いや！この人は、その……！」

文も遅れて中に入ってきた。

「あやや！その人が幻想郷に入ってきた人ですか！」

「あ、文?!」

早苗は無言で侵入してきて霊夢の手元にあったフルーツパフェを黙視した。

「・・・。」

無言でスプーンを霊夢から奪い取り、一口掬って口に入れた。

早苗はスプーンを落とした。

「さ、早苗？」

霊夢は早苗の方に触れた。

「・・・名前は？」

「へ？」

「その人の、名前です。」

早苗はソラを指差した。

「・・・ソラ、だけど？」

早苗は立ち上がってソラに近づいた。

「え？」

ソラはきょとんとしている。

すると早苗がソラの手を取った。

「はい？」

早苗は半分笑い、半分今にも襲ってきそうな顔をしていた。

「ソラさん、どうです？うちの神社にも来てみませんか・・・？」

「はい!？」

周りが驚愕した。早苗の手は震えている。

「あのパフェおいし・・・じゃなかった。こんな小さな神社より、うちの神社はひろいですよー？」

「ちよつと・・・！狭いってどういうことよ!」

「貧乏巫女は黙ってて下さい!」

「誰が貧乏貧乳腋巫女よ!」

「霊夢、誰もそんなこと言ってないよ……。」

「うすうす感づいているんでしょう。」

霊夢と早苗は討論しあった。

「大体、あんたにソラを連れて行く権利ないでしょ！ソラは私が面倒見るの！」

「面倒つて……、ご飯作ってもらってるだけじゃないですか！」

「ソラは私のお賽銭箱に1万470円も入れてくれたのよ？大体の人間はあんたの所にお賽銭入れてくけど、ソラだけは私の所に来てくれたわ。こりやもう嫁に迎えるしかないでしょ！」

「俺は男だ！！！！！」

「こんな歓迎の仕方じゃ誰も喜びません！こっちには美人な神奈子様とめっちゃカワイイ諏訪子様がいるんですよ？ついでに私も付いてきます！」

「あんたはただの2Pカラーでしょうがっ！」

「あなたはただの貧乳腋巫女でしょうがっ！」

「お前ら醜い争いすんな！みてるこっちが悲しくなる！」

ソラは即座にツツコミを入れた。そういつてる間にも霊夢と早苗は取っ組み合いを始めた。

「よこして下さい、フルーツウ！！！」

「帰りなさいこのフルーツデイズが！」

とにかく霊夢達を止めようと周りが動き出すと、突然早苗の頭にチヨップが食らわされた。

「えぐっ？！」

早苗はその場に崩れた。

「？」

皆は早苗の後ろを見た。

「全く……。」

早苗の後ろには神奈子と諏訪子がいた。

「ごめんね、早苗が迷惑かけちゃって。」

神奈子は早苗を引きずった。

「あんたがソラかい。なら、今度うちにも遊びにきな。」

そういつて神奈子達が帰っていった。

早苗達が帰った後は静けさが蘇った。

「一体なんだったのかしら。」

「さあ？」

少しの間沈黙が続いた。

「・・・ま、早苗最近フルーツ食べてないって言ってたからねえ。」

霊夢は部屋を移動した。

「あれ、どこいくんだ？」

「お風呂沸かしてくる。」

ソラは驚いた。

「あれ、風呂なんてあったのか？」

「そりゃあるわよ。うちのお風呂けっこう広いのよ。お湯沸かしてくるからちよつと待ってて。」

「ああ。」

ソラは萃香と向き合った。

「なあ萃香。」

「ん、なんだい？」

「その焼酎、何杯目？」

「んーっとね、今飲んでるので、一升瓶8本目くらいかな？」

「おっそろしい・・・。」

## 深夜の幻想郷

永遠亭の薬の貯蔵庫に永琳が立っていた。笑顔で。

しかも永琳の足元にてゐるが体育座りさせられていた。

「……。」

てゐるは冷や汗を流している。

「なんでこんなことされてるのかわかってるわよね？」

「……師匠の、薬を、勝手に持ち出したから。」

てゐるはか細い声で答えた。

「そう。貴女が無断で薬を持ち出して、拳句の果てにその薬を転んでぶちまけてしまった。そして今の今まで黙ってたのはいいものの、薬のことを大妖精たちが教えに来てくれたからばれてしまった。」

「……師匠の言うとおりです。」

「今からどうなるかわかるわよね？」

「……多分。」

「言ってみなさい。」

「……お仕置きされます。」

「どんなお仕置きが良いか選ばせてあげるわ。」

永琳は笑顔でいろいろなものを取り出した。

「一日姫の言う事全てをドロワーズとさらしただけ着ながら聞くか、私の薬の実験台になるか、永遠亭の看板になるか。ちなみに看板は外でずつとさらされているからね。」

てゐるは冷や汗を流した。

「……どれか選ばなきゃ駄目？」

「だーめ。」

てゐるは外でこちらの様子を見ている優曇華と輝夜を見た。

だが優曇華と輝夜は静かに首を振った。その行動を見たてゐるは涙を流した。

「ほら、橙。あーん。」

「あーん♪」

藍と橙は一緒にご飯を食べていた。

「どうだ、美味しいか？橙。」

「はい！とっても美味しいです、藍しゃま！」

「そうかそうかあ。可愛いなあ、橙は♪」

2人が楽しそうにしてる中、隣の部屋が気になって仕方がなかった。

「・・・紫様、まだ起きないんですね。」

「ああ、けっこう強く頭を打っていたからな。だが問題はそこじゃなくて・・・。」

藍は横目であるモノをみた。

「このスキマが消えないことなんだが・・・。」

問題はスキマだった。紫が気絶した事で、このスキマがずっと発動したままなのだ。

「またなにか別なものが入ってこなければいいのだが・・・。」

色々と考え込んでいる間に橙がご飯を食べ終わった。

「ご馳走様でした！」

「ん、ああ。お粗末様。」

すると橙がポケットから飴玉を取り出した。

「？・・・橙、どうしたんだ？それ。」

「これですか？今日猫帽子をかぶったお兄さんから貰いました！」

「お兄さん？」

橙は説明してみた。

「えつとですね、なんか外の世界から来たって言ってました。爆発音と関係ある、って言ってたような気が・・・。」

それを聞いた藍は驚いた。

「橙、会ったのか！？その男と！」

藍の意外な行動に少しだけ退いてしまった橙だが、

「え、あ．．．はい。今日の昼頃、遊んでいる時に．．．。」

「他には．．．？何か変わったところはなかったか！？」

橙は考え込んだ。

「えーつと．．．。」

藍は冷や汗を流した。

「あ、そういえば！」

藍は息を呑んだ。

「フランちゃんを肩車してました。すごいなついてましたよ？」

「あの吸血鬼の妹が？！」

改めて幻想入りしてきた者が恐ろしい事に気づいた藍だった。

「総領嬢様！。何処にいるんですかー？」

永江 衣玖はあたりをキョロキョロしながら天子を探していた。

「全く、朝方からいなくなっただかと思えば夜遅くまで一体何をしているのやら．．．。ぜっぺ．．．、総領嬢様あ？」

衣玖はミステリアの屋台の近くに来た。

「屋台．．．。」

衣玖は暖簾をぐぐり、ミステリアに話しかけた。

「あのオ、ここらへんに髪が青くて長い、帽子のここらへんに桃が付いた馬鹿みませんでした？」

ミステリアは困った笑顔のまま真横を指差した。

「．．．？」

衣玖は真横を見た。

「ああ．．．。変、変な気分なのオ．．．。身体がじわじわして、トロンってなってきた、熱くなって、嬉しくなってくる．．．。この気持ちはなに？なんなの？」

と身悶えしている天子をみて衣玖はため息を吐いた。

「すみません。すぐ連れて帰りますんで。」

衣玖はミステリアにお辞儀をし、天子に近づいた。



フランは少しだけ退いた。

「ほら、怖くないですから。」

「やだ。美鈴も裏切ったもん……。」

美鈴は少し首をかしげた。

「お昼頃、ここに来た。美鈴なら一緒になってくれるって思ってたのに……。咲夜のご飯に負けて……。」

ああ、と美鈴は引きつった笑顔になった。

「あ、あれは違います！あれはですね、お嬢様の味方のふりをしただけなんです！」

「そ、そうなの……？」

「そうです！」

フランは少しだけ信用を取り戻したみたいだ。美鈴はフランの頭をなでた。

「私も、一緒に謝りに行きますから。さあ、戻りましょう。」

「う、うん！」

フランは笑顔になって美鈴の手を握った。

「あれ、その御尻の真っ黒な汚れ、どうしたんですか？」

「汚れちゃった！」

「泥遊びですか？」

「ううん。お兄ちゃんと遊んでて汚れちゃったの！」

「そのお兄さんつれてきてください。ぶち殺しますから。」

「？」

少し小さな誤解が生まれた。

「ひいつ！？」

ソラは背筋を振るわせた。

「な、なんだ……？今何か凄い勘違いをされぶち殺されそうな感覚におちいった……ような。」

今現在ソラは霊夢が沸かしてくれた風呂にはいつている。

「・・・きつと風だな。窓開けっ放しだし。」

とりあえず肩までお湯に浸かり、体を温めた。

「しかし、幻想郷に来て尚こんな広い風呂には入れるとは、生きて良かったなあ。」

ソラは汗を流した。

「ていうか、死んでんじゃねえの？」

一番思っていたことを口に出した。

「・・・ありえる。」

唸り声をあげたソラは天井から差し込む電球の光を見た。

「・・・死んだのなら、せめてさよならくらいは言いたかったよな！。死んだと決まったわけじゃないが。まあ、死んだならこの幻想郷で暮らせばなんら問題はない。とりあえず、ラノベ的展開では誰かが風呂にはいつてきてラッキースケベ！展開になるんだろうが・・・、そんな嬉しい期待はしなくてイイだろう。まあ、天子とかなら入ってきそうだが・・・。あいつほんとに絶壁なんだなあ。」

へらへらと笑っていると、脱衣所から声が聞こえてきた。

『ソラー。湯加減はどう？』

「ん、ああ。丁度良いぞ。気分がいい。」

『そう。それはよかったわ。』

と機嫌の良さそうな声が聞こえてきた。

『じゃあ、私も今から入るわね。』

「・・・はっ!？」

ソラは霊夢の意外な言葉に奥まで身を引いた。

霊夢はタオルで体を隠したまま入ってきた。なんで!？

「何でって言われても・・・、背中を流しに来たのよ。」

「せ、背中流しといわれても・・・!お、俺男だし!ていうか絵面と文面的にヤバイ!!!来いよアグネス&石原になりそうで!!!」  
「なにいつてんの?」

ソラが慌てているのとは裏腹に霊夢は冷静に近づいてきた。

「ほら、この椅子座って。背中ながすから。」

ソラは顔を真っ赤にした。

「いやいやいや！！！！無理無理無理！！！！紫とかレミリアにぶち殺される！！！！」

「そんなのどうでもいいわよ。お礼くらいはさせなさい。」

そういつて霊夢に無理やり腕を引っ張られて椅子に座らされた。

「え、ええええ……！！！！」

仕方なく霊夢に背中を洗ってもらった。少しの間沈黙が続いた。というか、霊夢の息遣いが近くてなんだか恥ずかしくなってくる。これが二次元の威力か……、と手を震わせていると、

「どうしたの？」

霊夢がそう問いかけてきた。

「うひゃい！？」

ソラは背筋をゾクツとさせた。

「……？」

「あ、わ……悪い。」

ソラは猫背になった。

「……ありがとね。」

突然霊夢にそんなことを言われた。

「……？」

「お賽銭。あなたのおかげで少しだけ力が沸いた気がするわ。」

霊夢はかすかに笑った。

「最近だね、お賽銭も少ないからやっていけるかも不安だったわ。信仰心も集まらないしね。知ってた？お賽銭って入れてもらえるだけで信仰心が集まるのよ？ソラがお賽銭を入れて、願い事を思えばそれだけで信仰心が集まる。とても嬉しかったわ。それに、暇だったこともあって、今日は楽しさが倍になったし。」

霊夢のその言葉にソラは少しだけ照れ、頬をかいた。



## そして起こる、幻想郷の異変

「大丈夫ですよ、妹様。」

フランは美鈴の背中に隠れたまま喋ろうともしない。

「・・・あ、咲夜さん。」

角から出てきた咲夜に話しかけた。

「あら、美鈴。門番の仕事はどうしたの？」

「それどころじゃなくて・・・。」

「・・・？」

咲夜は美鈴の背中を見た。

「!!!・・・い、妹様!？」

咲夜が声をあげるとフランはビクツとなつて震えた。

「今まで何処いたんですか？心配したんですよ？」

咲夜が優しく心配しても起こられると勘違いしているフランは美鈴の背中で震えていた。

「とにかく、今すぐお嬢様に・・・!」

「あ、咲夜さん・・・!」

美鈴が止める間もなく咲夜は時間を止めていつてしまったようだ。

「・・・。」

美鈴はフランの様子を見た。明らかに怖がっている。

「妹様・・・。」

美鈴はその場にしゃがみこんでフランを抱き寄せた。

「・・・!」

「大丈夫です、妹様。私がついてますから。」

フランは小さく頷いて、

「・・・うん。」

と、か細い声でいった。

数分後にフランと美鈴はレミリアの部屋の前に着いた。

「……。」

美鈴はフランの背中に手を添えた。

「さ、行きましょう。」

美鈴はドアをノックした。

『……入りなさい。』

と、レミリアの声が聞こえた。

「……。」

フランは覚束ない足取りで前に進み、ゆっくりと重たいドアを開けた。

「……失礼します。」

美鈴は頭を下げた。

レミリアは椅子に座っていた。その様子を見たフランは一步だけ下がった。

「……妹さ」

「フラン、こっちに来なさい。」

フランは肩を振るわせた。どうやら動けだせないらしい。

「行きましょう、妹様。」

一緒に行こうとするとレミリアが声をあげた。

「美鈴はそこにいなさい。」

そういわれた美鈴は足を止めた。

「……。」

フランは意を決したのか、一步一步重い足を運んだ。

数秒後にレミリアの椅子の前についた。レミリアは無表情で前を見つめている。

「…………め……なさい。」

フランは小声で何かを言った。レミリアは反応はしていない。

「……ごめん、なさい。お姉様。」

レミリアは音を立ててその場に立ち上がった。フランは吃驚してスカート裾を握り締めた。

するとフランがこちらを向いた。

「・・・？」

フランは上目遣いでレミリアを見つめた。

次の瞬間、フランはレミリアに頬を叩かれた。

「っ・・・！！！！」

「妹様・・・！」

フランはその場に倒れた。美鈴は駆け寄ってフランを抱き起こした。  
「・・・どれだけ心配かければ気が済む訳？」

レミリアは怒りをあらわにしてフランに言った。

「ただでさえ太陽の光に弱いのに、あなたはどれだけ馬鹿なことをしたのよ！勝手に家を出て、なにか変な爆発音が響いた中外で遊んできた？ふざけるんじゃないわよッ！！危ない事くらいあなたでもわかるでしょ！」

レミリアの怒鳴り声を聞きつけたのか、咲夜とパチュリーが部屋に入ってきた。

「少しはこっちの身にもなりなさい！もう貴女の我儘は聞きたくもないわ！今すぐ部屋に戻りなさい！今すぐ！！！！」  
わがまま

レミリアはそのまま部屋を出て行ってしまった。

「ちよつと、レミィ！？」

パチュリーはレミリアを追いかけていった。美鈴はそれを見送った後、フランを見た。

「大丈夫ですか？妹様。」

フランは頬を押さえたまま動こうとしなかった。

「今すぐ、頬を冷やさなきゃ・・・。」

その場を動かこうとすると、フランが突然動き出して美鈴を突き飛ばした。

「っ？！」

美鈴はその場に倒れた。フランは物凄いスピードで部屋を出た。

「妹様!？」

美鈴はすぐ起き上がり、部屋を出て追いかけようとした。

しかしフランはもうその場にいなかった。

「妹様……。」

美鈴はその場に立ち尽くしていた。

フランは既に外に出ていた。門を出て、茂みの中を突き進んでいった。

「ごめんなさい……。ごめんなさい……。」

フランは眼から涙を流した。

「ごめ……。なさ……。ゴメ、うあ……。うああああああああああん!!!」

フランは大声をあげて泣きながら走った。無我夢中で林の中を駆け抜け、行くあてもない道を突き進んだ。

なぜ外に出てしまったのか分からない。外に出ても迷惑をかけるだけなのに、怒らせてしまうだけなのに、何故外に出てしまったのかが分からない。

きつと、レミリアにもう顔を見せなくなかった。そう思ったからだろう。あんなに怒ったレミリアの顔をフランは今まで見たことがないからだ。あんなに怒りを露にした顔。それでいて、悲しそうだった顔。それがみたくなかった。そして、自分の情けない姿を、レミリアにこれ以上見せたくないかったのだ。

フランは石に足を躓かせて転んでしまった。

「あぐつ……。!!!」

派手に転んでしまい膝やふくらはぎに傷が出来てしまった。

「い、痛い……。」

フランは起き上がれなかった。痛くて、悲しくて、虚しくて、体に力が入らなかった。



なんと、その煙がフランの傷に侵入していた。

驚愕したフランはその場に尻もちをついた。

フランは咄嗟に能力を発動して煙を破壊しようと試みた。

「な、なんで……？なんで壊れないの！？」

どんどん煙がフランの体内に侵入してきた。

突然目の前の空間が歪み始めた。

目の前がぐるぐる回転し始め、そして徐々に黒くなってきた。どんな視界が奪われる。

フランは今まで感じたことのない恐怖に身を振るわせた。

ああああ！！！！！！」

[illegible]

# ん?

ソラは窓の外を見つめた。

「どうしたの？」

レミリアは椅子に座って背中を流してもらっている。

「いや、今何か聞こえた気が……。気のせいかな？」

霊夢に視線を戻し、お湯で泡を流した。

「ありがとね。」

霊夢とソラは一緒に湯船につかった。

「はああああーっ」

同時に脱力の声をあげた。

「……………って、馴染んでどうするっつうっ！……！」

ソラは大声をあげた。

幻想郷の端。決壊が張られているこの場の空気が一変した。

次の瞬間、結界にひびが入った。決壊はどんどん崩れ去り、最後には破片となって辺りに飛び散った。

すると結界の奥から何かが入り込んできた。

『美しい……。このような場所が存在するとは……。』

怪しい笑い声をあげたその大きな影は後ろにいた者達に声を張り上げた。

『諸君、今から命令をする。』

この村の住人を片っ端から捕らえるのだ。そして捕らえた人々を人質にするのだ。わかったか！』

その声とともに、周りにいた者達が罵声をあげた。

「！？」

藍は今まで感じたことのないさつきを感じ、決壊が張り巡らされている方向を見た。

「な、なんだ・・・、今の殺気は・・・？」

藍はすぐ立ち上がり、橙にいった。

「橙！今から結界を見てくる！私が出て行ったら戸締りをして、私が帰ってくるまで誰も中に入れるな！」

橙は首をかしげた。

「？・・・はい、わかりました。」

藍は家を飛び出た。橙は紫のすぐ傍について遊び始めた。

「一体どうしたんだろう？藍しゃま。」

少し寂しそうに声をあげた橙はすぐに戸締りをした。

全ての戸締りを確認し、安堵の息を吐いた橙は奥を見つめた。

「・・・紫様のスキマ、まだ出てる。」

スキマはうねうねとくねり、気味悪く蠢いている。

「・・・。」

橙は部屋の奥にひっこんだ。そして紫のすぐ傍に座り、自分を安心させた。

「・・・一人は寂しいなあ。」

と呟いて、近くにあった小さなボールを投げたりして遊び始めた。

「このボールも藍しゃまと一緒に遊ぼうと思ったのに。」

少しだけボールを強く投げてしまい、壁と天井で跳ね返り、ちょうど紫の顔面にぶつかってしまった。

「ふにゃ！？」

紫は少しだけ苦痛の顔を浮かべた。

「ん・・・。」

その時だった。スキマが少しだけうねりが激しくなった。うねりが激しくなり、どんどん肥大化して言った。

うねりが最高潮に達し、そしてうねりが止まった。

すると、スキマの中から青い色をした巨大な手によきつとのおびてきた。

「紫さま、大丈夫かなあ？」

橙が心配していると、突然奥から足音が響いた。

「？」

気になって見に行ってみた。

「なんだろ、今の音。」

あたりをキョロキョロ見回した。電気は消して、戸締りもしてしまつたので真っ暗だ。

でも、何故だろう。橙はどんどん怖くなってきた。

「・・・？」

何故だか分からない。誰もいないみたいなのに、何故こんなに恐怖を感じるのかが分からなかった。

「っ・・・！」

心臓がバクバクなって、息も荒くなってきた。

そしてとうとう恐怖に耐え切れなくなったのか、橙はすぐさま紫のいる部屋の電気を消して、紫の寝ている布団の中に入り込んだ。

（やだ、怖い・・・。怖いよ。藍しゃま、早く・・・早く帰ってきて！）

そう心の中で念じた。

すると何かがバキバキと折れる音が響いた。

「！？」

吃驚して頭を抱えてしまった。しかし数秒後には音も聞こえなくなつた。

「・・・？」

怖かったが、藍もおらず、紫も気絶している今、確かめるのは自分しかない。意を決した橙は布団をどかして目の前を見た。

驚く事となった。目の前の襖が、派手に蹴破られていた。

「……。」

眼を凝らした。すると奥に不気味に蠢くものが見えた。

「……？」

そしてそのうごめくものは、ぬるりところらを向いた。

「っ……！？」

その蠢くものから2つの眼光が見えた。

「あ、ああああ……！！！！！！！！！！」

橙は恐怖のあまり、叫び声をあげてしまった。

「ちょっとレミイ。いくらなんでもあれはひどいわ。フランはずっと地下牢獄にこもっていたのよ？アレくらい許してあげても……。」

「

レミリアはまだ怒っていた。

「でも、こんな夜遅くまで遊ばれたら怒らずにいられる？あの子も少しは学習しなくちゃいけないの！」

そういつてレミリアは自分の部屋に入ってしまった。

「もう……。」

パチュリーはほとほと困ってしまった。これ以上言っても仕方ないと思ったパチュリーは図書室に戻ろうとした。

「まあ、心配もするわね……。お姉様だもの。」

パチュリーはそう呟いて図書室の前にたどり着いた。

「そういえば、咲夜が教えてくれた願いの叶えてくれる本。案外こ

の図書室にあつたりするんじゃない。まさかね。」  
ドアノブをひねった。

突然中からガラスが割れる音が響いた。

「!?!」

何者かが侵入したのか? そう思ったパチュリーは焦ってドアを開け、中を見た。

「誰!!!!!!」

声を張り上げた。すると窓のところに誰かがいた。

「!...ちよつと待ちなさい!」

その一つの影は何かを持っていた。しかし立ち止まることなく、俊足にその場から出て行った。

「早い...!」

パチュリーは窓の下まで来た。派手にガラスが散っている。

「一体、どうやってこの図書館に侵入を...?」

パチュリーはあたりを見回した。

「...なによ、これ。」

信じられない光景を眼にしたパチュリーはその場で膝を着いた。

ブワル魔法図書館の本棚の中の本が、全てばら撒かれていた。

「うーん。」

霊夢は外を眺めた。

「どうかした?」

ソラは布団の上で霊夢に話しかけた。

「わからない。何か聞こえたような気が……。」

「霊夢もか。」

「虫の知らせかしらねエ。」

「まあいいや。ていうか、なんで霊夢と一緒にの部屋でねなきゃあかんの？」

「いいじゃない。女の子ってのは時々誰かと寝たくなるものよ。」

「それ言っと全世界の東方厨に襲われるぞ？」

「はい？」

「ま、いいや。寝るかー。」

霊夢は電気を消してソラの隣に敷いてある布団に入った。

「ソラは明日はどうするの？」

そんなことを言われたソラは考えた。

「うーん。まあ明日もあたりを回ってみるよ。いつてないところもあるしね。」

「へえ……。何処いきたいの？」

ソラは怪しい笑顔を浮かべて答えた。

「……ゆうかりんランド。」

「あんた、命知らずね。」

と、他愛のない会話をし、その日は眠りについた。

だが、刻一刻と何かは近づいていた。

## 2日目の朝

霊夢が眼を覚ました。なにやら表が騒がしい。

「んん．．．、ソラ？」

ソラを起こそうとした。

「．．．？」

しかしソラは隣にはいない。

「何処いったのかしら．．．？」

霊夢は体を起こした。

「ちよつと頭痛いわねエ．．．。飲みすぎたわ．．．。」

頭を押さえて表に出た。

すると境内には妖精達がいた。中でも一番騒いでいたのは橙だった。

「ほんとだよ！昨日物凄く怖いお化けみたんだってエ！」

「お化けって言われてもさあ．．．。」

リグルは困った顔をしている。

「幻想郷にはお化けみたいな人はいっぱいいるし、そんなに怖いかな？」

大妖精がそういうと、

「だ、だって．．．、物凄く大きかったんだよ！？それに、目つきが物凄く怖かったの！幻想郷にはあんな怖い人いないよ！！！」

皆は返答に困った。

「ちよつとあんた達、こんな朝早くになにもめてんの？」

霊夢は声をあげた。

「あ、霊夢！」

チルノがかけてきた。

「なんかねー、橙が物凄く怖いお化けみたんだって！」

「ふーん。」

興味なさげに霊夢は頭をかいた。

「寝ぼけてたんじゃないの？大体、怖かったのなら藍や紫と一緒にいればよかったじゃない。」

それを言うと、橙は寂しそうな顔をした。

「だって・・・、藍しゃまは昨日の夜出かけたつきり帰ってこないし、紫様は気絶して寝込んでるし・・・。」

霊夢は驚きの声をあげた。

「紫が気絶!？」

意外なことがあったものだ、と霊夢は驚いた。

「そんなに重症なわけ？」

「うん・・・。昨日の昼からおきてない。」

「そう・・・。」

橙が心配してる気持ちも少しは分かる気がしてきた。

「はいはい、そういう悲しい気持ちも、朝飯で吹っ飛ばせ。」

奥からフライパンを持ったソラが出てきた。

「あ、ソラ。」

「そのお化けの話はあとで聞くよ。ほら、飯だ飯！お前らも食べに来い！」

ソラが広間に行こうとしたら服を引っ張られた。

「ん？」

ソラは後ろを向いた。

服を引っ張っていたのはルーミアだった。

「・・・お兄ちゃんは何を食べる人間か？」

その眼は輝いている。しばし無表情だったソラは突然笑顔になり、ルーミアの頭をなでた。

「そうだな。俺はな、寝ている間に物凄く美味しくなるんだぞ？」

そついうとルーミアはさらに眼を輝かせた。

「そ、そーなのか!？」

「ああ、そーなのだ。」

「じゃ、じゃあ寝てるときに食べてもイイのか?!」

「もちろんだ。」

そういうとルーミアは嬉しそうに飛び跳ねた。

「ちよつとちよつと、ルーミアにあんなこといったら洒落にならないわよ？」

霊夢は焦ってソラに耳打ちをした。

「大丈夫だつて。第一こついう子にはこついておいたほうが育ちがいいんだ。」

「とはいってもねえ……。」

「さー、皆。なに食べたい？」

妖精達は次々とメニューを挙げた。

「うどん！」

「カキ氷！」

「幽香さん！」

「人間！」

「藍しゃまの尻尾！」

「うどん以外もつと思いつくことねえの？」  
すると霊夢が、

「ステーキ。」

「お願い。心の底から望んでいるのをいうのはやめて。悲しくなってくる……。しかも俺焼けないし……。」

そしてソラはまとめた。

「よし。普通に味噌汁とご飯と海苔だ！」

「普通！」

そういつてソラはフライパンを振り回した。

朝食が食べ終わった。妖精達は遊びにいき、その場に残ったのは霊夢とソラだけだった。

「さて、俺はそろそろ行くわ。」

「ああ、そういえば出かけるとかいつてたわね。」

「ああ、幻想郷を回ってみたいし。色々ありがとな、霊夢。」

「こちらこそ。」

霊夢とソラは握手を交わした。

「最初は何処に行くつもりなの？」

「決まってんじゃん。」

ソラは怪しい笑顔を浮かべた。

「ゆうかりんランド。」

「死なないでよね……。」

霊夢はまたソラの恐ろしさを感じた。

「もしかしたら他のやつところに泊まってくかもしれないけど。」

「わかったわ。」

ソラは帽子をかぶり、ペンと鉛筆と消しゴムと紙を持ち、靴を履いた。

「さて、行くか。幻想郷！」

そういつてソラは神社内から飛び出し、

そして派手に転んだ。

「へぶあつ!？」

「総領娘様、今日もどこかに出掛けるんですか？」

衣玖が平坦に問いかけた。

天子は身支度を整え、うきうきしながら外にでた。

「う、うん。とはいっても、出かけるだけよ？そう、出かけるだけ！」

出かけるだけ、どいつているが明らかにおかしい。そわそわしながら自分の格好を気にしまくっている。普段こんな事をしない総領娘様が、まるで……。

まるで、好きな人に会いに行くかのように・・・。

「・・・誰に会いに行くんですか？」

「え！？べ、べべべべ別にソラにあいに行くわけじゃ・・・！！  
！」

「なるほど。そのソラさんとかいう人に会いに行くんですか。」

「！？」

天子は顔を真っ赤にした。

「して、そのソラさんとかいう人はどんな人なんですか？総領娘様の性格上、そんなにうきうきするのは自分が楽しい時か、それか・・・」

衣玖が少しだけ眼を細くした。

「ソラ、と言う人がよほど貴女に見合った人か・・・。」

すると天子は衣玖に向かって要石を投げつけた。衣玖は見事に要石の下敷きになった。

「な、ななななな何いってんの衣玖はあ・・・！！わ、私がそんなことするわけじゃない！！！！ただ暇だから遊びに行くだけよ！！！！」

「か、顔が笑ってますよ・・・。」

「と、とにかく私は遊びにいくからねー！！！！」

天子は飛んで行ってしまった。衣玖は困ったような、しかし少し嬉しそうな顔をしている。

「全く、総領娘様ももう女の子らしい女の子になったんですねえ・・・。つれてきてくれるかしら？」

そういつて衣玖は奥に引っ込んだ。

「さて、ゆうかりんランドに行きがてらついでにどこか行くとしよう。」

ソラは遠めに妖怪の山を見た。

「・・・そういや、神奈子とも約束してたっけな。」

ついでに行くとするか。そう思っソラは歩き出した。

やはり、幻想郷と言う世界はすごい。空気も澄んで、環境もいい。これほどまで幸せな気分になれるというのも驚きだ。そして何より、  
「・・・東方キャラ全員にあえるぜ。」

ソラは笑顔になった。

しかしなぜだろう。リアルに幻想郷の住人に会々と、不思議と如何わしい気持ちは生まれない。むしろ、のどかに過ごしたいという気持ちのほうが勝る。画面越しに自家発電したり、息を荒げたりしている光景はニコニコ静画のコメントから見受けられるが、その人たちもここに来ればこんな気分になるんだろうか。

「という思いが生まれたんだが、どう思う？」

と、魔理沙に打ち明けてみた。

「いや、知らないよ・・・。」

当然の反応をした魔理沙であった。

魔法の森にたどり着いたソラは一番に発見した魔理沙に話しかけていた。

「でも、確かに幻想郷はいいところだぜ。酒も美味しい、なにより楽しい仲間がいるしな。」

「うむ、それは確かにね。」

なんて他愛のない話をした。

「そういえば、尋ねたいことがあったんだ。」

「なんだ？」

「幽香さんのところにはどうやっていくんだ？」

「幽香のところ？なにしに？」

ソラは笑顔になった。

「勝負しに。」

「お前怖いもの知らずだろ？」

ソラは高笑いした。

「んー、まあその前に何か面白いところない？」

「面白いところ？」

唐突にそんなことを言われた魔理沙はいい場所がないか考えた。

「・・・あ、あそこがいいかもしれないな。」

「・・・で、」

アリスは苦笑いした。

「なんで私の所に。」

魔理沙は愛想笑いを浮かべた、

「ほかにいいところなかったもんで！」

「誰よこの人！」

アリスはソラを指差した。

「どうも、ソラです。」

「魔理沙、この人とはどういう関係？！」

魔理沙はふざけて、

「えつとな、こいつとは只ならぬ関係だぜ。」

次の瞬間、ソラの周りに人形たちが包丁を持って迫ってきた。

「じゃあ、この男殺しちゃって良いわね。」

「魔理沙あああああ！！お前なにいつてんだあああああ！！！」

「！」

「アリス！冗談だ冗談！！！」

「よくも魔理沙をおおおお！！！！！」

「ああああああああああああああああああ！！！！！」

「ごめんなさい。我を忘れてたわ・・・。」

ソラは頬にかすり傷をおった程度で済んだ。

「いや、アリスは悪くないとは思うから・・・。」

ソラは苦笑いを浮かべた。

「しかし、本当に人形の使い方が慣れてるなあ。」

「まあね。コレくらいしかできないけど。」

「いいなあ。こんな技術ほしいわー。」

などと会話した。

「よかったじゃないか、魔理沙。」

「へ？」

魔理沙はソラがなにを言っているのかわからなかった。ソラは気にしないでけらけら笑っている。

「そいじゃあアリスや魔理沙とも会話できたし、そろそろほかの所にいこうかな。」

そういつてソラが立ち上がった。

「じゃあな。もし怪しい人形があってもつれこむなよー。」

ソラはアリスの家を出ようとしたが、あることを思い出して足を止めた。

「・・・そうだ。紅魔館にはどうやっていくんだ？」

美鈴は門の横にずっと立っていた。あの夜からずっとフランを待っているのだが、フランがいつまでたっても帰ってこない。心配で心配で夜も眠れなかったのだ。

「・・・妹様。」

しかし、昨日の夜はなんだがおかしかった。妙に所々からざわめきを感じた。風のせいだろうか。

「大丈夫かなあ、妹様。」

「フランがどうかしたのか？」

ソラは美鈴に問いかけた。

「実はですね、昨日の夜妹様がお嬢様と喧嘩をしまして・・・。」

そりやお嬢様が心配するのも分かりますが、妹様はずっと地下牢にこもっていて、それで暇だといって外に出て行っただけです。妹様の気持ちも少しは分かってあげてもいいかなー……って、うわー！

美鈴はソラの存在に気付いてほんの少し退いた。

「び、吃驚したあ。誰ですかあなた？」

「アア、悪い悪い。ちょっと紅魔館に用があつて。」

美鈴は少しだけ警戒した。

「紅魔館にですか？」

「うん。会いたい人がいるんだ。」

「……その人は？」

「パチュリー・ノーレッジ。」

「パチュリー様に？ていうか、貴方は誰ですか？」

「ああ、知らないんだ。昨日の爆発音あつたでしょ？その原因俺。

紫のスキマでこっちにきちゃった人間だよ。名前はソラ。」

「あ、思い出した。昨日寝たときに吃驚したんだ。」

「堂々と職務放棄言しちゃったよこの人。」

「職務放棄じゃありません！眼を瞑って仕事をしてただけです！」

「サボリじゃないか！」

「ちーがーいーまー」

突然美鈴の頭にナイフが刺さった。

「すぐ！？」

そして美鈴の後ろから咲夜が出てきた。

「その人のいうとおりよ、このサボリ魔。」

「さ、咲夜さーん……。」

嘆いている美鈴を無視した咲夜はソラに近づいた。

「あなたが、昨日スキマから入ってきたと噂の人ですね？」

「？……ええ、まあ。」

「お嬢様が会って話したいとのことなので。もしよろしければついてきてくれませんか？」

「丁度いい。だったら俺も会いたい人がいるので。」

「パチユリー様ですね。立ち話は聞きました。」

「じゃあ、伺います。」

ソラは咲夜に付いていった。

「うっ、なんでこんな目に・・・。」

「お嬢様。つれてまいりました。」

ノックをして咲夜がそういうと、

『入りなさい。』

と言う声が響いた。

「失礼します。」

咲夜は中にはいった。つられてソラも入る。

「すまないわね。こんなところにまで足を運ばせちゃって。」

レミリアは豪華絢爛な椅子に座っている。

「いやいや。とはいっても、霊夢のことですっきりうらまれてると思っただのに。」

ソラがレミリアにそういうとレミリアは笑顔を作った。

「ええ、そりゃもう♪」

「はっはっは。」

ソラは一言余計にレミリアに言った。

「昨日霊夢と一緒に風呂にはいたり一緒に寝たりしましたが、案外可愛いところもありましたw」

「な、なんですって!？」

レミリアは慌てて立ち上がった。

「つまりこうですよ。レミリアも1万円以上霊夢に払えばあんなことやこんなことやそんなことが!」

「咲夜!近々霊夢の所に5万円を払いに行くわよ!」

「ええ!？」

咲夜は驚いた。

「お、お嬢様！今の問題はそこじゃありません！この人にいうことがあったのでしょうか？」

咲夜にそういわれたレミリアは我を取り戻した。

「そ、そうね。実はフ란の事で貴方に聞きたいことがあるの。」

「フ란の事？」

レミリアはほんの少し落ち込んだような素振りを見せた。

「昨日の夜、ちょっと口論をね。それであの子出て行ってしまったの。後で美鈴に聞いた話だと、貴方フ란と遊んでくれたみたいじゃない。」

「ああ、確かに。」

するとレミリアは平坦とソラに言った。

「こんな事をお願いするのはなんなんだけど、もしフ란を見つけたらつれてきてくれない？報酬は出すから。」

ソラは口を手を当てた。

「・・・別にいいけど。」

「そう。ありがとう。パチュリーは図書館にいるわ。」

レミリアは立ち上がってその場を後にした。

「・・・。」

ソラはただただレミリアを見つめるだけであつた。

「はぁ・・・。」

パチュリーは割れた窓ガラスと本棚を交互に見つめた。

「窓ガラスも割れて、本も散らばったまま。一体なんだっていうのよ。」

小悪魔は焦って窓ガラスの破片の処理や本の片付けにあちらこちら走り回っている。

「小悪魔、焦って窓ガラスの破片踏んだり本ぶちまけたりしないでよ？」

「わ、わかってます！今すぐお片付けしますから・・・って、あれ

？足から血い出てるうつうつ！！！！ひゃうああああああああ  
ああ！！！！！！」

叫び声と同時に本が落ちる音が聞こえた。

「・・・はあ。」

パチュリーはさっきより大きなため息を吐いた。

「・・・にしても、」

パチュリーは昨日窓のところにいた人物の姿を思い浮かべた。

「あの人は一体誰だったのかしら。」

あんな高いところにいたってことは、普通の人ではない。かといって妖精や妖怪みたいに妖力も全く感じられなかった。

「一体・・・。」

するとまた奥から声が聞こえた。

「あ、す・・・すいません。」

小悪魔の声だ。吃驚するように誰かに謝っている。

「え、パチュリー様ですか？あちらにいらっしゃいますよ。」

すると小悪魔が本棚の脇から出てきた。

「パチュリー様。ご面会です。」

「一体誰？」

「昨日、妹様と一緒に遊んでくれた人みたいですよ。」

すると遅れてソラが出てきた。

「どうも。」

ソラをみたパチュリーは眼を見開いた。

「・・・猫耳？」

真っ先に気になったところを口に出してしまった。

パチュリーとソラは大量の本が積み重なったテーブルの上でお茶を飲んでいた。

「なるほど。それで幻想郷に。」

「うん。」

パチュリーはソラにたずねてみた。

「でもわからないわ。なんでわざわざ私に会いに来たの？」

ソラは笑顔になり、

「本のことにについてよく知っていそうだったから。」  
するとソラは鞆からクリアケースを取り出した。

「コレ、俺のかいた小説なんだけど、興味ある？」

パチュリーは紅茶の入ったカップを置いた。

「小説を書いてるのね。まあ、暇だから見てあげるわ。」

パチュリーはソラから小説を受け取って黙々と小説を読み始めた。  
(ま、暇つぶしにはなるでしょ。。。)

そう思っで、一ページ小説を捲った。

「どうだった？」

「。。。ねえ、あなた。」

「ん？」

「この続きはどこ？」

「。。。ああ、その続きまだ書いていないんだ。」

パチュリーは愕然とした。

「そ、そんな。。。！こ、この凄い能力を持った青年はどうなるの！？」

「すっげえ強くなる。」

「つ、続きが気になるわ。。。。」

パチュリーは頭を抱えた。

「暇を潰すつもりが、楽しみが増えてしまった。。。。」

「まあまあ、今度作ってくるから。」

「ほんとね？約束する？」

「うむ。」

そういうとパチュリーは満足したように笑顔になった。

「ああもうかわいいなくそ。」

ソラは早口で言った。

「なにかいった？」

「いんや。」

同時刻、紅魔館の前を天子が歩いていった。

「ソラ、何処にいるのかしら？あの夜から行方がつかめないわ・・・。目撃証言もないし・・・。」

すると天子は地面にぶっ倒れている美鈴と出くわした。

「・・・？」

美鈴は頭にナイフが刺さったまま泣いている。

「うう。咲夜さん、いつにもまして冷たい・・・。お嬢様が不機嫌なのがそんなにいやなんですか？やつあたりですか・・・。」

天子は少しだけ羨ましそうに見ている。

「いいなー。」

しかしソラとは関係がなさそう、と思った天子はソラを探してまたさ迷い始めた。

「・・・あら？」

パチュリーは何かを思い出した。

「ん、何？」

「・・・ねえ、私と貴方って前にどこかであつた？」

ソラは眼をぱちくりさせた。

「・・・いや？実際に会ったのはこれが初めてな気がするんだけど。」

「

「そう・・・。」

パチュリーは眉をひそめた。

「デジャヴかしら・・・？でもどこかで・・・。」

ソラは人差し指を突き上げた。

「ま、まあ俺みたいな顔つきの奴っていっぱいいるし、何か本に出

てきた登場人物と似てたんだろう。」

本、と言う単語で何かを思い出したソラは周りを見回した。

「本、といえば・・・、この惨劇は一体なんなんだ？」

パチュリーも釣られてあたりも見回す。

「実は昨日の夜、誰かがこの図書館に侵入してきたのよ。盗まれたものはないと思うけど、それでも何か胸騒ぎみたいなものがあって、それで今迅速に片付けをしているのよ。」

「どうりで小悪魔が頑張ってるわけか。俺も手伝おうか？」

パチュリーは首を振った。

「いえ、大丈夫よ。客人に手伝わせるほど私たちの屋敷は失礼ではないわ。」

「そうか。」

ソラは改めて周りの凄さに驚いた。

「しかし、コレだけ本があると一冊くらい取られてもわからないだろうなあ。」

「分かってしまうから魔理沙みたいなやつを退治してるんじゃない。」

「

「あいつの場合は大量に持つてくからじゃね？」

「それもあるわね。」

2人はただ呆然と図書館内を見つめていた。

数分たち、ソラは息を吐いた。

「よしっ！俺そろそろ別の所にいくよ。」

「あら、もう？」

「うん。色々行きたいところもあるし。」

「そう。」

「じゃあ、また会えたら話そうな。」

「ええ。」

そういつてソラは歩いて図書館を出て行った。その様子をパチュリーは不思議そうに見ていた。

「・・・あの人、何処となく不思議ねえ。」

そういつてパチュリーはテーブルに積み重ねてあった本を一冊手に取り、黙々と読み始めた。

ソラは紅魔館の外にでて背伸びをした。

「んーっ……！よーっし、次は妖怪の山あたりかな？」

妖怪の山を眺め、頬のかすり傷をなでた。

「うーん、なにもしなけりや大丈夫だけど、大きな衝撃には耐えられないな。」

ぶつぶつといいながら歩き出した。

「そういえば、てゐがあゝの薬ぶちまけてからこっちに来なくなったな。ひよっとして永琳にお仕置きされているのか？」

ぜひともそのお仕置きに加わりたいものだと思ってしまった。

「いいなあ、いつも悪戯ばかり仕掛けてる奴に精神的肉体的にお仕置きして心をぶち壊して全てを我が物にしたとき、もう相手は玩具になる。その時の快感ときたら……ふふふ。」

ソラは放送ギリギリの顔をした。

するとソラは誰かにぶつかってしまった。

「わぶっ！」

「ん？」

ぶつかった相手はその場に蹲った。

「い、いだあ……。」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

ソラは真下を見た。

「……秋姉妹だ。」

目の前にいたのは秋 静葉と穰子だった。

ぶつかった静葉はキッとソラを睨んだ。

「ちよつとー！ちゃんと前見てよオ。」

「ごめんごめん。」

静葉は頭を押さえた。



ので、代わりといつてはなんですが、これをどうぞ。」

穰子がきゅうりの束を渡してきた。

「お、きゅうりじゃん。」

「はい。大量に育ったので。」

「ありがとな。」

きゅうりを鞆に入れた。

「ほら、お姉ちゃん。行くよ。」

「お兄さんを殺しちゃったあ……!」

「とつとと気付いてくれよ……。」

ソラは心配そうな顔をした。静葉と穰子とはとぼと歩いていくので、まだソラは心配そうに見ていた。

「大丈夫か?」

ソラは向き直り、また前に歩き出そうと一歩前に進んだ。

ザクッ――

目の前に大きな鎌が突き刺さった。その鎌はソラの髪の毛の先を掠り、地面に刺さっている。

「……。」

ソラは無表情に鎌が落ちてきた上空を見上げた。

上には木があった。しかし問題はそこではない。大きな木の枝の上に紅い髪がゆれているのが見える。それに加えて鼻提灯。

「なるほど。」

それだけで理解できた。こいつは多分、小野塚 小町だ。

すると上から声が聞こえてきた。

「えへへ……、四季様あ……。それ、私の胸です。おやつのだかプリンじゃないですよ……。」

咲夜や天子が聞いたらブチ切れそうな台詞だな。とはいえ、俺の命

を危険にさらした死神だ。こいつは仕返ししないとな。

そう心で決心したソラは足をあげて木に強力なキックをぶちかました。

木は激しく横に揺れ、そして小町が落ちてきた。

「ふああああへぶらいつ!?!?」

寝ながら落ちてきたんだ。衝撃度はすさまじいだろう。

「あいつたたたあ・・・!なんだよ、寝てるときは落ちたことないのになあ・・・」

すると小町は頭を鷲掴みにされた。

「おい、サボリ魔死神。」

「いだっ!だ、誰!?」

小町は後ろを向いた。

「ん・・・?本当に誰?」

「ソラだ。ていうかそれ以前に、それ。」

ソラは鎌を指差した。

「落とすなよな。俺殺されるところだったぞ、死神に。」

「ああ、鎌を落としちまったのか。悪い悪い」

小町はへらへら笑っている。

「このやろー。」

小町がソラの腹部を見た。

「・・・・って、凄い怪我してるじゃないか!今すぐ三途の川に!」

「まだ死んでねえよ!あ、いや・・・。厳密に言えば死んでるのか生きてるのかわからんが・・・。これはトマト。血じゃねえ。」

「なんだよー。せつかくいい仕事が出来ると思ったのに。」

「勝手に殺すな。」

「ははは、悪い悪い。よしと・・・。」

小町は立ち上がるうとしたがなぜか力が入らなかった。

「いった・・・!あ、あれ・・・?」

小町は背中を擦った。

「いちち……。背中でも打っちゃったかな……。？」

「……。痛いのか？」

ソラは小町を見つめた。

「ん、ああ。」

するとソラは怪しい笑顔を浮かべた。

「……。だったら、その痛みなおしてやろうか？」

「お、直してくれるのか？」

「ああ、しかもとても気持ちのいい方法でな。」

「おおー。いいじゃんいいじゃん！それやって！」

するとソラは指をこきつと鳴らした。

「じゃあ、まずそこにつつぶせになって。」

小町ははりきった。

「おーし、あたしはどんなものでもすぐきもちいーなんていわないぞー！我慢強いからな！」

小町のその言葉を聞いたソラはさらに怪しい笑顔を浮かべた。

## 2日目の昼（前編）

天子は茂みの中を歩いていた。

「うーん、道と言う道にいなかったから裏をかいて茂みを探して歩いてみたけど、いないわねえ・・・。」

さつきからずつと茂みを探しているが、ソラはおろか人っ子一人見つからない。

「むー・・・。」

幻想郷の広さが尋常じゃない事を改めて知った。

「・・・仕方ない。一旦戻ってまた体制をととのえ」

「だ、駄目・・・、ソラの旦那・・・！そこは・・・んん・・・っ！」

天子はぴくりと反応した。

（ソラの、旦那・・・？）

天子は声のする方向に走り出した。しかも無表情で。

「っ・・・！」

声が大きくなってきた。そしてやつとかすかに姿が見えた。

「あれは・・・。」

天子は咄嗟に茂みに隠れた。

「どうだ？めちゃくちゃ気持ちいいだろ？」

ソラは誰かに向かって声をあげている。

「き、きもちよくは・・・んん・・・っ！」

誰かの甘美な声が聞こえてくる。

（誰？一体誰がソラに遊ばれてるの・・・！？）

天子はあまりの興奮状態に息を荒げている。

気になりすぎて、とうとう頭をあげて相手にされている相手の顔を見た。

「?!」

相手は死神の小町だった。

（な、何故・・・！？）

小町はまるで今までにない快感に溺れているかのようなとろんとした顔をしている。

「だ、旦那ぁ・・・。ん・・・、ら、らめ・・・、そこは・・・。」

「なんだよ、あんなに我慢強いっていつておきながら・・・！」

「ふあつ・・・！！！」

ソラが力を入れると小町は小さい叫び声をあげた。

「ほら、そんなに女の子みたいな声あげちゃってさぁ・・・。」

ソラはまるでからかうように笑っている。

その光景を天子はすでに全身を震わせながら黙視していた。

（ソラが、別の人、っていうか死神と・・・。なんか・・・。なんかしちゃってるノノノ）

ソラの姿は見えない。これ以上身を乗り出すと自分の姿が見えてしまう。

（なんで、あんなに笑顔を向けてくれたソラが、私を差し置いて・・・死神と・・・。）

なんだか絶望に近い思いを感じていた。そんな思いを感じているのに、何故・・・。

何故、こんなにも興奮してしまうのか。

（・・・ひょっとして、コレ、寝取られフェチっていうの？！）

新たな快感に気づいてしまった天子はさらにその場に蹲った。

「ほら、もう言っちゃえよ。」

「や、やだ・・・！いつたら・・・、それこそ・・・！」

「・・・仕方ない。」

ソラは全身の力を小町に入れるように腕を押した。

「ああつ・・・！だ、駄目、そこ・・・そこ・・・気持ちいい！」

小町は全ての快感を出し切るかのように本音を言ってしまった。

（なに、この心をえぐられるような感覚・・・。凄くいやなのに、苦しいのに、気持ちよさを、感じちゃう・・・！）

なんてもう危ない発言を考えてしまい、そして最後には、

ばったり気絶してしまった。

「ふうー。」

ソラは疲れたかのように息を吐いた。

「どうだった小町。気持ちよかったろ？」

小町もさつきとは打って変わって元気になっている。

「ああ。これは気持ち良いっていうしかないなあ。しかし旦那、小町は驚いたかのようにソラを見つめた。」

「指圧上手いなあ。ありや職人並じゃないか？」

「ああ、親に頼まれてよくやらされてたからさ。ツボ押し。」

「さつきまでソラと小町が繰り返していたのはツボ押しだった。いやー、背中痛いのはこのところ毎日だったんだけど、まさかツボ押しが効くとは・・・。あはは。」

「ああ、俺もまさかなーとは思ったけど。さて・・・、ソラは鞆を持ち上げた。」

「俺はそろそろ先に進むわ。この先は確か迷いの竹林と永遠亭、そして妖怪の山の先は幽香さんの花畑か。」

「お、旅かい？」

「ま、そんなところだ。それじゃあ仕事しろよ。」

ソラは手を振って先に進んだ。

「いやー、中々面白い旦那だなー。」

小町がへらへら笑っていると、突然茂みが揺れた。

「私だってソラにもてあそばされたいわよおおおおおおお！！」

と、天子が興奮状態で茂みから出てきた。

「ぬおわあっ?!」

小町は吃驚して退いた。

「な、なんだお前!？」



「まー、幻想郷にいられる時点で幸運なんだし、これ以上の幸せはもう、」

角を曲がると、そこには妹紅がいた。しかも着替え途中で下着が露になっている状況で。

「ない……か？」

「うあああああああああああああああああああああああああああああああつ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

妹紅は驚きの声をあげて咄嗟に炎をソラに向けて発火させてしまった。

「いや、突然の事とはいえ、着替え姿を見てしまったのは悪かった……。」

妹紅は顔を伏せている。

「こつちも、そつちがわざとじゃないのは分かりきってるのに、いきなり藤原ヴォルケイノを食らわせちゃったのは、ごめん。」

テントの近くで座り込んでいたソラと妹紅はずっと黙り込んでいた。そりや気まずい空気にもなる。

これ以上この思い空気に耐え切れない、と思ったのか、妹紅が何かを話そうとした。

「あ、その……えーっと……そのー……。」「……？」

しかしさっきのことを思い出してしまい、少々恥ずかしくなったのと思うように口が回らない。

「えっと、その……えー……。」「

「……ああ、そうだ。今日は妹紅の所に泊まりにいくわ。」

「え、ああ。わかった……。って、ええ？！」

「いやー、こういう生活懂れてたんだよねー。」

「待て待て！え、私のテントに！？」

「うん。」

「いや、それは絵面的にやばいんじゃないや……。」

「もう霊夢のところで経験積みだから慣れたよ……。」

「え、いや……その、心の準備というものが……。」

ソラは構わずしゃべりだした。

「いやー、霊夢のところにお世話になりっぱなしってのは悪いし、それに妹紅は一番最初に会った人だからさあ。なんかしゃべりやすいというかね。」

「な、なるほど。」

すると妹紅は何かを思い出した。

「そういえばソラって、外の世界からきたんだよね？」

「ん、ああ。」

「じゃあさ、色々と教えてくれないか？私、そういうの少し興味あるし。」

「ああ、いいぞ。」

少しだけお互いの距離が縮まった気がした。これで安心して話し合  
いができる。

——…アアアアアアアアアアアアアアアアア……

「!？」

竹林の奥から奇奇怪怪な叫び声が聞こえてくる。

「な、なんだ……今の変な叫び声。」

「永遠亭のほうからだぞ？」

ソラと妹紅は走り出した。

「そういえば、橙が昨日の夜、めちゃくちゃ大きい変な化物見たっ  
て……。」

「それ、本当か？」

もしそうだとしたら、永遠亭で何かが起こっている。

「……もしかして、異変？」

ソラたちが急いで永遠亭に向かった。

アア・・・サアアアアアア・・・アアアアアア

「おいおい、どんどん近づいていくぞ」。

「大丈夫か？輝夜とか永琳とか兎とか……！」

どんどん心配してしまう気持ちと、そしてわけも分からない叫び声をあげているモノに近づいているかすかな恐怖が襲ってきた。

そして妹紅が角を曲がった。

「！」

ソラも角に曲がり、妹紅の隣に並んだ。

「な・・・！」

「い、いって……。」

ソラと妹紅は愕然とした。

永遠亭の壁には、

「ウサアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ア!!!」

てゐが泣きながらさらされていた。

ソラと妹紅は無表情でてみを見つめた。

「師匠の馬鹿ああああああ！誰かああああ、助けてえええええええ！」

ロープにぐるぐる巻きにされたてゐはようやくソラと妹紅の存在に  
 気付いた。

「ふーん、ふーん」

「なにやってんの、お前？」

ソラは貶すように低い声でしゃべっている。

「オ、お前は……ここになににきた！」

てゐる昨日のことがあったのか、敵意をむき出しにしている。

「なにつて・・・。変な叫び声が聞こえてきたから。なんか問題でも起きたのかなーって思ったけど、来て損したな。」

といってソラはぐるぐる巻きにされてゐる姿を写真にとつて  
帰ろうとした。

[illegible]

「なんで撮ったの！なんでこんな姿を撮ろうと思ったの！？」

ソラは無表情でくると踵を返してゐの方をみた。

「お前は俺に薬を浴びせようとしたからだ。あの薬、色からしてなにかバイオハザード的な展開になりそうだし、第一お前は俺を落とし穴に蹴落としたからな。だったら俺はお前に精神的、肉体的に屈辱的行為を飽きるまでしてお前がもうなんでもしますから、なんでもしますからア!と顔を赤らめて叫ぶまで俺はお前を貶すのをやめない!」

「長々と何最低なに最低なことしゃべってんのこの人!!!!」

「まあまあ、落ち着けてソラ。てゐ、一体なんでこんな状況に？」

てゐは落ち着きを取り戻して喋り始めた。

「・・・昨日、薬を勝手に持ち出したのが原因で、師匠が怒っちゃって、それで、こんなことに。」

「ちよつと永琳に敬意を表してくるか。」

「やめとけ、つけあがるから。」

ソラはため息を吐いた。

「はあ、仕方ねえ……。」

ソラはてゐに近づいた。

「こっちくんな変態！あたしに触ったらどうなるか・・・！」

ソラはロープを解いた。

「！」

ソラの意外な行動にてゐは驚きを隠せなかった。

「はいはい、どうなる前に俺は逃げるから。とりあえず降りろ。」

ソラはてゐを抱えて、そのまま地面に下ろした。

「・・・。」

てゐはソラのなすがままにおろされた。

「全く。」

てゐはなんだかソラをみるのが恥ずかしくなってきた顔をそらした。

「あ、ありがと・・・。」

「お前が有難うとかいうのは変だな。まあいい。目覚めたときは俺に言えよ。」

そういつてソラは竹林の隙間から見える妖怪の山を見た。

「うーむ、永遠亭に寄ったらいくか。」

「永遠亭に入るのか？」

「ああ。」

「じゃあ私は一旦戻るよ。輝夜にはなるべく会いたくない・・・。」

「正直なこつて。」

ソラは玄関をあけ、庭に入った。

「ふむ、ついでにこの傷の塗り薬でももらうかな。ほら、てゐ。お前もこつちこい。」

「いや、でも抜け出したのばれたらまた怒られる気が・・・。」

「そんなときや助けてやるよ。」

と、ソラはてゐの頭をぼんぽん叩いた。

「むう・・・。」

「しかし広いな。」

「気をつけなよ。師匠がいつ私たちを攻撃してくるか・・・。」

「してくるって言ってもお前だけにだろ？」

「いや、怒ってたから見境がないと思う。」

「そんなときはお前を盾にするか。」

「あんたやつぱり最低ウサ……。」

ていがぼそりと呟いた。

突如、目の前に弾幕が広がった。

「!？」

その弾幕は無限に広がった。しかしどこかでみた事ある。

そうだ、この弾幕は……、

天呪「アポロ13」

「や、やばい……。」「

てゐは冷や汗を流した。

すると奥から声が聞こえた。

「てゐ」

この優しそうな反面、明らかに恐怖の色を感じるこの声は……。

「し、ししし……師匠。」「

てゐが顔を青くした。

「アポロ13……。そうか、永琳か……。!」「

ソラに呼ばれた永琳は角から出てきた。

「あら、あなた幻想郷に来た人間ね。初めまして。」「

永琳は頭を下げた。

「こちらこそ、初めまして。」「

ソラもペコペコ頭を下げた。

「あんたなんでそんなに落ち着いてられんの!？」

てゐはあたりをキョロキョロして逃げ道はないかとてゐは模索していた。

「てゐー、逃げちゃ駄目でしょー」

といって永林が腕を下ろした。

途端に弾幕がソラたちに向かって襲い掛かってきた。

「ウサああああああ！！！！エンシエントデューパー！！！」

てゐは負けてたまるか、と死んでたまるか、の思いで弾幕を放った。

まあ、力の差は歴然と言った所で、てゐの弾幕は消され、大量の弾幕が目の前まで迫った。

「も、もう駄目だ・・・。」

てゐは諦めた。しかしなぜか心強い。隣には関係ないソラまでいるのだ。どうにかソラを盾にしようとソラをみた。

しかしそこにソラはいない。変わりにソラの絵が描かれた紙が置いてあり、

『うそウサ』

と文字まで書かれていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

てゐは握りこぶしを作った。

「うらんでやるこんチクしょおおおおおおお！！！！！！」

ピチューン！

てゐが消える瞬間をソラと永琳は嬉しそうにみていた。

「・・・悪戯ばかりしている奴が苦戦してるの見てるのって、最高ですね」

ソラが嬉しそうに言った。

「ええ、そうね」

永琳も賛同し、両者は心の通じ合いを感じ、互いに握手をした。

「はい、傷薬よ。」

ソラは永琳から傷薬を受け取った。

「ありがとうございます。ところで永琳さん。」

「なにかしら？」

ソラは部屋の角を指差した。

「あれ、なんでこんなところにおいてあるんです？」

永琳はソラの指差した方向を見た。

そこには昨日、優曇華が持ってきたあの有名な太。の塔が置いてあった。

「ああ、これね。竹林近くに落ちてたって優曇華が持ってきたのよ。」

ソラは塔に近づいた。

「・・・これ、俺の描いたやつにそっくりだな。」

「描いたやつ？」

「ええ、俺ここに来る前にこの塔の絵を沢山かいてて。」

「・・・てことは、貴方の能力は絵を具現化させる能力？」

「ええ。」

「じゃあそれが発動したのね。どうする？回収する？私はそれはそれで気に入ってたんだけど。」

「気に入ってるならもっていいですよ。俺もこの絵いっぱい持ってますし。」

「そう、ありがとうございます。」

そういつて永琳は何かを調べ始めた。

「・・・なにしてるんです？」

「薬の調合リスト。てゐが持ち去った薬にどんな効力があるのか調べてるのよ。」

「ほお。」

「大体はわかってるわ。今はこぼれてなくなっちゃったけど、もしまだここにあつて、数分かき混ぜてれば、己の力が数倍アップする効力があつたわ。」

「凄じくないですか。」

「その分精密だったけどね。他の薬がちょっと混ざっただけで他の薬に変わっちゃうから。効力は同じでも危険な薬になるわ。だからもう無理ね。逆に言えば消えてくれてよかったわ。」

永琳は眼鏡を机の上に置いた。

「だからあんなに怒ってたんですか。」

「あの子には本当に困ってるのよ。」

すると奥から声が聞こえてきた。

『えーりん……！』

その声を聞いた永琳はまたため息を吐いた。

「……今度は別の困る根源が来たわ。」

するとドアがあいた。入ったきたのは輝夜だった。

「永琳ー。お腹すいたー。何かお菓子ちょうだ……。」

輝夜はソラをみた。ソラも輝夜を見た。

「っ……。」

ソラは眼を見開いた。

「？」

ソラがずかずかと輝夜に近づいた。

「え、誰？この人。」

するとソラは輝夜の頭をなで始めた。

「な、なにすんのよ！」

輝夜はすぐ手をはじいた。

「はっ……！す、すまん。目の前にこんなに綺麗な黒髪ロングがあったからつい……。」

そういわれた輝夜は自分の髪の毛を見た。

「そう？あなた、中々いい眼してるじゃない。」

「黒髪ロング好きな俺にぬかりはなかった。」

すると永琳が呟いた。

「だがニートだ。」

ソラは泣き出した。

「なんでよ!!!!」

ソラと永琳は次の瞬間爆笑した。

輝夜はこのコンビを見てすぐ思った。この2人のコンビは、最強な感じがする、と。

「まあ、お菓子を食いたいならコレを差し上げよう。」

ソラは鞆からお菓子を取り出した。

「・・・なにこれ？」

ソラが輝夜に差し出したのは「板チョコ」だった。

「それは幸せの塊だ。」

「幸せの塊？」

「食べると幸せになれる。」

「まじで!」

輝夜はパッケージを破ってひとかけら口に放り入れた。

「むぐ・・・むぐ・・・。」

次の瞬間、輝夜は身体を震わせた。

「な、なにこれ・・・。甘い!美味しい!幸せ!!!!!!」

「ははは!。そうだろそうだろ!」

永琳も近づいてきてチョコを見た。

「なにこれ、麻薬？」

「いや・・・。麻薬じゃないけど、まあ甘党にとっては麻薬みたいなものだな。」

「ふーん。」

「いいよねえ、チョコは。幸せな気分になれるし、何もかも忘れられるし。ああ、でも一日甘いもの抜かすと俺発狂してのどかきむしって奇声発するからなア。」

「それ本当の麻薬じゃないわよね？」

「危なくなってきたわね、この人。」

「そういえば優曇華がないじゃん。」

「ああ、優曇華ならまた買いい物に出かけたわ。」

「人使い、てか兎使い荒いな。会えなかったのは残念だが、時間が

惜しい。そろそろ妖怪の山に行くとするか。」

ソラは帽子の位置を整え、固定した。

「じゃあ薬の件、がんばれ！」

そういつてソラは部屋を出た。

「……。」

永琳と輝夜は黙ってソラが出て行くのをみていた。

「……ねえ、永琳。あの人って変？」

「……変、というか、なんというか。」

ねえ……、と二人は何かを悟った。部屋の外にいたソラは微笑を浮かべていた。

「……変、か。その通りだな。」

そのままとことと帰っていった。

妖怪の山についたのは数分後だった。川の音や遠くから聞こえる滝の音。まるで癒しの空間だ。しかし、川の近く。その道の隅に人影があつた。水色の服を着て、帽子をかぶった少女は、色々な発明をする河城にとり。地面にぺたんと座って上目遣いで目の前の人物を見ている。

目の前にはソラがいた。明らか怪しい笑顔でにとりにあるモノを見せていた。

「……ほんとに、これ、食べていいの？」

にとりはか細い声をあげた。

「ああ、食べて良いんだぞ？」

「で、でも……こんなに大きくて太いの、口に入るかどうか……。」

「そんなときゃそんな時だ。」

にとりはその太くて大きいモノに小さい手で触れた。

「・・・じゃあ、食べるね。」

躊躇いながらも、ソラが差し出しているモノにかすかに口をつけた。

「ん・・・。」

徐々に口に入れ、そしてそのモノを、

新鮮な音とともに噛み切った。

「んんー！！！！美味いよ、このキュウリ！さすが豊穰の神がつくった野菜。」

「そうかそうか。前半の文面はさておき、美味しそうだなによりだ。」

「人間つてのは恐ろしいって聞いたけど、そうじゃない人もいるんだねえ。」

きゅうりを食べ終わったにとりは立ち上がった。

「ふう。ところで、妖怪の山に何しに来たの？」

「ああ、ちよいと烏天狗の所に行こうとおもってたな。」

「ほうほう。取材でも受けに行くのかい？」

「まあ、そんなところだ。」

にとりはへらへら笑っている。

「気をつけなよー。文は見境ないし、それに自ら取材を望むものには尚更だと思うよ？」

「その通りです！！！！」

と、上空から声が聞こえてきた。

「！」

にとりとソラは上空を見上げた。

そこには文がいた。

「また会いましたね。」

「おお、文じゃないか。」

ソラは声をあげた。

「昨日の夜以来ですね。さあ、話を聞かせてもらいましょうか。」



「・・・？」

本能って恐ろしいよね。

「さて、ソラさん。立ち話で悪いですが、色々お聞かせ下さい！外の世界ってどんな感じですか？」

「いいところも有り、悪いところもあるという感じだね。」

「ふむふむ。こちらに来て初めて思った感想は？」

「もう、ゴールしても・・・いいよね？状態でした。」

「なんだかよく分かりませんがすごさが感じてきますね！ソラさんの能力は絵を具現化させる能力だと伺っておりますが？」

「ああ。実証済みで、フランも倒したし。」

「なんと！あの吸血鬼の妹を倒すとは・・・！」

と、こんな感じで数分のインタビューが終わった。

「いやア、いいネタが出来ました♪」

「お疲れー。」

「あ、コレ昨日の新聞です。御礼に差し上げます♪」

ソラは文から新聞を受け取った。

「おお、さんきゅー。」

ソラは新聞に眼を通した。

「お、このスキマの記事。これが俺に関係するのか。なんか変な気持だなア。この薬は、てゐだろー？こーりんの店崩壊寸前？知らん。願いの叶う本？正直ほしい！」

と、感想を述べた。文は満足そうにしている。

「しかし、ソラさんはそんなに強かったんですか。」

「俺でも吃驚したよ。」

桜はソラの言葉に驚いているようだ。ソラは必死に首輪を掴んでいる手を抑えた。

「そういえば、早苗さん。昨日はすごかったですねー。フルーツのためにあそこまで身体を張るとは。ソラさん、妖怪の山にいるときは背中に気をつけたほうがいいですよ？」

「うん。後ろから包丁でざっくりって一番有りそうだし。」

文と椛は笑った。

「あはは。いくら早苗さんでもそれは・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
!?!」

文と椛は固まった。

「??」

ソラは文と椛の顔を交互に見た。

「どうしたん?」

「背中には気をつけましょう」

背中から聞こえる可愛い声。そしてソラの額から流れる冷や汗。  
そして寒気。

「・・・・その声は、早苗さん?」

ソラは恐る恐る声をあげた。

「正解です」

ソラはロープにぐるぐる巻きにされ連れ去られそうになった。

「うあああああああああああああああ!!!!!! ちょ、助けてえ  
えええええええええええええええ!!!!!!」

「早苗さああああああん!!!!!! 駄目です!人を連れ去るのはああ  
ああ!!!!!!」

「けははははははは!!!! フルーツウウウ」林檎、蜜柑、葡  
萄、バナナ、桃、ドラゴンフルーツ! 全て私のものoooooooo  
oooooooo!!!!!!」

「怖い! この奇跡の人怖iiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!」

ソラは泣き叫んだ。

「おお、やはりドSはうたれ弱い!」

「あの話は本当でしたか!」

「いや感心してる前に助けるよ犬と烏!!!!!!」

「ソラさん・・・・」

耳元でささやかれた。

「ひゃうい?!」

ソラは情けない声をあげた。

「大丈夫ですよ。怖がらないで。ただ私の前でずーっとフルーツを使ったお菓子を作ってくれば良いだけの話。霊夢さんにひとりじめはさせません。ただし、断ったら、」

早苗はソラに包丁を突きつけた。

「どうなるかわかりますよね？」

ソラは涙を流した。

（殺される！）

——ゴッ……！——

と、低い音が鳴り響いた途端、早苗が倒れた。

「……？」

後ろにいたのは神奈子。

「すまないね、うちの早苗がまた迷惑をかけて。」

「あ……いや……。」

神奈子はまた早苗を担いでぶつぶついながら帰っていった。

「早苗エ……。」

3人は同時に叫んだ。

「事実、ここにいるのはもう怖いので、俺そろそろ目的地いくわ。」

「目的地？一体何処ですか？」

ソラはにんまりした。

「ゆうかりんランド。」

「ご冥福をお祈りします。」

文と椋に同時にお祈りされた。



## 2日目の昼（後編）

天子はため息を吐きながら歩いていた。

「はア……。なんかどつと疲れた……。勘違いとはいえ、かなりの恥をかいたわ。まあ、それも気持ちよかつただけ……。でもまだ一番の目的が達成されていない。」

ソラにまだ会っていないからだ。こればかりは満足が出来ない。

「……大規模な放置プレイって思えばあれだけど、なんだかなア……。ん？」

花畑が目に入った。相変わらず綺麗なところだ。

「幽香のところか。ま、ソラもないし、今は幽香でいいかな。」  
足を一步運んだ。

すると強大なオーラが天子を襲った。

「っ……。！？」

天子は心が締め付けられるような感覚に襲われた。

（な、なに……。！？）

ソラは恐る恐る花畑の上空を見た。

禍々しいオーラが空間をゆがめていた。

「これは……。」

この心揺さぶられる感覚には覚えがある。いつも求めているこの間隔。

天子は気付けば、花畑の間を走っていた。禍々しいオーラを中心に求めて。

「ここにいる！絶対、彼は……！」

天子は足を止めた。

「……。」

天子の目線の先には、ソラと幽香がいた。お互いにらみ合ったまま  
で動かない。その光景を見た天子は心で思い切り叫んだ。

（ああああああああ！！！！あそこにいるのは、やっぱりソ  
ラと、そして幽香！！！！ドSとドSがにらみ合い、ぶつかろうとし  
ている！！！！凄い！凄い光景だああああ！！！！）

天子に気付かないソラと幽香は重い空気の中、何かを語り始めた。

「爪。」

と、幽香が言う。

「爪楊枝。」

とソラが対抗するように言っている。

（爪・・・？爪楊枝・・・？）

まだ天子は意味が分からなかった。だがソラと幽香はまだ互いに語  
り合っている。

「ロープ。」

「消しゴム。」

「バット。」

「醤油&紙やすり。」

幽香はソラを止めた。

「ちよつと待つて。その醤油と紙やすりには何の意味があるの？」

「まだわかりませんか？だったら実証をしてあげます。」

ソラは花畑に向かって歩き出した。

「？」

（？）

幽香と天子はソラをみた。

「例えば、」

ソラは花畑に隠れていた天子を掴んだ。

「ふえ！？」

構わずソラは天子の腕を掴んだ。

「この腕にですね、まず、」

ソラは天子の腕に紙やすりをあて、

そして一気にこすった。

「ツツツツツツツツツツ・・・・・!!!!」

!!

天子は声にならない叫びをあげた。

「そして、この醤油を・・・」

ソラは傷ついた天子の腕に醬油を数滴垂らした。

途端に天子はわけのわからないような気分になり、心がうずいた。

「ヒャうあああああああ！！！！！！！！」

天子はその場で蹲った。ソラは天子のその姿をみて身震いしている。

「なるほど。擦り傷にしみやすい醬油をたらして苦しめるってわけ

ね  
L

「ええ。」

「じゃあ今度は私ね。」

天子は正反対に進んでいき、花畑に手をつつこんだ。

7  
 •  
 •  
 •  
 ○  
 8

そして思い切り幽香は手を引いた。

「うわっ！」

出てきたのはリグルだった。

「まずはこのゴキブリの指を押さえて、」

リグルの指と爪の間に自分の爪を当てた。

「ああ。」

ソラは理解した。だがリグルはまだ理解していない。

「そして、一気に、」

幽香は肉と爪の間に爪を当て、そして思い切り力を入れた。

「押すっ！」

[illegible]

ああああああああああ！！！！！！！！！！」

リグルは絶叫をあげた。

「流石ですね、幽香さん。」

「貴方もね、ソラ。」

ソラと幽香はガッチリ固い握手を交わした。

4人は外に設置されているテーブルでお茶を飲んでいた。

「へえ。外の世界からねエ。」

幽香はお茶を一口飲んだ。

「で、なんで私の所に来たのかしら？やっぱり勝負しに？」

「いえ、どっちかっていうと、弟子にしてもらうためにきました。」

幽香はソラの意外な言葉に少しだけ驚いた。

「弟子？私に？」

「はい♪」

これは以外だ、と思った。さっきまでどちらが一番身近なもので拷問道具が作れるか、という勝負をしたばかりなのに、弟子になりたというソラの思い。てつきり攻撃されると思っていたのだが、

「・・・ま、まあ、弟子になりたいって言うのなら別にいいんだけど。」

「おお、ありがとうございます！」

ソラは頭を下げた。弟子が出来たことがまんざらでもない幽香は少しだけ嬉しそうに顔に笑みを浮かべた。

「でも、私は厳しいわよ？ついてこれるかしら？」

「ええ、もちろん♪」

すると幽香は立ち上がった。

「なら、まずは打たれても打たれても立ち上がる訓練よ！」

「はい！」

黙ってお茶を飲んでいる天子とリグルを置いて幽香とソラはまた互



「・・・！」

幽香は齒を食いしばった。その光景を天子とリグルは見ていた。

「ねえねえ、どういうことよ？」

天子はリグルに問いかけた。

「多分ですが、幽香さんは今ソラさんに言葉で攻撃する事も、肉体で攻撃する事もできません。」

「何故？」

「さっきソラさんは、自分を鏡だといった。つまり鏡と言うことは、今ソラさんの前には幽香さんが写って言うということ。もしその状況で殴ったり罵ったりしたら、幽香さんポジションにいる人はそりゃ相手を傷つけている。でもソラさん側からしたら、それは相手が自分で自分を傷つけていると思ひ込める。それを楽しんでいる。間接的に。もしかしたらソラさんは、すごい人なのかも・・・。」

「どつりでさっきから幽香が押し黙っているわけね。」

そう。さっきから幽香は動けていない。

気付いてしまったからだ。ソラの作戦に。

（くそっ・・・！！！！！！）

幽香は必死で考えた。この状況で、ソラを打ち負かす作戦を・・・。

「どうしたんですか？幽香さん。」

「・・・ころあいを見てるのよ。」

「なるほど」

幽香はソラを睨んだ。

（みてなさい。そのすました顔を屈辱を感じた顔にしてやるわ・・・

でも、打開策。打開策を考えなければ・・・。鏡・・・。鏡・・・。

。ミラー・・・？）

幽香は何かひらめいた。

（そうか・・・！）

幽香は思わず笑いを零した。

「・・・？」

すると幽香はソラに近づき、ソラの前にたった。

「ヤッパリあなたは鏡ね。いや、あなたは、」

幽香はニツコリ笑った。

「マジックミラー。」

「!？」

ソラは幽香を黙視した。幽香はさつきから笑ってソラをみていない。それだけで理解できた。

マジックミラー。それこそ幽香が写るが、幽香が目を瞑って笑っているということは、幽香自身は自分が見えない。しかしソラ自身は幽香が見えてしまい、罵られる事になる。

「・・・はは。」

ソラは冷や汗を流した。そして幽香から一言。

「そうやって人をいやらしい目で見ずに入られないのね。この変態。」

ソラはきつい一言を浴び、小さくぐもった声をあげて肩膝をついた。

「くっ・・・!」

幽香はまた笑った。

勝った。この状況でも勝った。やはりドSを傷つけるのは気持ちがいい。

「うふふ・・・。残念だったわねエ・・・」

幽香は日傘をくるくる回して笑っている。ソラは息を整えた。

「はア・・・。はア・・・。やっぱり強いなア、幽香さんは。俺の鏡壊れちまったよ・・・。」

幽香はソラをみた。なにやら鞆をもぞもぞしている。

するとソラは笑顔でこつちをみた。

「そんなに強いから、こんなに面白いポエムと小説がかけらんדרうなア」

ソラは2冊の本を幽香に見せ付けた。

「・・・?」

幽香はその本を見た。ソラはまじまじと本をゆらした。

その本をみた瞬間、幽香は顔を真っ赤にさせた。

「あ、ああああああ貴方！そ、そそそそそれはあああああああ！……！」

「しかし面白いですねえ。この本。しかし登場人物がだれかにそっくりだ。この蛭はー、だーれーでーすーかー？」

「あ、あああああああああ！……！」

幽香はその場で蹲った。

「勝った！善戦したあとに少し打ち負かされたけど、また打ち返した！……！」

「あの本、いったいどこで……！」

ソラは幽香に近づいた。

「幽香さん。落ち着いてください。」

幽香は涙目でソラをみた。その姿を見て多少興奮しラソラは本をみせつけた。

「これ、俺が能力で書いた本です。つまり、中身は真っ白。幽香さんの書いた本じゃないです。」

「そ、そうなの……？」

「もちろんですよ。部屋の物色なんてするはずないじゃないですか」

幽香は少し俯いた後立ち上がり、服に付いた土を払った。

「ま、まあ……。初戦だし、最初勝たせておいていい気分にしておけば後々倒した時の快感が倍になるし、そっちも倒された時屈辱

が倍に――」

「でもね、幽香さん。」

「？」

「俺の出した本を見て、あんなリアクションするってことは、もちろんもってるんですよ？小説とポエム。」

幽香は呆けた顔をした。

「俺も一か八かなーって思ったけど、あんなに可愛い反応をするとは思いませんでした。蛭と女の子が主人公の話なんて、可愛いじゃ

ないですか。」

呆けたあと、どんどん顔を赤くした。

（ぼ、墓穴をほったあああああああああああ！！！！）  
幽香はその場に崩れた。

「ふっふっふっふ……。」

天子とリグルは信じられない、という驚きの顔でソラを見た。

「倒した……。あのDSで鬼畜な幽香さんを、倒した！」

「信じられないわ。外の世界からきた人間が花の妖怪を倒すなんて……！」

天子達に構わずソラは幽香さんの肩に手を添えた。

「……？」

「幽香さん。幽香さんはおれのことがよくわかっていなかったから今日は負けてしまったんです。ですが、俺を良く知れば幽香さんは俺に勝てる。だから、」

天子とリグルは聞き耳を立てた。

「まずあの二人を支柱におきましょう。」

「そうね。」

ソラと幽香は天子とリグルの方を見た。

「え！？」

天子とリグルは少しだけ退いた。

「幽香さん、ロープ。」

「はい、ソラ。」

「ども。」

天子とリグルは動けなかった。

「ちょ、ちよっとまって！あんたらさっきまで敵対みたいなのしてたじゃん！」

「敵対って言うかトレーニングだね。」

「ええ。ソラは私の弟子になったわけだし。」

「幽香さん達が合体したらまずいことになっちゃいますよ！」  
リグルは逃げようとした。

しかし飛ばされたロープでリグルはがんじがらめになってしまった。

「ぬぐあ?!」

リグルは勢い良く引つ張られた。

「ちょ、虫小僧!？」

天子は叫んだ。

「リグルですウウウあああああああああああ!?!?!」

リグルは空中で亀甲縛りにさて、固定された。

「むぐううう／＼／＼／＼／＼／」

じたばたしてもリグルの顔は喜んでいた。

「うふふふふふふ」

天子はその場で足が震えた。いつにもまして幽香のいじめ度がハンパじゃない。

「・・・ソ、ソラ？」

ソラがいない。何処いったのか、とあたりを探した。

「・・・なあ、天子。」

突然首筋をくすぐられた。

「ひゃん！」

情けない声を上げ、足から崩れそうになったがソラに腕をつかまれ無理な体勢で止められた。

「っ・・・!」

ソラは天子の耳元で優しくささやいた。

「・・・玩具か、ペット。どっちがいい？」

「オ、玩具か・・・ペット？」

その単語に反応し、身体がうずいてしまった天子は息を荒げた。

「選べよ。さつさと。」

天子はわけが分からなくなった。

そして、

不意に、

「……りよ、両方が、いいです。」

と、言ってしまった。ソラは優しい笑顔になり、ポケットから首輪を取り出した。

その姿を見た天子は、かすかに笑った。

「どうしたんですか？文さん。」

「……なにか、すっごく記事にしたい光景がどこかで起こっているような気がしまして。」

「なんですかそれ？」

「気のせいでしょうか？」

椀と文はそんな他愛のない会話をした。

\*

「うーん、中々収穫がないなあ。」

にとりは川の近くの林を探索していた。目的はソラが幻想入りしてきたほかに、なにか外の世界のものが転がっていないか探すためだ。「てつきりほかに何は入ってきてると思ったのになあ。」

色々な策を練って探したが収穫はゼロ。何も見つからない。

「やっぱりさつきソラに色々教えてもらったほうがよかったかな？」  
今更悔やんでも仕方がない。この先を探したら一旦ラボに戻ろう。

「……ん？」

にとりは何かを見つけた。

木々の間になにやら鉄の塊。

「あれ……。」

にとりはそこに向かって走り出した。木々の間を抜け、広い荒野に飛び出た。

「幻想郷にこんなところが……。」

にとりは足を止めた。

目の前に大きな鉄の塊。ロケットが置いてあった。

「これは……。」

かなり大きい。難題も設置されているロケットはただ重々しくたたずんでいた。

「なんでこんなところにロケットが。ロケットなんて作れるもの、私以外に幻想郷にはいないはず……。」

ロケットに近づいて触ってみた。

「鉄。それにこれは、火薬のにおいと……。後はわけの分からない匂いがする。」

にとり以外に作れないロケットがここに存在する。なんだか胸がざわざわしてきた。にとりはもっと近づいて何かないかと探し始めた。

「発射ア！」

と、誰かが叫んだ。

——ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ  
ッ！——

地面が揺れ始めた。

「！？」

にとりは地面の異常な揺れに少しだけ腰を抜かしそうになった。

「な、なに？！」

するとロケットの噴射口から風が拭き始めた。

「そんな、嘘でしょ！？」

ロケットが発射される。そう理解したにとりは急いで樹木の影に隠れた。

「っ……！！！」

物凄い突風と熱風がにとりを襲った。

ロケットはどんどん高く飛んでいった。

「っ……！！」

にとりは爆風に耐えながらロケットを目でたどった。ロケットが小さくなっていき、音も小さくなってきた。

そして、広大な光がにとりの目に入ってきた。

——ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ——

さつきよりも強い爆風が襲い掛かってきた。

「そんな無茶苦茶な……！！！！！」

にとりは帽子を押さえ、必死でその場に蹲った。

徐々に風が収まっていき、そして最後には何事もなかったかのよう  
に静けさを取り戻した。

「・・・。」

にとりは慌ててロケットの置いてあった場所を見た。

「・・・一体だれがこんな、」

すると荒野の崖から誰かが出てきた。

「!？」

にとりはステルス明細で身体を透明にし、その姿を見た。

『ハハハハ。実験大成功!』

と、低い男の声が聞こえてきた。

(実験・・・?)

にとりは聞き耳を立てた。他にも色々な人の声が聞こえる。だが先ほどの爆風で耳がすこしキーンとなり、かすかにしか聞こえない。

「・・・。」

必死で聞き耳を立てている。

だが、にとりは後方から迫っている何者かの足音に気が付かなかった。

その巨体は、にとりにどんどん近づいていき、大きな口をゆつくりと開け始めた。

(お・・・ああ・・・。)

その『ブルーベリー色をした裸の巨人』は、にとりのすぐ後ろに迫った。

「!？」

さつきを感じたにとりは慌てて後ろを向いた。

「・・・!？」

だが、数秒遅かった。

その巨体は、にとりに向かって、その大きな口を高速で近づけた。

数秒後には、にとりのいた場所にはステルス明細の壊れた破片し

か残っていないかった。

## 2日目の静かなる夜（前書き）

ここから先は、さまざまなのが幻想入りしてきます。

「チャージマン研!」「青鬼」などが主流になったりしますので、分からない方はニコニコ動画などで確かめてからみた方が面白いと思います。それでは、物語をお楽しみ下さい。

## 2日目の静かなる夜

「え……。今日はテントで泊まる？」

慧音はお茶を机においた。

「うん。ソラが泊まりに来るから。」

「?!……。お前のテントにか?!」

「ああ。そこで外の世界の事について話してくれるって。」

「そ、そうか……。じ、実は私も、今日妹紅を泊めようと思って呼んだのだが……。」

「そうなのか？ああ、でもごめん。先にソラと約束しちゃったから、また明日誘ってよ！その時は喜んで泊まりに来るから。」

そういつて妹紅は慧音に御礼を言つて家を出た。慧音は妹紅が出て行くと、途端に寂しそうな顔をした。

「……。まるで、お互いの事を知り合う親友みたいだな。」

慧音はお茶を啜ろうとはしなかった。

妹紅は外を見た。

「あれ、曇つてる……。？」

夕方頃まではかんかんに晴れていたのに今は空はおるか、月の光すら見えていない。

「そんなに話し込んだじゃったのか。」

妹紅は自分のテントに戻つていった。

「霊夢。ちょっと変じゃないか？」

魔理沙は霊夢に問いかけた。

「なにが？」

「さっきまでずーっと晴れてたんだぜ？それが急に曇りになっちま

うなんて、おかしいだろ？」

「そう？天気なんてものは変わりやすいものよ？」

「でもさア……。」

「そういえばさっき、変なかな爆発音と突風が吹いたわね。そ  
ちのほうが変わじゃない？」

「そうか？私には聞こえなかったけど。」

「……まあ、聞こえないほどかすかだったしねエ。結界の方は大  
丈夫かしら？」

魔理沙はお茶を飲んだ。

「心配なら見に行ったらどうだ？お前も一応決壊にはかわってる  
だろ？」

「嫌よ、めんどくさい。」

「紫気絶してるんだろ？尚更じゃないか。」

「全く、なんで気絶なんかするのよ。」

「あれだろ？ソラが幻想いりしてくる時に覗き込んだから、それで  
ソラと紫の頭がゴツツンコって落ちたろ？」

「なにそのギャグマンガみたいな落ち。そういえばアリスはどうし  
たのよ？」

魔理沙は今更気付いた。

「ああ、アリスなら一体人形を作りたいって言ってたから残ってっ  
たぜ？」

「へえ。」

その頃、アリスは自宅で人形を作っていた。

「……怪我させちゃったんだし、これくらいはしてあげないと。」  
アリスはソラを元にした人形を作っていた。

怪我させてしまったこともかねて、ソラにこの人形をプレゼント

しようと思ったのだ。

「いいなーって言ってたから、コレくらいしかできないけど、そもそも男の人って人形持ってたて恥ずかしくないのかしら？」

なんてぶつぶつ呟いていると、ドアの方から物音がした。

「ん？」

アリスは立ち上がったてドアに向かった。

「誰？」

声は聞こえない。誰かと思ってドアを開けた。

「・・・？」

誰もいない。悪戯だろうか。

「魔理沙かしら・・・？」

外に出ようとする、足に何かぶつかった。

「わっと・・・！」

躓きかけたが、どうにか持ちこたえた。

「何よ全く・・・。」

足元を見ると、小包みが置いてあった。

「・・・小包み？」

それを手にとり、宛名を調べた。

「・・・宛名がない。」

一旦家の中に入り、小包みを机の上に置いた。

「誰からよ。」

少し躊躇うが、中身をみなければ分からないと思ったアリスは包装紙を破り、箱を開けた。

「！」

箱の中身は人形だった。緑色の服を来た、一昔前のような人形。

「・・・綺麗ねエ。」

アリスは人形を持ち上げた。

「修理してほしいのかしら？でも何処も傷ついていないし、プレゼント？なんで私に人形をプレゼントなんか・・・。」

そして誰から来たのか考え始めたアリスは途端に顔を真っ赤にした。

「ま、まさか・・・、魔理沙から!?」

と勘違いしたアリスは両頬に手を当てて恥ずかしがった。

「そ、そんな。こんな粋なプレゼントなんて・・・。に、似つかわしくない! 私別に誕生日でも記念日でもないのに・・・。／＼／」

「・・・魔理沙にこんなの作れる素質も、ましてや買えるお金もないわよね?」

ため息をついた。まあ、確かにそうだ。

「じゃあ、この人形は一体誰が・・・。」

やはり修理に出されたのだろうか。

「・・・ま、いつか。」

とりあえずその人形を棚に置き、身支度をした。

「さ、霊夢の所に向かわなきゃ。」

アリスは電気を消し、家を出た。

一瞬だけ、人形の目が光った。

結界の前には藍がいた。

「・・・。」

決壊が壊れていた。

「くそっ・・・!」

藍は急いで紫を起こしに行こうとした。

「何故壊れている! そんな気配はなかったはず・・・! 何故・・・!」

「橙は・・・! 橙や紫様は無事なのか・・・!?」

藍は走り出し、自宅に向かおうとした。

「まずい。まずいぞ・・・!」

だが紫が確実に起こるとは考え難い。この場合、今は霊夢の所にいくのが先決だ。そう考えた藍は方向を変え、霊夢の所に向かってい

った。

「・・・変ね。」

幽香が呟いた。

「ん？」

周りにいた3人が幽香のほうをみた。

「様々な殺気が回りに生まれてるわ。」

「殺気？」

「・・・一つ一つの殺気は弱い。でも、一つだけ周りより強い殺気が生まれてる。」

「どういことですか？」

「分からないわね。」

幽香はまた紅茶を飲み始めた。

「・・・。」

ソラは身支度を整えた。

「それじゃあ、俺そろそろお暇させていただきます。」

「ええ。」

ソラは立ち上がり、ドアをあけた。

「・・・曇ってる。」

回りも釣られてみ始めた。

「突然ね。月明りすら見えないわ。」

相当あつい雲なのだろう。

「・・・突然発生する雲かア。チャー研のまわりに分厚い煙が発生するロケットのアレに似てるな！。あれも突然発生したっけ。」

「チャー研？」

リグルが問いかけた。

「ああ。かなーり昔のアニメ。正式名称はチャージマン研っていう

んだ。すつげえキチガイアニメだからすげー面白いつけ。まあ意味わからないところもあるけど。敵の弱さ半端ない。」

「へえー。」

3人は頷いた。

「じゃあ、また。」

と、ソラが出て行った。

「あ、ちよつと待ってよオ！」

天子は急いでソラを追いかけた。

「・・・。」

幽香とリグルはソラをみていた。

「あの人、なんかすごいですね。」

「ソラ？」

「ええ。すつごいSっぱいし、幽香さんにも勝っちゃいましたし。」

「・・・ええ。」

「・・・ところで幽香さん。あの本って、蛭っていつてましたけど、それってもしかしてわた」

「死にたい？」

「すいません、生きたいです。」

「逝きたいのね。わかったわ。」

「言葉って難しい！！！！！！！！！！」

「ソラー？どこー？」

天子はあたりを探した。

ソラはすぐ見つかった。あついのか帽子を脱いでいる。天子は駆け寄ってソラに話しかけた。

「でもソラのこと見直しちゃったわ。あの幽香倒せるなんて驚きよ。」

「・・・。」

「す、少し見直したわ。で、でも私には勝てないけどねエ。」

「・・・。」

「あれ・・・。あ、そうだ。今日はもう遅いし、私の所に泊まりに来なさいよ？いいわよー？私のところは広いし、それに美味しいご飯だってあるわよ？ソラにあげるのはもったいないけどー。」

「・・・。」

ソラはずっと天子を無視している。

「ちょ・・・。ソラ!?」

「・・・。」

「ね、ねえ・・・。何か喋ってよ・・・。なんか、寂しいじゃん。」

「・・・。」

天子はどんどん涙目になってきた。

「ね、ねえ・・・。お願いだから・・・。かまってよ・・・?」

ソラはそれでも無視し続けている。

「・・・か、かまってよ。かまえよお!!!!」

声を荒げてしまった。だがソラは無視をして角を曲がっていなくなってしまった。

「う、ううう・・・。。。」

天子は立ち止まり顔を真っ赤にして叫んだ。

「放置は一番嫌いなんだあああああ!!!!」

「うるせええええええええええええええええええええええ!!!!!!」

後ろからソラにとび蹴りされた。

「へぶえう・・・ツツツ／／／／／／／／／／」

天子は顔面から地面に転げ落ちた。

「ったく!さつきからかまえかまえって・・・。うるさいっとなにいよ!」

「な、なんで後ろから・・・?そ、そつちが・・・ほーちするからでしょー・・・が・・・。」

「あ?なんかいったか?」

「なにもいってないわよ!」

ソラは帽子の位置を直した。

「とりあえず、俺は妹紅の所にいくが、お前はどつする?」

「!・・・行く!」

「そうか。なら黙って付いてくるんだな。」

ソラはずかずかと歩き始め、天子はその後ろをてこてこついていった。

妹紅は折れた枯木を集めて火を焚いていた。焚き火の上には味噌汁の入った鍋が設置されていた。ぐつぐつと煮えた味噌汁からはいい香りが立ち込めている。

最近味噌汁を作るのが日課になってきている。ほかにご飯を炊くくらいしかでないが、この一般的なご飯が一番上手く感じる。

妹紅はそう感じていた。

「さて、そろそろ来る頃かな。」

妹紅はソラを待っていた。目的は、ソラのことを知ることと、ソラが来た外の世界のことを知ることだった。

「・・・。」

異性と寝泊りするというのは抵抗があるが、コレも楽しみの一つになるかもしれない。

「おっと、味噌汁が吹いちゃう。」

急いでかき回すと、また味噌汁のいい香りが立ち込めてきた。

「おお、美味しそう。」

これほど美味そうにできたのは数週間ぶりだ。これは客をもつと歓迎したくなってくる。

「さーで、ソラはいつくるか・・・、」

奥から何か聞こえる。

「な・・・?」

なにかを潰すような音だ。なんだろう。

気になった妹紅は鍋を火から遠ざけてその場に言ってみた。

「そっぴや数時間前からなんか変な気配があるな……。」

いつもの悪戯を仕掛ける妖精の気配でも、ましてや輝夜が私を倒しに来る気配でもない。一体何の気配だというのか……。

「ひょっとしてその根源が近くにいるのか……？」

妹紅は息を殺して近づいた。どんなにかを潰す音が近づいている。

妹紅は息を呑んだ。そして木の影から何かを覗いた。

「！？」

「ソラ、痛い……。痛いよ……。」

「踏まれてんのに気持ちいいのかよ。やっぱドMだな。お前。」

ソラは踏むのを止めた。

「あ、駄目！やめないで！お願いします……っ！！！！」

天子にやめないでといわれたソラはさらに嬉しそうな顔をした。

「おい、お前ペットだろ。何で言葉喋ってんだ。」

「あ……にや、にやあ……／＼／＼」

ソラと天子の行動をみた妹紅は少し引き気味な顔で2人を見ていた。

「……。」

この時、妹紅は思った。

私は、この人と夜を共にして良いものかと。

ソラは顔を覆って頂垂れていた。

「……ごめん。」

悪いことをしてもいないのに妹紅は謝ってしまった。

「見られちゃったよ……。天子苛めるのに夢中になってて竹林にいるの気がつかなかった……。」

「……ああ、凄い光景だったよ。」

さらにソラは頂垂れた。

「だ、大丈夫だ！せいへ・・・、趣味は人それぞれだから！」

ソラは地面に顔をこすり付けた。

「うああ？！ち、違う！あれだよな？今後ろで喜んでいる天人が踏んでくれって言ったんだよな？そうなんだよな？」

「・・・。」

ソラは視線をそらした。

「違うの！？」

「暇だったもので。」

「暇で人を踏むのはもう逃れられないよ！お前は幽香か！！！」

「俺は甘党だ！」

「だろうね！」

ソラと妹紅はなんだかよくわからない会話を繰り返した。

「あ、そうそう。向こうにはどんな人がいるんだ？」

この会話を続けられそうにないのでソラに別の質問を聞いてみた。

「ん、ああ。紫が大好きな奴がいたり、文が大好きな奴がいたり、

諏訪子が大好きな奴がいたり。」

「個性的なやつらだな・・・。」

「こつち来てたら絶対に理性保ててねえな・・・。」

「怖いな・・・。」

お互い黙り込んだ。すると天子が起き上がった。

「ああ、気持ちよかった・・・／＼／」

天子はこちらを向いた。

「あれ、あんたら何はなししてるのよ。あたしも混ぜてよー。」

ソラはため息を吐いた。

「仲間はずれて言うのはいまいちゃいけないわ。というわけで、その不老不死。私にソラの隣を譲りなさい。」

「ん、ああ。」

天子は無理やりソラの隣に入ってきた。

「っ・・・。」

ソラは聞こえないように小さくしたうちをした。

「ねえ、ソラ。やっぱりこういうところは止めてうちにきなさいよ。温かいわよー？」

「。。。。」

ソラは微笑しながらこめかみに血管を浮かべてきた。

「照れなくてもいいのよ。全く、照れやなんだからソラは」

天子は背中をばしばし叩いてきた。

ソラはとうとう目を見開いて天子に向かって何かを投げた。

「およ？」

（束縛「玩具犬の拘束首輪」トイドッグチェーン」）

新しい技が発動し、大量の首輪や手錠を実体化させたソラは天子に向かって手錠と首輪を投げつけた。

天子は大木に拘束された。手首はロープと手錠で縛られ、目隠し

され、しかも首輪を大木に繋がれているので一ミリも動けない。しかも少し肌を露出させられている中、自動で動画撮影されている。

「んんー。。。んんー。。。／／／／／／／／／／」

天子は心なしに笑っているように見えた。

「ったく。。。。」

ソラは無表情で怒っている。

「。。。ああいうことされたら、ソラでも怒るんだな。」

「当たり前だろう。」

「まあいいや。あたしもなんだか関わりたくなってきたよ。」

とりあえず喘いでいる天子はさておき、ソラと妹紅は竹林と道の間の草が生えているところに場所を移動していた。ここからなら月も見え、寝転がるには丁度いい斜めの地形となっているので最適だと

妹紅は考えた。今は曇っていて月は見えないが、場所はいい。

「おお、確かに良いところだな。場所も広いし。」

「だろ？私もお気に入りの場所だ。慧音も知ってる。」

「仲良いんだな。」

ソラにそういわれた妹紅は小さく笑った。

「ああ。あいつにはお世話になりっぱなしだからな。いい奴だよ、慧音は。」

「ああ、俺もあの人はいい人だと思うよ。第一印象であそこまでいいと思える人は初めてだ。」

「うん、そうだなア。」

と、やっと会話に調子を取り戻した。

「……………」

その後ろで顔を真っ赤にしている慧音がいた。

「も、妹紅が、私のことをあそこまで……………」

心配になって付いて来ていた慧音は話しかけようと思っていたのだが、こんな事を言われては出れるわけがない。

「……………」

心臓がバクバク高鳴って、ばれやしないかと不安になってきた。

（な、なぜこんなにドキドキする！？私は、妹紅とずっと一緒にいるのに……………、こんな、妹紅の言葉で……………なんで……………。）

息苦しくなってきた。なんだか妹紅の近くににいるのが難しくなってきた。

「なあ、ソラ。」

妹紅がソラに話しかけていた。慧音は聞き耳を立てた。

「ソラは、寂しくないか？」

ソラは妹紅のほうを見た。

「……………なんで？」

「だってさ、お前はもともと外の世界から来たんだろ？友達だって

いるし、知り合いだっているはずだ。帰れる方法が分からないなら、もしかしたらソラは、ずっとここで暮らさなきゃならない。それは、寂しくないのか？」

ソラは妹紅を見つめた。すると静かに言葉を発した。

「・・・確かに、あいつらとこれから会話できなくなるってのはつまらない。いい奴らだしな。馬鹿で大騒ぎする奴らで、エロイ奴もいれば凶暴な奴もいて、オタクで、マニアで、アニメ好きのエロゲ好きのギャルゲ好きのやつらも、ロリコンも、巨乳好きのやつもいる。」

「それほとんど悪口・・・。」  
するとソラはかすかに笑った。

「でもな、俺はそういう馬鹿な奴らが大好きなんだよ。馬鹿は時として、天才を超える。馬鹿じゃなきゃ、空を飛ぶなんてことも考えなかったし、地球の外へ旅立つなんてことも考えなかった。だから俺はそんな馬鹿な奴らが好きなんだ。同時に無茶する奴もな。」  
妹紅は少し吃驚している。

「幻想郷の皆もさ、すげーいい奴らばかりじゃん。こんなマニアな一面もあって、かつこよくもなくって、甘党で厨二病で、頭も悪いドSな俺を、皆は明るく歓迎してくれた。」

ソラは幻想郷にきてからの皆の笑顔进行を思い浮かべていた。

霊夢にお寶銭をあげたときの笑顔。魔理沙と意気投合した時の笑顔。萃香と仲間と認め合った時の笑顔。天子と遊んだ時の笑顔。チルノと親友になると約束した時の笑顔。全てが鮮明に蘇った。

「なんかさ、助けられたんだよな。自分の人生はつまらなくて、それでいて、捨て難い。そんな人生が、今とっても明るくなってさ。」  
ソラは上空を見ながら笑顔になっている。

するとソラは妹紅のほうを見た。

「実はさ、幻想郷の住人の中で、一番に好きになったの、妹紅なんだよ。」

そついわれた妹紅は肩を振るわせた。

「わ、私!？」

「そう、妹紅。」

妹紅はどんな顔を赤くしていった。

「で、でも・・・、なんで？」

「なんで？んー、なんていうか・・・、憧れだったのかもしれないな。」

後ろにいた慧音は静かに聞いていた。

「・・・憧れ。」

妹紅も同時に聞いていた。

「憧れ？」

「そう。この竹林で、一人で頑張って生きている姿にさ、惚れ込んだのかもしれないな。それが、異性としてなのか、それとも親友としてなのかはわからないけど。」

ソラは頬を指でかいた。

「まあ、これは向こうで言ったら妄想オタクっていわれるんだろうけどなw」

今まで溜め込んでいたものを出し切ったようなソラは腕を伸ばして地面に寝転がった。

「・・・。」

それを見ていた妹紅も同じように横に寝転がった。

ソラの横顔をじっと見た。

なんだかその顔は、大人っぽいところもあるけど、どこか少年っぽくて、不思議だった。

「・・・。」

その後ろで慧音は薄く笑っていた。

「・・・まるで、付き合いたての恋人同士だな。」

その場を離れようとした。すると隣から声が聞こえた。

「ねえ、目隠しとってくれない？」

さっきまで激しく動いていた天子がおとなしくなっている。

「……。」

天子の姿にも驚いたが、慧音は臆することなく目隠しを外した。

天子はソラと妹紅の姿を見た。

「……。」

慧音は天子の目を見た。

その目はどこことなく寂しそうで、悲しそうな顔だった。

「あの二人、邪魔しないほうがいいのかしらね。」

天子は重々しく言った。

「私にはどうする事もできない。人の楽しみを邪魔するほど、私は外道ではないからな。」

「……でも、あんたも妹紅のことは大好きなんでしょ？」

「……ああ、そうだな。」

すると天子は少しだけ強い口調で言った。

「私もね、ソラがけっこう好きだわ。」

慧音は天子を見た。

「……幻想郷の皆は、わたしがこんな性格だから数分絡んだだけでみんな別のところへ言ってしまう。今まではそんなの構わなかった。換わりに絡んでくれる人はいっぱいいたわ。幽香だったり、衣玖だったり。暇なときも有ったけど、ソラが来てからは何かが違った。」

天子は微かに笑った。

「凄く嬉しかったのよ。いつでも私と一緒にいてくれて、遊んでくれて、苛める事もあったけど、それも凄くうれしくて。見た目は普通なのにさ、なんだか、離れると凄く寂しくて、嫌だった。」

天子は軽く項垂れた。

「本当は、二人つきりで過ごしたかったわ……。でも、ソラは霊夢の所に行ったり、幽香のところに行ったり、私とは二人つきりでいてくれない。だから、少しだけイライラすることも有ったわ。」

すると天子は吹っ切れたように明るくなった。

「……こんなことあんたに言っても仕方ないわよね！何言ってん

だろ、私。さ、もういいわ。ソラがせっかく仕掛けてくれた目隠し、もう一度してくれる？早くしないと興奮がおさま」

「お前はいいやつだな。」

慧音にそんなことを言われた天子は慧音のほうを見た。

「……え？」

「……それほどまで、人を愛せるのは、いい奴な証拠だ。ソラもきつと、それをわかっていてくれてる。もしソラがお前のことが嫌いだったら、絶対にこんなことはしてもらえないと思うぞ？」

天子は驚いている。

「で、でも……、ソラさつき、妹紅に好きだって……。」

「私だって好きな人は沢山いるさ。妹紅だけじゃない。チルノや大妖精やリグルや、もちろんルーミアだって好きだぞ？皆明るく、とても素敵な者たちだ。」

「それ、貴方の寺子屋の生徒じゃない。」

「それがどうした？世の中に好きになっちゃいけない人はいない。例えばそれが恋愛でも、親友でも、好きと言う言葉はどんなスペルカードよりも、弾幕よりも、とても強いものだ。」

慧音はソラと妹紅を見つめた。

「……ソラは憧れだといった。それも好きということ。お前のソラを思う気持ちも好きということ。私の妹紅に思う気持ちも、好きということだ。」

慧音の言葉を聞いた天子は少々恥ずかしくなってきた。

「……綺麗事いっちゃってんのよ。」

「悪かったな。」

天子は声を張り上げた。

「もう、いいからその目隠し早く戻しなさい！もう興奮が切れちゃうでしょうが！」

「はいはい、わかったわかった。ほら、アイマス」

慧音は動きを止めた。

「ん？どうしたのよ……。」

天子は慧音の手を見つめた。

震えている。

「ちょ、ちよつと・・・、どうしたのよ。」

「あ、あそこにいるのは・・・。」

「え、なに？」

慧音は恐る恐る指を差した。

「ん・・・？」

天子は細目でソラと妹紅のほうを見た。

なんとそこには、ルーミアがいた。

「・・・お兄ちゃん、みつけたのかー。」

ルーミアは鋭い眼光でソラを見つめている。

「げエっ！？常闇の精！？」

天子は叫んだ。

「まずいぞ。ルーミアがあそこにいるとソラがかなり危険だ・・・。

ソラ！早くそこから逃げろ！ソラ、聞こえないのか！？」

慧音は大声で叫んだ。

「ソラ逃げて！超逃げて！！！」

しかし、眠ってしまっているのか動こうとしない。

「くそっ・・・！ルーミア！その人は食べちゃいけない！ルーミア！！」

慧音が叫んでもルーミアは聞こえていないらしい。

「うそオ！？」

天子はもがいた。

「ちよつと！ソラ助けってくるからコレ外して！」

「あ、ああ。分かった・・・！！！」

慧音は天子を縛っているロープや手錠を外そうとした。

「ちよつと！なにしてんのよー！」

中々拘束具が外れない。

「固く結ばれているんだ！」

「え、ソラと私が!？」

「違う!だが言葉は難しい!!!!」

慧音が天子に身体を寄せて力を入れた。

「は、早く早く!!!!」

ルーミアは口を大きくあけてソラに近づいている。

「わかってる!少し胸が当たるが気にしないでくれ。」

「え……!？」

天子の背中に慧音の『大きな』胸が当たった。それだけで天子は双方から夢想封印とマスタースパークを受けたような衝撃に陥った。

「ど、どうした？」

「……喧嘩うってんのか、この巨乳教師め。」

「な、何言ってるのか良くわからないが、もうすぐ外れるぞ……!」

数秒後、拘束具が外れた。

「よし!助けに行くぞ!」

「ええ!」

天子と慧音はソラ達のほうへ向かった。

それと同時にルーミアが屈んだ。

「なあ!？」

天子と慧音が同時に叫んだ。

「ルーミア!食べちゃ駄目ええええええええええ!!!!!!」

そして天子と慧音はルーミアの肩を掴んだ。

「ま、間に合った!」

「ルーミア!あれほど人を食べてはいけないとどれほど教えれば……」

ルーミアの様子がおかしい。肩が震えている。

「……ルーミア?」

寒いのだろうか？しかし今は肌寒さを感じない。

「どうしたのよ？」

天子もルーミアに問いかけている。

「ア．．．．．ああ．．．．．」

ルーミアはさつきよりも震えだした。

「ど、どうしたんだルーミア！」

ルーミアの肩を引つ張り、正面で向き合った。

「どうした！何故こんな震えている！」

今まで怖がる事もなかったルーミアが怖がっている。

「ああ．．．．．」

ルーミアは震える手で右を指差した。

「．．．？」

天子と慧音はゆっくりと右の方向を見た。

林の中で、何かが揺れていた。

木ではない。大きな大きな何かだ。

そして、その大きな巨体のところに、2つの眼光がこちらをにらんだ。

「ツツツ．．．．．！！！！！！！！！！」

それと同時に天子と慧音に強大な殺気が襲い掛かってきた。

（な．．．ツツツ！！！！！！！！！！）

（なんだ、これは．．．ツツツ！！！！！！）

2人ともルーミアと同じように全身が震えてきた。



得体の知れない音が鳴り響いた。

慧音と天子はまだその場に直立不動している。ソラと妹紅に動きはない。

天子はその場に膝から崩れた。

「や、やだ．．．。ソラ．．？ソラ、返事してよ．．。ソラ．．．！」

返事はない。その大きな化け物は大きな口をあけたままもぞもぞ動いている。

天子は泣きながら大きな声で叫んだ。

あああああああああああああああああああああああ  
あああああ！！！！」

刹那、大量の空色の弾幕が目の前を掠った。

巨大な化け物は吹っ飛び、数メートル先に落下した。

「ああ・・・。」

その姿を見た天子は笑った。

紙とペンを持ったソラは地面に着地した。

「ソ、ソラ！妹紅は！妹紅は無事か！？」

ソラは抱きかかえていた妹紅を慧音に引き渡した。

「大丈夫に決まってるんだろ。それより、お前ら無事か？」

「私は大丈夫だ。だが、ルーミアが精神的にダメージを食らっている。」

ルーミアはまだ震えていた。

「そうか・・・。」

するとソラがルーミアの頭をなでた。

「残念だったな。俺を食べられなくて。」

ルーミアは少しだけソラを見た。

「でもごめんな。今急用が出来ちゃった。」

ルーミアから手を放すと、ソラは鋭い眼差しでその巨体を睨んだ。

「・・・幻想郷でお前の姿を見るとは、夢にも思わなかった。」

その巨体はゆっくりとこちらを睨んだ。

「・・・何故だ。何故。」

そのブルーベリー色をした全裸の巨人はにたりと笑った。

「なぜ、青鬼が、幻想郷に姿を現す・・・。」

とうとう、異変が始まった。

## 襲い掛かる異変

青鬼はにたりと笑ってこっちに近づいてきた。

「逃げる・・・。」

周りにいた人たちはソラを見た。

「あいつは絶対に倒せない。だから、今は逃げる！」

ソラの合図とともに、周りにいた者達が散り始めた。

その瞬間、青鬼は猛スピードで追いかけ始めた。

「ソラ！あれはなに！なんなのよ?!」

天子は走りながらソラに問いかけた。

「あれは青鬼だ！空想世界の化物で、人を喰らい、どこまでも追いかけてくる最悪の化物だ！」

「なんであんな奴が幻想郷にいるのよ!!!」

「俺は知らん!!!」

2人は並走した。

「ちよつと・・・！慧音達がいらないわよ！」

「別れたんだ！慧音は青鬼を困らせようとして二手にわかれたんだよ！」

「でもあの化物、こっちに来てるじゃない!!!」

「だからしらねえって!!!」

「どんどん青鬼との距離が近くなってくる。これは危険すぎる。・・・!!」

天子のスピードが落ちてきている。

「天子!？」

息がきれるのが早すぎる。

「そ、そんな・・・。」

天子のスピードが尽きようとしていた。

「つく・・・！！！」

ソラは天子の手をひいた。

「！？」

「俺から離れるな、天子！！！！！」

ソラは天子の手を引いて、角を曲がった。

青鬼はあたりを見回し、そしてそのまま奥へと消えていった。

「はア・・・。はア・・・。」

ソラと天子はその場でへたり込んだ。

「・・・ソラ、どういうこと？これは異変？」

「分らん。でもその可能性は高い。」

ソラは低い学習能力で考えた。

「・・・ともかく、霊夢のところだ。そこにいけばなんとかなる。」

ソラは立ち上がり、木の影から道を見た。

青鬼はいない。どうやら撒いたらしい。

「はア・・・。」

安堵の息を漏らしたソラは道に出ようとした。

すると突然後ろから口をふさがれた。

「！？」

驚愕したソラは手足をバタつかせた。

『おちつけ！私だ！』

小声で喋りかけてきたので焦ったように後ろを見た。そこにいたのは慧音とルーミアだった。

『音を出すな・・・。』

慧音は目線で方向を示した。ゆっくりと慧音の目線の先を見る。

そこには青鬼がうつろっていた。まるで獲物を捜し求めているかのような動きで。

「・・・。」

数秒キヨロキヨロし、そして奥へと消えてしまった。

「あ、あぶねエ……。」

「ソラ。あの化け物は一体なんなんだ？」

「ただの化物だよ。それしか言いようがない。」

「そ、そうか……。」

「……。ところで慧音。」

「ん？」

「……。いつまで俺を抱え込んでいるんだよ。」

慧音はソラを自分の胸に埋めている事に今更気付いた。

「ひ、ひやああああ！！！！」

ソラを思い切り樹木に顔面から投げ飛ばしてしまった。

「おごふっ！？」

ソラは地面に崩れ落ちた。

「ど、どさくさに紛れて何処に触っている！恥を知れエ！」

「俺被害者なのに……。っ。」

「ソ、ソラ！？」

ソラはだくだくと血を流した。

「大丈夫なのかー？」

ルーミアはツンツン頭をつついてきた。

「お、俺は大丈夫だから……。とにかく、今は霊夢のところだ。」

「霊夢の？」

「ああ、異変は多分ここだけじゃないと思う。青鬼は神出鬼没だ・。  
。」

「わかった。」

「ところで、妹紅は？」

「天子の横で休ませている。」

「怪我したのか？」

「いや。だけど突然の出来事に少し戸惑っている。」

「そうか……。」

ソラは妹紅の所に近づいた。

「妹紅。」

「ソラ。これは一体どうということなんだ？」

「緊急事態だ。今から霊夢の神社にいく。」

「なんで？」

「異変が起きたんだ。急ぐぞ。歩けるか？」

「あ、ああ。」

妹紅は慧音の顔を見た。慧音の深刻そうな顔つきを見た瞬間、妹紅もおふざけではないらしいと気付いた。

「よし、皆行くぞ！」

5人は気配を殺して博麗神社へと向かった。

「周りに誰もいないか？」

綺麗に順番に並んだ天子、慧音、ルーミア、ソラ、妹紅は同時にあたりをキョロキョロした。

「大丈夫だ、問題ない。」

ソラは言った。

「よし、行くぞ。」

慧音の一言で動いたソラ達はそそくさと階段を上がり、博麗神社前に到着した。

「・・・？」

ソラは疑問に思った。この時間帯は霊夢もまだおきているはず。

でも、おかしかった。

静か過ぎる。今の博麗神社は静か過ぎたのだ。

「・・・。」

縁側に足をおき、そしてゆっくりと襖に手をかけた。

「・・・霊夢？」

返事はない。意を決したソラは勢い良く襖をあけた。

「?!」

妹紅たちが息を飲んだ。

「・・・なんだよ、これ。」

神社の中がめちゃくちゃに荒らされていた。タンスは倒れ、ちゃぶ台は真つ二つに折れていた。

「どういうことだソラ。これは一体・・・。」

慧音が信じられないといわんばかりの反応をした。

「・・・俺たちを襲う前に、多分青鬼がここにきたんだ。でもわからない。青鬼のような化物が霊夢の前に現れたら、確実に霊夢は逃げるはず。こんな狭い部屋の中で暴れたりはしない。暴れるなら外か、または広いところだ。」

「・・・確かに。」

辺りに誰かいないかと探そうと思った。

「ソラ！」

妹紅と天子から声が上がった。慧音とソラは咄嗟に後ろを向いた。

石段の方から足音が聞こえた。

「誰だろう?」

妹紅が近寄ろうとした。

「さて、妹紅! 誰だかわからないし、この状況下で近づくのは危険だ!」

とりあえず妹紅をこちらによせ、石段を黙視した。

「・・・。」

足音が止まった。

「・・・?」

すると鳥居の横の茂みから閃光が見えた。

「?!」

それと同時にかすかに声が聞こえた。

『夢想封印！』

その言葉と同時に虹色に光る夢想封印がこちらに向かってきた。

「ぬお！？」

ソラ達は間一髪で避けた。

「夢想封印ということは・・・、」

慧音は前方を見た。そこには霊夢がいた。

「霊夢！私達だ！攻撃を止めてくれ！」

「！？・・・慧音！それにソラも・・・！」

霊夢は手を下ろした。

「無事だったのね、貴方達！」

霊夢が駆け寄ってきて心配そうにたずねた。

「コレは一体どういうことよ！」

「異変が起きたんだ。今幻想郷はかなり危険なんだ。とにかく逃げ場所をみつけないと——」

ソラが移動しようとしたら霊夢に裾を掴まれた。

「まって。」

ソラは霊夢を見た。

「・・・魔理沙が、怪我を負ったわ。」

ソラ達は永遠亭の中にいた。その中の光景を眼にしたソラ達は愕然とした。

怪我を負った者達が唸っていた。

「永琳。つれてきたわ。」

「ありがとう。ソラ達に問題はないわね。あとはまだ無事が確認で

きていない人たちね。」

「ええ。」

ソラは永琳と霊夢に近づいた。

「この人数は・・・？」

永琳は少し疲れた顔でソラに説明した。

「怪我をしたものたちよ。原因は分からないわ。ひどい状況よ。薬があるから、幻想郷の皆は大体永遠亭に避難してきてるわ。」

「いつの間に・・・。」

すると霊夢に裾を引っ張られた。

「こつちに来て。」

霊夢に連れて行かれたのは他の部屋だった。

「魔理沙。」

ソラは座っている魔理沙を見た。

「ア、霊夢。」

魔理沙は腕を押さえていた。

「まずったぜ。暗闇の中走ったのがいけなかったんだな。」

「一体誰にやられた。」

「・・・変な化物に追いかけられた。それでな。」

やはり原因は青鬼だった。コレで理解できた。やはりこれは異変だ。なんらかの問題が生じて、青鬼が幻想郷に来ちまったってのか。これほど深刻な問題が今まであっただろうか。

周りを良く見ると良く知った顔がいた。あそこにいるのは文と桜とはたて。レミリアにパチュリィ。それに妖夢や幽々子までいる。

ここらへんの奴らは怪我はしていないが、救護に当たっているようだ。

「ソラ・・・！」

チルノ達が駆けて来た。

「チルノ！無事だったか！」

「うん！あたいは無事だよ！なんてったって最強だからね！」  
大妖精が心配そうに近づいてきた。

「ソラさん。無事でしたか？」

「ああ。お前達も無事でよかった。」

「あ、それで・・・、ルーミアちゃんは？」

大妖精はソラに聞いた。

「大丈夫だ。ルーミア！」

名前を呼ぶと奥からルーミアをつれた慧音が出てきた。

「良かったな。お前の友達が無事で。」

「うん！」

ルーミアは嬉しそうに大妖精達の輪に入っていた。

「良かったな、チルノ達が無事で。」

慧音は一安心した。

「ああ・・・。」

だがソラは、まだ重苦しい空気の中を漂っていた。

妙な責任感を感じていたからだ。もしかして、青鬼が幻想郷にやってきたのは、自分のせいなのではないかと考えてしまった。あの青鬼は、俺のせいで・・・。

「ソラ。」

慧音が肩に触れた。

「・・・もしかして、あの化け物が入ってきたことが、自分のせいだとおもっていないか？」

「・・・。」

「その反応は凶星だな。」

慧音は少しだけ笑った。

「お前が気にやむことは微塵もない。お前はお前だ。あの化物はお前とは関係ないさ。」

「でも・・・。」

慧音はソラの頭をなでた。

「お前は人を悲しませる事をしないじゃないか。天子や幽香を羽交い絞めにしたのはあれだが、少なくとも天子には幸せを与えていただろう。」

ソラは少しだけ照れた。

「お前は優しいな。表面には出していなくても、どこか人より優しい何かが感じとれる。きつと、元の世界の友人達もそう思っているぞ。」

「・・・そうかねえ。」

ソラは頬をかいた。

「素直ではないな。」

慧音は笑った。その笑顔を見たソラは息を呑み、そして思った。

ああ、この人はとても綺麗だと。

「ソラ。」

永琳に呼ばれた。

「ん、な・・・なんだ!？」

永琳は真剣な顔でソラに近づいてきた。

「・・・ちよつと付いてきてくれるかしら。」

永琳は踵を返し、部屋を出た。

「あ・・・ちょ・・・!」

ソラはあわてて付いていった。

「・・・。」

慧音は黙ってソラを見た。

「あ、慧音。どうしたんだ？」

妹紅は慧音に近づいた。

「・・・妹紅。お前はソラをどう思う？」

突然慧音にそんなことを言われた妹紅は吃驚した。

「え、ど・・・どうっていわれても・・・。」

妹紅は数時間前のソラの言葉を思い出して顔を真っ赤にしていた。

「い、いい奴だとは・・・思うけど・・・。」

慧音はかすかに笑った。

「・・・私も、そう思う。」

「永琳。一体どこに？」

「別の部屋よ。」

永琳はそれつきり黙ってしまった。

「……。」

ソラも釣られるように黙ってしまった。しかしここは相変わらず長い廊下だ。

「ん……。」

奥の扉から優曇華が出てきた。

「あ、師匠。」

「容態は？」

「深刻です。傷はかすり傷程度ですが、問題は……。」

「分かったわ。あなたは魔理沙のところについてあげて。」

「はい。」

優曇華は奥へと消えていった。

「この中よ。」

永琳は扉を開け、中にはいった。

「……失礼します。」

ソラは中にはいった。中は広がったが、ベッドと小さな机。そして医療器具しかなかった。

「……？」

ソラが一步前に出ると、隅の方から何かが振動する音が響いた。

「！？」

ソラが吃驚して音のした方向を見た。

「！……にとり！」

そこにいたのはにとりだった。しかし服装が違う。患者用の服に着替えさせられていた。

「ア……ああああ……。」

にとりは虚ろな目になって悲痛な声を上げている。

「え、永琳……。一体、にとりに何があつたんだよ……。」

悲痛な叫び声が体内にしみ込んできた。

「・・・にとり。」

ソラはにとりの肩を掴んだ。それと同時ににとりはさらに叫んだ。

「いや、いやああああああああああああああああ！！！！

！！！！」

「落ち着けにとり！俺だ！ソラだ・・・ツツツ！！！！」

「やだ・・・！やだああああああああ！！！！」

「頼む、気付いてくれ！にとり・・・！！！！」

にとりの頬に触れ、目線を合わせた。

「はア・・・っ！はア・・・っ！」

にとりは涙目でソラを見た。

「はア・・・。ソ・・・。ソ・・・。ソ、ラ・・・？」

にとりは消え入りそうな声で喋った。

「そうだ！俺だ！ソラだ・・・！」

「本当に、ソラ・・・なの？」

ソラは必死で頷いた。

「えぐ・・・っ！ソ、ラア・・・！ソラアっ！」

にとりはソラに抱きついた。

「良く無事だったな。」

にとりの頭をなで、落ち着かせた。

「驚いたわ。この数秒でにとりが我を取り戻すなんて・・・。」

「俺も驚いた・・・。」

そしてソラは思っていたことを口にした。

「にとり。一体お前に何があった・・・？」

ソラにそういわれたにとりは何かを思い出したのか、俯いて身体を振るわせた。

「あ・・・え・・・うあ・・・。」

思うように喋れないらしい。よほどの恐怖だったのだろう。

「・・・永琳。なにか落ち着けるものとかないか？ホットミルクとか。」

「優曇華に頼んでもってこさせるわ。」

永琳が部屋を出ようとした。すると、

「・・・ロケ・・・ット。」

ソラと永琳はにとりを見た。

「・・・私の、近くで、ロケット、爆発した。そしたら、あたりが曇った。それで、あたし・・・おそ、われた・・・。」

ロケット？爆発した瞬間曇った？どういうことだ？

「あれは、違う・・・。本当の、化け、物・・・。」

「・・・わかった。もう、眠れ。」

ソラは優しくにとりを抱き寄せた。

「・・・。」

にとりはその瞬間、まるで気絶するかのように眠りに落ちた。

「・・・。」

永琳とソラは黙った。ソラはにとりをベッドに寝かしつけ、部屋を飛び出た。

「ソラ!？」

永琳も追いかけようとした。だがソラはすぐ外で立ち止まっていた。

「・・・ソラ？」

するとソラはかすれた声で喋り始めた。

「この異変、解決しないとどんどんにとりのような犠牲者が増えるのか？」

永琳は少しだけ返答に困ってしまった。

「・・・恐らく。でも、それは自分達次第よ。今幻想郷はかなり危険だわ。紫も気絶して、外には化物がうろついている。」

「・・・そうか。」

するとソラは永琳を見た。

「・・・にとりのみたあたりを曇らすロケット。俺は、それに聞き覚えがある。」

「!・・・知ってるの!？」

「ああ。でも、もしそれが本当に俺の考えているものと該当するな

ら、もつと状況は深刻になる。」

「どういうこと・・・？」

ソラは、永林に一言言い放った。

「・・・幻想郷に、魔王という奴が、忍び込んでいる。」

永琳とソラは廊下を歩いていった。

「ソラ。その魔王と言う奴は強いのか？」

ソラは単刀直入に言った。

「弱い！」

「え、弱いのか？」

意外なソラの一言に永琳は違う意味で驚愕した。

「だってビーム一本でやられちゃうんだもん。弱い以前の問題だもの。」

「・・・それって、異変としてどうなのよ？」

「・・・問題だね。違う意味で。」

「とにかく、問題はその青鬼というやつね。被害が甚大だわ。これ以上人が増えたらこっちも追いつけなくなる。早く解決策を練らないと。」

「ああ・・・。」

すると向こうからてゐが走ってきた。

「師匠おおおおおお！！大変だあああああ！！！」

「どうしたのてゐ！？」

てゐは息を切らして顔を真っ青にしている。

「げ、玄関から・・・！玄関から変な音が・・・！！！」

「変な音？」

いつもなら放っておくところだが、現状が現状だけに放っておけない。



「うおわ!!」

「きよ、巨乳カルテット!」

「咲夜に殺されそうね……。てか良く無事だったわね美鈴。」  
レミリアが言い放った。

「おい、ソラの顔面から血が!」

「やばい。笑ってるぜ!」

「鈴仙さん!今すぐ応急処置を……!」

レミリアやら妖夢やらが慌て始めた。

「……それで、どうしたのよあなた達。」

パチュリーが平坦とたずねた。すると小町と美鈴は慌てたまま、

「な、なんか……変なものが追いかけてきたから、ここまで逃げ  
てきたんだよ!」

小町と美鈴は同時に言った。

「また青鬼か。」

「どうする?」

「わからん。」

ソラは雛に聞いた。

「雛。お前達がここに来る途中誰かいなかったか?今皆ここに避難  
しているから、もし残ってたならそいつにも……。」

雛は顎に指を当てた。

「残ってた人ですか?人じゃないですけど、屋台に夜雀が残って  
いましたね。」

何人かが反応した。

「ミステイアが!?」

「まずいな。鳥目なあいつが周りを注意するとは思えない。」  
「どうする?」

ソラはため息を吐いた。

「迎えに行くぞ。」

ソラが出て行こうとしたら何人かに止められた。

「ちょっと待ちなさい!一人で出て行く気?!」

ソラはくるりとこちらを向いた。

「他のやつはなるべく巻き込みたくないんだが、まあ誰かついてきてくれると心強いね。」

直後に賛同するものは中々現れない。それもそうだろう。今幻想郷は危険に満ちていて、しかも怪我をしているものもいれば、それをサポートしているものもいて、実際のところそれで精一杯なのだ。こんな状況でこの俺についてくる親切な奴はよほどいい奴か、よほどの正義感の持ち主か、はたまた馬鹿ぐらいしか……。

「よっしゃ、私がついていくわ！」

真つ先に手をあげたのは天子だった。この場合、馬鹿の位置に属するんだろうな。

「……ま、不死身だし、盾にはなるか。でも天子だけじゃなア。」  
「なっ……!!!!」

天子は思いもよらないソラの言葉に身をすくめた。

「確かになー。」

魔理沙が賛同した。

「心もとないわね。」

霊夢も冷たく言い放った。

「あんた達最悪！」

天子な涙目になって訴えた。

「ま、そんなわけだから、私もついてくわ。」

霊夢が立ち上がった。

「おうけい。心強いぜ。」

ソラと霊夢が握手を交わした。

「なら私も……」

慧音もついていこうとしたが、

「慧音はチルノ達についてたほうがいい。私がいくよ。」

と、妹紅が言うと少しだけ躊躇った。

「で、でも……」

「いいから。あたしだって不死だ。それなりの力にはなれる。」

「・・・そうか。」

慧音は妹紅に真剣な顔でいった。

「絶対に帰って来てくれ。わかったな？」

妹紅はかすかに笑って、

「うん。」

と答えた。その光景を見送ったソラは安心して笑みを零した。

「さて、行動開始といきたいが、4人で大丈夫かねえ。」

「確かに、5・6人が無難なあたりね。」

「じゃあ一体誰を誘うっていうんだ？」

4人は考えた。この中で手が開いてる者といえば・・・。

「・・・。」

4人は一斉に文と椛を見た。

「・・・え？」

椛は驚愕したかのような顔をしている。

「丁度良いんじゃない？」

霊夢は言った。

「ああ。それに椛を連れて行けば、オマケで文もついてくるだろ。」

「確かにね。」

これには天子も賛同した。

「あやや。私は構いませんが？」

「ええ!？」

椛は文の方を見た。

「いいんですか!？文さん!」

「大丈夫です。だてに幻想郷最速と呼ばれていないわけではありません!」

「で、でも相手は得体の知れない者なんですよ？勝てるかどうか・・・。」

文は真面目な顔で言った。

「勝てるかどうかじゃない!勝たなきゃいけないんです!」

「なんだよその熱血教師のような言い方は・・・。」



雛は黙って玄関を見つめていた。

「・・・どうしたんですか？」

優曇華は雛に問いかけた。

「・・・あの人、惚れ惚れしますねー」

優曇華は顔を赤らめた。

「え！？ソラさんにですか！？」

優曇華は素で驚いてしまった。

「ええー。とても魅力的だわア」

雛はくるくる回っている。

「えっと、具体的に言うと、どんな感じが？」

雛は笑顔になつてある言葉を口にした。

「身体がぞくぞくするほどの厄を感じるわア」

「・・・厄？」

「ええー。死んでもおかしくなくらいの厄があの人を覆っていたわ。なんだかこっちの気分が心地よくなるくらいに。一目惚れだわー」

優曇華は心配になつてソラ達が出て行つた玄関を見つめた。

「・・・なんだか、今日は静かな夜ですね。」

ミステリアは猪口を布巾で拭きながら呟いていた。

「そうですねえ。」

火焰猫 燐は焼酎を飲みながらあたりをキョロキョロしていた。

「さつきからなにを探しているんですか？」

「ん、いやあね。うちの連れがこっちに来る途中別れちゃつて。それで探しがたら休憩にね。」

「地底からいらしたんですね？こっちには何しに？」

「なんだか地上が騒がしいっていうから偵察しに来たのさ。」

「騒がしいですかねエ？」

「ミステリアは耳を澄ました。」

「・・・むしろ、静かすぎる気もするような、」

「まあ、このお酒が飲み終わったら私も探しにいくとするかな。」

「燐は猪口に入った焼酎を一気に飲み干した。」

「さて、身も心も回復したし、そろそろ―――」

「いたぞ！！！！」

「茂みからソラ達が出てきた。」

「！？」

「ミステリアと燐は吃驚して肩を振るわせた。」

「ミステリア・ローレライの無事を確認。どうぞー！」

「付属物の地底の猫の無事を確認。どうぞー！」

「とりあえず撮っておきます。どうぞ！」

「え・・・。と、とりあえず、助けに行きます。どうぞ。」

「とりあえず快感で満たされたいです。どうぞ。」

「とりあえず、お前ら普通に会話しろ！」

「ソラ・霊夢・文・桜・天子・妹紅の順に大きな声が聞こえた。」

「なに！？なんなの！？」

「燐はものすごい慌てふためいている。」

「ソラさんじゃないですか。どうしたんですか？」

「ミステリア！なんか変な大きい奴がここらへんに来なかったか？」

「大きい、奴？」

「ああ。ブルーベリー色をした全裸の巨人だ。」

「そんな人みませんでしたよ。見たら吃驚すると思うし。」

「ソラと霊夢は目線をあわせ頷いた。」

「とにかく、今は危険なの。店をたたんで、今すぐ永遠亭に来なさい。」

「へー？」

「あなたもよ、燐。」

「私も？私はお空を探さなきゃなんだけど・・・。」  
すると文は言った。

「空さんなら永遠亭に来ましたよ。」

「おお、それは好都合！ならすぐ向かわなきゃね。」  
とりあえず2人の無事を確認した。

「よし皆！一旦もと――」

すると全員が暗闇の続く道を黙視していた。

「?・・・どうした？」

「ソラ。向こうに誰か入る・・・。」

ソラは咄嗟に全員の黙視している方向を見た。

「・・・。」

その人影はひたひたと近づいてきている。

そして、屋台から漏れる提灯の光で、その者の姿がはっきりと見て取れた。

「・・・フラン？」

姿を現したのはフランだった。

「フラン！今までどこに・・・!？」

フランは無表情でこちらをみたまま動こうともしない。

「良く無事だったわね。まあ、レミリアの妹ならあの馬鹿でかい鬼にも勝てるか。」

霊夢はフランに近づこうとした。

「・・・きひ。」

フランは笑った。

「?。」

全員はフランの可笑しな笑い声に疑いを持った。フランはケタケタ笑ってにこった目でソラ達を見つめた。

「・・・ミーツケタ。」

フランから言葉が発せられた。だが、フランの声なのに、それはフランから出てきた言葉に思えなかった。

「・・・フラン？」

すると風が吹いた。生暖かい、嫌気が刺すような異臭のする風。

「っ・・・!!!!」

ソラは怯えた顔で後ろを向いた。

「ああ・・・。」

ソラは不意に後ろにいた皆に声を張り上げた。

「お前ら、よけろおおお!!!!!!」

ソラにそういわれた霊夢達は後ろを向いた。

後ろには、怪しい光を放つ大きな丸いにごった目をもった煙状の黒い物体が蠢いていた。

「な、なによこれ!!!!」

天子は叫んだ。

「し、知るかよ!!!!」

妹紅も叫び、その場から離れた。他のものも同じことをし、茂みに隠れた。

「フラン！」

ソラはフランを背中に追いやり、身を守ろうとした。

「フラン！今すぐ永遠亭にいけ！あそこにレミリアが――

――

腕に違和感を感じた。物凄く温かい。

「・・・？」

腕を見た。

腕にフランの手が見えた。

「え・・・。」

フランは物凄い力でソラの腕を掴んでいる。

『感染<sup>ウツ</sup>サレロ・・・。感染<sup>ウツ</sup>サレロ・・・！』

フランはソラを思いきり殴り飛ばした。

「あがつ．．．！！！！！！」

ソラは吹っ飛ばされて大木に激突した。

「ソラ！！！！！！」

「げふっ．．．！！」

衝撃で頬についた傷口がひらいた。ソラは意味がわからなくなってきた。

（痛エ．．．っ！痛エ痛エ痛エ．．．！！！！！！目の前が回ってやがる．．．！何故だ？何故フランは俺を攻撃した？！まだ勝負を仕掛けたいのか！？でもそんなのありえない．．．！目の前に俺の知らない変な生き物が蠢いているんだぞ．．．！？なんだよこれ．．．。なんだよこれ．．．！！！！）

ソラはぐるぐる回る視界で目の前で蠢いている煙状の生き物を見ようとした。

その生き物はソラの目の前に来ていた。

「なっ．．．！！！！！！」

その煙状の生き物はソラの周りを覆った。

「ソ、ソラ！！！！」

天子はソラを助けにしようとした。

「来るな．．．っ！！！！」

天子は立ち止まった。倒れているソラにフランがゆっくりと近づいていたのだ。

「っ．．．！！！！」

ソラはフランを掠れる目で見た。

『．．．アナタモ、イッショニナルヨ。』

ソラは必死で身を守ろうとした。だがフランはまるで水のように体の隙間に手をいれてくる。

（まずい．．．。まずいまずいまずい．．．！！！！）

とりあえずその場から逃げようと試みた。

だが、あることに気がついた。

(・・・一緒だ。)

ソラは謎の生き物の目とフランの目を交互に見た。

(この化物と、フランの目が、一緒だ・・・。)

このとき、ソラは理解した。

(そうか・・・。フランは、正気じゃなくなっている・・・。この化物に、取り付かれているんだ・・・。)

意識が遠のいてくる。

(・・・駄目だ。俺、死ぬ?)

そしてソラは最後にある光景を見た。

目の前に天子がいた。

「離れなさいよ！ソラから、離れなさいよ！！！」

天子は要石や屋台にあった道具を投げ捨てた。

『ひひ・・・！アハハハはハハハハはきつはハハハハハはあああ  
あははああああ！！！！！！』

フランとその化物は高笑いし始めた。

「この、この・・・！！！！このおお！！！！！」

天子は怒りくるってそこらに転がっている物を投げ捨てた。

(逃げる・・・。天子・・・、逃げてくれ・・・。)

ソラは急激に眠たくなってきた。

だが、何かが起きた。フランが小さい叫び声を上げて逃げていったのだ。

(・・・?)

突然頬に何か冷たいものが飛び散った。

(なんだ・・・。この、冷たい・・・えき、たい・・・。)

全員が駆け寄ってきた。でもソラはどんどん意識がもろくなっている、

そして、ソラの意識が消失した。

「・・・なさい。・・・ラ。おき・・・い。」

何か声が聞こえた。誰の声だ？

「おきなさ・・・。ソラ・・・。」

俺の名前を呼んでいる。一体誰が・・・。

「おきなさい！ソラ！！！」

「っ・・・！！！」

ソラは勢い良く身体を起こした。ソラの周りには様々な者達が心配そうに伺っていた。

「起きた・・・。ソラ、大丈夫？」

霊夢はいつにもなく心配そうな顔でソラを見つめていた。

「・・・。」

「呆けてるぜ。本当に大丈夫か？」

魔理沙は腕を押さえながらソラの安否を確認した。

「・・・あ、ああ。大丈夫だ。」

ソラは記憶が曖昧になっていた。

「・・・優曇華。水をもってきてちょうだい。」

遠くから伺っていた永琳は優曇華に水をもってこさせた。

「ソラ。水よ。コレ飲んで今までのことをすっかり思い出して頂戴。」

「

ソラはゆっくりとコップを手にとり、ちびちびと水を飲み、最後には一気に飲み干した。

「ぷはっ・・・。」

ソラは虚空を見つめた。

「・・・。」

どんどん意識がはつきりしてきた。そして思い出した。

「・・・レミリア。レミリアは何処だ？」

すると周りの皆はレミリアを見た。

「・・・？」

レミリアはソラを見た。

「・・・フランを見つけた。」

レミリアは驚いた顔をしてソラに近づいてきた。

「フランを・・・？！何処で見たの？一体何処で！？」

「・・・ミスティアの屋台の近くだ。でも・・・。」

ソラは目をそらした。

「でも、なに！？」

レミリアは必死にソラに聞こうとした。

「・・・フランは、異様な生き物に、取り付かれてた。」

「・・・え？」

ソラはレミリアを見た。

「推測だが・・・。フランは、多分あの煙状の化物に感染してる。」

だからフランは可笑しな行動をとったんだ。」

「でも、そんなの立証が・・・。」

「あるわ。」

永琳が突然そんなことをいった。

「え・・・？」

「そのソラ達が見たという変な生物。ソラの身体にその欠片がくっついていたわ。」

皆は薬の貯蔵庫に来ていた。その貯蔵庫の中に設置させられていた大きな机の上には透明な箱が置かれていた。

「・・・。」

その中には先ほど見た煙状の黒い物体の欠片が怪しく蠢いていた。

「これが・・・。」

まだこの生き物を見ていなかったものたちはまじまじと見つめ始めた。

「これがフランをおかしくさせたの・・・？」

「うえエ、気持ち悪い……。」

「こんなところに置いて大丈夫なの？」

周りからはこの存在が安全なのか心配になってきている者が続出した。気持ちは分かる。おれも襲われたんだ。あれほどの恐怖は味わいたくはない。

「……。ん？」

永琳が曇った表情をしている。

「……。どうした？永琳？」

永琳は目の前の箱を見つめた。

「……。この生物がなにでできているのか気になって、欠片を少しもらって成分を調べてみたわ。」

すると永琳は一枚の紙を見せ付けた。

「？」

そこには見たことのない様々な名前が書かれていた。

「こんな成分がたくさん出てきたわ。」

「うわア、多い……。」

美鈴は苦い顔をした。

「……。信じられないの。」

「？」

「なにがよ。」

霊夢がそういった。

次の瞬間、永琳歯衝撃的な一言を言い放った。

「……。この生物の成分が、私がこの前造った薬と、成分がほとんど一致していたのよ。」

その場にいた全員が驚愕した。

「ちょ……。ちよつと、それどういうことよ！」

霊夢が怒りを露にした。

「お前そんな危険な化物つくっちゃったのか！？」

魔理沙も戸惑いを隠せないでいる。

「ち、違っわよ！確かに見た目は怪しい薬は作っただけ、私の調査

リストだと力の増強効果がある薬なのよ！？こんなことになるのはありえないわ！」

それでも周りの皆は抗議をやめなかった。永琳は困った顔で否定している。

「……。」

「?……どうした、慧音？」

慧音は妹紅とソラを見た。

「……さっき、永琳がいつていただろ？ほとんどのリストが私の持っていた薬、だと。」

「ああ。」

ソラは頷いた。

「……ならそのほとんど以外の薬はなんだとおもう？」

ソラと妹紅は勘づいた。

「……なにか、別の薬が混ざった、ってことか？」

「ああ、多分。永琳がいくら寝ぼけて作ったとはいえ、こんな危険な薬を作ってしまうほど抜けているとは到底思えない。」

ソラはあることを思い出した。

「……たしか、てゐが俺にその薬をかけようとしたな。その時地面にぶちまけてた。もしかしてその時になにか菌やウイルスが？」

「わからない。でもその後になにか起こったんだ。」

ソラは人ごみを掻き分けて永琳に近寄った。

「永琳！そのほかの薬は何が混ざっていたんだ！なんでもいい、なにかないか？」

永琳はソラの意外なひとところに戸惑いを表しつつも、

「……それが、わからないのよ。変なものが混ざっていたの。なにか強い効果のあるものと、あとは、粉々に砕けたゴミが入っていたわ。」

ソラは口に手を当てて考えてみた。

（何か強い効果が入ったもの。恐らくそれがこの箱の中の化け物を生んだ原因。その他のゴミは多分地面についてた何か。だとしたら、

そのつよい効果のあるモノって・・・。」

ソラはわけが分からなくなり、頭を掻き毟った。

「あああああ！一体なんだっていうんだよ！駄目だだめだ！馬鹿にはわからねえ！！！」

「だったら、」

玄関の方から声が聞こえた。

「っ・・・？」

皆は一斉に玄関の方を見た。

「メデイスンに聞いてみればいいんじゃないかしら？」

そこにいたのは幽香だった。

「幽香さん！」

ソラは声をあげた。幽香は笑顔でこっちに近づいてきた。なぜか頬には血の跡らしきものがついていた。

「あの子、毒には詳しいし、それに毒は薬と同等の力を持つんでしょ？だったらその子に聞けばいいじゃない。」

「な、なるほど。」

全員が頷いた。

「幽香。その血どうしたの？」

霊夢が聞いてみた。

「ああ、これ？」

幽香は汚らしいものを見るように血を目視し、そして拭いた。

「さっき野蛮な奴らに襲われそうになったから振り返り討ちただけよ？あの人たち見た目とは裏腹に弱いよね。」

「野蛮な奴ら？」

妖夢は首をかしげた。

「ええ。なんか全身紫色の腕が先にかけて細くなっている宇宙人みたいな奴らだったわね。」

ソラはぴくりと反応した。

「はあ？なんだそりゃ。」

魔理沙はしかめっ面をした。

「さア？」

幽香は困った顔をしている。

「あら？」

幽香は玄関の方を見た。

「・・・しつこい馬鹿共ねエ。そんなに死にたいのかしら？」

幽香はまた外にでた。

「ア、幽香さん！」

ソラも慌てて幽香に付いていった。

「気をつけなさいソラ。相手がいくら弱くても、しつこければそれなりの支障があるわ。」

「はい。」

でもソラはなんとなく嫌な予感がした。危険だから、というわけではない。

もしかして、その敵って・・・、とそう考えた瞬間だった。

『ハッハッハッハッハッハッハ！』

と言う笑い声が聞こえてきた。

「あー、まさか・・・。」

ソラは嫌そうな顔をした。

そしてその笑い声を上げた者たちが茂みから出てきた。

「見つけたぞ！先ほどの恨み、返しに来た！」

目の前にいたのはチャージマン研でも御馴染みの『ジュラル星人』だった。

「さあ、かく」

ソラは刀を実体化させてジュラル星人達を切った。

「え！？」

ジュラル星人達は叫び声をあげる間もなく消えていった。

「・・・。」

幽香は黙ってソラを見ていた。

「・・・。」

ソラは真顔で刀を消した。そして思いきり息を吸い込み、



「にゃああー!!」

可愛いキヤラをした猫達がジュラル星人目掛けて噛み付いた。

「びゃああああああああー!!」

「うああああああああー!!」

「あうああああああああー!!」

そういつてジュラルたちは消えていった。

「弱いし・・・。」

ソラは悲しい顔をした。

「研は毎日こんな弱い奴らを相手にしていたのか・・・。」

すると猫達が尻尾を振って戻ってきた。

「よしよし。良く戻ってきたなア。成功してよかった♪」

ソラは描いた猫達をなでた。

「・・・描猫。」

似てるなア。漢字。

「ソラ。大丈夫?」

幽香が駆け寄ってきた。

「ああ、大丈夫です。幽香さんは?」

「私も平気よ。それにしても可愛い生き物ね。」

「でしょう。」

そしてソラは猫達を抱きかかえ、そして消した。

「さて、また問題が増えたな。とりあえず皆で会議だ。」

「てなわけで。」

ソラはホワイトボード（絵符でだしたやつ）の前にたった。

「いいか諸君。今幻想郷には3組の敵がいる。まず一つ目は青鬼。

これはどこまでも獲物を追って食してしまうという本当に怖い化物でございます。」

全員はうんうんと頷いた。

「そして2つ目。こいつは特殊で、煙状の身体を持ち、所構わず人を襲っては体内に入ろうとする可能性のある生き物。俺は実際に攻撃されたけど、別に危害はなかった。だから今のところどんな問題があるかはわからん。」

全員はまあ頷いた。

「そして3つ目。ジュラル星人だ。こいつらは問題ない。弱いから。」

全員は驚愕した。

「弱いの?!」

「ああ。何でビーム喰らって平気なんだよ。もっとう、血が流れたりしろよ。敵だけどさ。」

文が手をあげた。

「ほい、文。」

「だったらまずその、なんでしたっけ?? チュロス星人?」

「違うよ、チロル星人だよ。」

と、チルノ。

「あんたらちゃんと聞いてた? チュロスでもチロルでもないわよ。」

デュラン星人でしょ?」

と霊夢がいった。ソラは目を細くした。

「お前ら全員違うよ。ジュラル星人だよ。しかも霊夢のデュランって怖いよ。全員やられちまうよ……。」

幽々子が手をあげた。

「ジュラル星人っておいしいの?」

「まず食うことから考えを外してください。」

次に輝夜が手をあげた。

「ほい。」

「そいつらいくらで売れる?」

「まず売れねえな。てか何? 何かほしいの?」

「ちよっと暇を潰せるゲームがほしいのよね。」

「マ。オストーリーでもやってる。」

お空が手をあげた。

「そんなことよりおうどん食べたい！」

「ちったアまともな意見だせやてめえらああああ！俺も喰いたいけどね！！！」

ソラはホワイトボードを壁にたたきつけた。

「確かになんかうやむやな状況になってるけど！！！！異変は異変なの！俺もジュラル星人や魔王様と戦うのすげーいやなの！強いとか弱いのか問題じゃなくて絶対コメディになるから！！！」

「でも、今幻想郷を曇らせてるロケットを作ったのはそのジュラル星人なんだろう？」

魔理沙は言った。

「ん、ああ。それは確かに厄介だ。」

ソラは皆に説明をした。

「空が曇ったってことは、日光が当たらない。つまり、今現在謎の生き物に取り込まれているフランが自由に動けるということ。こちらに物凄い危害が加わる。」

レミリアは少しだけ喰らい顔をした。

「・・・ごめんなさい。私がもう少ししっかりしていれば、」

するとレミリアは真剣な顔で言った。

「お願いがあるの。もしフランを見つけても攻撃しないで逃げてくれるかしら？その代わり、私が責任を持ってあの子を保護するから。」

「

すると美鈴が立ち上がった。

「大丈夫ですお嬢様！私も命を懸けてお嬢様を守って、妹様を助け出します！！！」

「あまり自信はないけれど、足止めくらいはできるわ。」

パチュリーは落ち着いた素振りを見せた。

「お嬢様。私たちが全力でサポートしますわ。」

咲夜は微笑んだ。

「皆……。」

すると幽香がポツリと呟いた。

「はたして、何人がぶち壊されるのやら……。」

紅魔館組は全員頂垂れた。それを見たソラはまたぼつりと、

「果たして、気付かぬうちにゆうかりんランドの花がどれだけ荒らされるのやら。」

幽香はその場で泣き出した。

「とにかく、被害が出るうちになんとかしないとですね。」

妖夢は刀の位置を直した。

「私はすこし白玉楼の様子を見てきます。」

「大丈夫か？」

ソラは心配そうにたずねた。

「ええ。護身は心得ていますし、これ以上被害は出たくありません。しばらくの間、幽々子様のこと、よろしく願います。」

ソラはこくりと頷いた。

「あと、今現在幽々子様には食べられそうになっているミスティアさんのこともついでに……。」

ソラは向こうで食われそうになっているミスティアを眺めた。

「ああ。」

妖夢は出て行った。

「大丈夫かなア？」

大妖精が小声で呟いた。

「ああ、大丈夫でしょ。」

すると外から何かを切る音と、ジュラル星人らしきものの叫び声が聞こえてきた。

「ほらね。」

「確かに……。」

ソラはにとりの寝ている病室に来ていた。にとりの容態は落ち着いていて、安堵の表情を浮かべてベッドに横になっている。

「……。」

無事を確認したソラは部屋から出た。

「もう夜中の1時30分か……。。」

気がつけばもう深夜。疲れもたまってきている。広間に戻ると、何人かは眠りについていた。

「……。」

所々おきている人も見かけられる。多分最後まで手伝おうとしているか、異変のことで頭がいっぱいになっているのだろう。

自分もまぶたは重いが、なぜか眠ろうという気持ちにはならない。確かにそうだ。こんな状況で寝れるわけがねえ。

「はぁ……。。」

ソラは帽子をはずして頭をかいた。

「……ん？」

今更気づいたことがあった。

「……天子のやつ、どこいった？」

すると向こうで慧音が指を差している。

「……？」

指をさしていたのは別の病室の方。

「ん……。？」

ソラはゆっくりと近づき、ドアをあけた。

そのベッドで天子が寝ていた。

「あれ、いつの間に眠ってたの？」

慧音は小さいため息をついた。

「お前が気絶をして1時間くらいたったあとだ。」

「……？」

「……疲れがたまってると思って知らせなかったんだ。聞きたいか？」

ソラはうなずいた。

「ソラがフランにやられて気絶した時、真っ先に駆け寄ったのは天子だ。ソラをここまで運んだのもな。」

ソラは驚いて目を見開いた。

「驚いたよ。我儘な総領娘と定評のある天人が、ここまで執着するのも。ずっと看病していたんだがな、途中で疲れて眠ってしまったらしい。」

ソラは天子を見た。

「端から見れば、彼氏を看護する彼女のようにも見えたがな。」  
すると慧音は気がついたように説明を付け足した。

「あ、ちなみに天子が眠ったあとは妹紅が看護をしていたぞ。半ば嬉しそうにな。」

「う、うむ……。」

ソラは少しだけ帽子を目深にかぶって天子に近づいた。

「全く、放っておけばいいのにさア。」

天子の頬にかすかに触れたソラはちよつとだけ笑った。

「……ま、こういうときは礼をしなきゃだよな。」

ソラは数回天子の頭をなでた。

「サンキューな。」

すると天子は寝返りを打って向こう側を向いた。

「……?」

天子の身体が小刻みに震えていた。

「あれ?」

ソラは首をかすかにかしげた。

「なあ慧音。なんか天子が痙攣してるけど……。?」

「そうか。ま、ここは私が見るとしよう。そろそろソラも休め。」

「ん、ああ。じゃあちよつとだけ。」

ソラは変に思いながらも出て行った。

「……。」

慧音は少しだけ声を上げて笑い、天子に向かって言った。

「催促してしまうようで悪いが、早く気持ちを伝えないと、幽香や妹紅にとられてしまうんじゃないか？」

すると寝ていたはずの天子から声が発せられた。

「・・・うつさいわね。」

そして天子は思いきり布団をかぶった。

「ああ、悪かったな。」

慧音は部屋から出て行った。

「そんなの簡単に出来たら苦労しないわよ。」

少し震えた声で天子は独り言を小さく呟いた。

「永琳。そろそろねなよ。」

輝夜は永琳の真横に座っている。

「ええ。でも寝るわけにはいかないの。理由はどうあれ、この原因を作ってしまったのは私でも有るんだし。」

「薬の事？」

「ええ。」

「ま、たしかにそうかもね。」

永琳はかなしそうな顔をした。

「そこは嘘でもそんなことないよといってくれるところなんじゃない。」

「真実じゃない。」

「そうですけど・・・。」

永琳は外を見た。

「今幻想郷には、この箱の中より大きいものがうろついているのよね？」

「そうなんじゃない？」

永琳は口に手を当てた。

「なら、早くワクチンを作らないと・・・。どんどん犠牲者が増え

るわ……。吸血鬼の妹を早く助けないと……。」

そういった永琳はまた机に顔を戻した。それを見届けた輝夜は息を吐いてその場を後にした。

「永琳も頑張るわねエ……。」

自分の部屋に戻ろうとした。

すると輝夜は何かに躓いてしまった。

「ういだっ?!」

輝夜は派手に転んでしまった。

「いったア……。」

輝夜は涙目で足元を見た。

そこには妹紅が寝ていた。

「あんた……。」

「ん……。?」

妹紅は目を覚ました。

「こんなところで寝ないでよ! 転んじやったじゃない!」

「仕方ないだろ……。広間は皆が使っちゃってるし。」

「だからって廊下で寝ないでよ!」

妹紅は向こうを指差した。

「あそこでベッドを実体化させて寝ているソラにはなにもなしか?」

輝夜はソラを見た。

ソラはベッドで寝ていた、というより、寝ようとしていたのだが、なぜか妖精達に奪われていた。そのためソラはその横で布団を敷いて寝ていた。

「普通は怒るところなんだろうけど哀れね……。」

「チルノの奴、布団に入って溶けないだろうな?」

「その前にチルノの近くで寝ているソラが風邪引いたりしないの?」

輝夜と妹紅はとりあえずソラを起こした。

「ん……。あれ? さっきまで南極大陸のど真ん中で寝ている夢を見ていた気がする。」

『死ぬぞ!?!』

輝夜と妹紅は同時に叫んだ。

「ああー、チルノ達にベッド捕られたんだっけ……。ま、いいや。」

ソラが消しゴムを用意してベッドを擦ると突然ベッドが消えた。

「うわあ!？」

チルノ達は声をあげて床に転げ落ちた。

「起こしてすまないな。やはりベッドは邪魔になる。」

「いったア……。なにをするのさ!」

チルノはソラをぽかぽか叩いた。

「ベッドじゃ大きすぎる。ハンモックはどうだ?」

チルノ達はハンモックと言う単語に疑問を抱いた。

「ハンモック……?」

大妖精がいった。

「そう、ハンモック。」

するとソラは壁に絵を描き始めた。

「……?」

その場にいた皆はソラに視線を集めた。

ソラがハンモックの絵を描き終わると、ボン、と音を立てて実体化した。

「おおー!」

チルノ達はハンモックに飛び乗った。

「ハンモック。それは少年の夢だ!乗ってんの少年じゃねえけど!いいな!妖精達がハンモックの上でくんずほぐれつ!ほほえましい!」

「おまえはなにを言っているんだ……。」

輝夜は眉をひそめてぼやいた。

「しかし、皆よほど疲れがたまっているんだな。ほとんどの奴が眠りについてるよ。」

輝夜と妹紅も周りを見た。

「ああ。今日は色々と大変だったしね。」

「普段動かない私でも慌てたわよ、今回は。」

ソラは窓の外を見た。

「・・・月明り、まだでねえな。」

まだ外は厚い雲で覆われている。ジュラルがいた、と言うことは、やはりこれは魔王のあのロケットの仕業か。

「ん・・・。」

ソラは竹やぶの中をみた。

「あ、あれは・・・。」

ソラは輝夜と妹紅に小声で言った。

「皆を起こせ。明かりを消すんだ。」

「ん、なんで？」

輝夜は首をかしげた。

「すぐ近くに青鬼が来ている！明かりでばれたら終わりだ！」

危機を察知した輝夜と妹紅は回りに呼びかけて明かりを消しに行った。

「まずいぞ・・・。」

ソラはひとまず廊下の明かりを消した。そして外の様子を見た。

「青鬼はまだ気付いていないか。」

青鬼は竹やぶの中を右往左往していた。

「今ばれたら確実にまずい・・・。」

ソラは様子を伺い、タイミングを見計らってその場を離れた。

「皆起きろ！明かりを消すんだ！」

ハンモックで寝ているチルノ達を起こし、次に霊夢達を起こした。

永遠亭の全ての明かりを消し終えると、全員は一箇所に固まった。

「ねえ、にとりはどうするのよ！」

「青鬼がいる状況でにとりを起こしたらそれこそまずいだろ！今は寝かしておく。青鬼が永遠亭内に入ってきたらにとりを運んで出るだけ遠くに逃げるしかない。」

魔理沙がこそそと青鬼を見た。

「でもここから離れてくぜ？大丈夫なんじゃ——」

すると青鬼が突然方向転換し、別の方向へ動き出した。

「う、嘘だろ!？」

青鬼は視界から消えた。

「ソラ! 青鬼が別の方向に進んでいったぜ! あっちは病室だ!」

「なんだと! ねらいはにとりか?！」

「いえ、あっちはにとりのいる部屋とは逆方向です!」

優曇華は進んでいった病室を思い出そうとした。

「あっちは・・・、」

すると優曇華はあたりをきよろきよろした。

「あれ・・・あれ?」

「ど、どうした?」

優曇華は青い顔をしてソラに言った。

「て、天子さんが、いません。」

ソラは気付いた。

「ま、まさか・・・!」

天子はまだ病室のベッドの中で横になっていた。

「あれ・・・、私いつの間に眠ってたんだろう。」

時計を確認すると、まだ30分くらいしか立っていないかった。軽い眠りだったのだろう。

「んー・・・っ!」

身体を伸ばしてそしていつきに脱力をした。

「はア・・・。」

薄暗い部屋の中。天子は唯一光源になっている蠟燭を眺めた。  
「・・・。」

真っ先に思い出したのはソラのこと。

「・・・なんでかな。」

あの時ソラの言ってくれた感謝の言葉。あれが胸にまわりついて離れない。

凄く嬉しかったのだ。感謝の言葉をかけられたのが。

感謝された事は多くはない。なんせ私は不死身だ。それに人に比べてどこか外れているところもある。悪戯ばかり仕掛けて、それで嫌われる事も多々ある。

周りに偏見な目で見られることには慣れている。その目線にも快感を覚えるときもあった。

でも寂しかった。まともに話せる者といえば衣玖くらいで、新鮮味はない。最近は普通に人とも話せるが、どれもこれもありきたりでつまらない毎日で。

それが突然現れたあの人が沢山話してくれて、関わってくれるのがなんだか嬉しかった。攻撃的で精神も肉体も攻撃してくる端から見れば最低な人だけど、私から見れば、ずっと一緒にいてくれた、優しい人だった。

「っ・・・!」

ソラが自分の周りにいないことが、なんだかとっても不安だった。傍にいてくれないと、心が痛くなる。

「・・・痛いことには慣れているのに、この痛みは、慣れない。」

天子は胸を押さえた。

「ソラ・・・。」

呼びかけても答えない。それもそのはずだ。ここには天子以外だれもない。

「ねえ、答えてよ。ソラ。」

こんな事を考えてしまった。

ソラは、いつか必ず、私の前から消えてしまう。

「・・・だ。・・・そんなの、嫌だ。」

天子は少しだけ大きい声を出した。

「ねえ、ソラ!？」

それでも声は聞こえなかった。

「・・・。」

寂しい。それだけがまとわりついた。

「・・・ソラ。」

次は小さくポツリと呟いた。

すると突然ドアが開いた。

「!？」

天子は吃驚して扉を見た。

「はア・・・っ!はア・・・っ!」

そこにいたのはソラだった。

「ソ、ソラ!？」

ソラは周りを伺っている。

「いない・・・。」

「ちょ、ちよつと。どうしたのよいきなり!」

いきなりソラが入ってきたことに、安堵感と、多少の焦りがでてきた。

「レ、レディの部屋にノック無しではいるなんて失礼よ!着替えてたらどうするつもり!わ、私は総領娘なのよ!?ソ、ソラなんか足元にも及ばないんだから!!!」

ソラはズカズカと近づいてきた。

「と、とにかくノックして出直してきてよ馬鹿ア!」

今までの台詞が聞かれていたのでは、と思うと急に恥ずかしくなってきたのでとにかく打ち消すようにソラにあたった。

「は、早く出て――」

するとソラは天子を抱き寄せた。

「ツツツ?!」

「よかった!無事なんだな!」

青鬼がいない事を確認できたソラは息を吐いた。

「こっちに青鬼がきたときは驚いたが、ここまで来ていなかったみたいだな。」

天子は顔を真つ赤にして呆けている。

「ま、無事は確認できた。」

天子から離れ、その場を離れようとした。

「天子。青鬼が近づいているから、いますぐこの部屋を離れ――

――  
天子のほうを見ながら言った。

ソラは息が止まった感覚に陥った。

窓の外に、青鬼が張り付いていた。

「……え。」

天子は窓の外にいた青鬼を見て凍りついた。

青鬼は目を光らせて笑っていた。青鬼が大きな口をあけると、窓を食い破った。

「きゃあああああああああ!!!」

驚愕した天子はベッドから転げ落ちた。

「あぐっ……!!!」

木の格子の破片で足に切り傷を負ってしまった。

「天子!!!!」

天子はその場に蹲っていた。ソラは助けに行こうと足を一歩前に出した。

「……!?!」

おかしいことに気がついた。

青鬼はただ天子を見下ろすだけで攻撃をしようとはしなかった。

おかしいのはそれだけじゃない。

青鬼は大きな大きな破片を手に握っていた。あれは窓の破片。つ

まり、天子が大怪我をしないようにわざと避けた? 何で……

「……。」

すると青鬼はソラのほうをにらんだ。

「っ……！」

突然青鬼はソラ目掛けて突進してきた。ソラは青鬼の大きな体当たりをもろに喰らい、壁に激突した。

「ッッッ……！！！！！」

ソラは崩れるように床に倒れ、悶絶した。

「ソ、ソラ……。」

天子は足を引きずって近づいてきた。だが青鬼は躊躇もせず大きな口を開け、ソラに牙を向けようとした。

すると数本の矢が青鬼に突き刺さった。

「……。」

青鬼はゆっくりと矢が飛んできた方向を見た。

そこには永琳が弓を引いて立ちはだかっていた。

「忠告するわ。ソラから離れなさい。3秒待ってあげる。3秒経ったら貴方の脳天をぶち抜くわ。」

永琳は弓をさらに引いた。

「1……。」

青鬼はじつと永琳を見ている。

「2……。」

永琳は一気に弓を力強く引いた。

「3」

弓矢を飛ばした。

すると青鬼は寸前で避け、そして物凄いスピードでその場を離れていった。

「素早いわね……。」

永琳は弓を下ろしてソラに近づいた。

「ソラ、平気？」

ソラは虚空を見つめたまま口を震わせている。

「一瞬光の壁の向こうに天使が見えた。」

「そう、よかったわね。すぐこっちに戻ってきなさい。」

永琳はソラの身体を揺すった。

「はっ！！俺は一体なにを……。さっきまで目の前に天使がいたのに今目の前にいるのは何億歳となったマッドサイエンティ——」

永琳はソラの脳天に矢を突きつけた。

「なにを言おうとしているのかしら？」

「なんでもないです。目の前に凄い美人がいるなと思ってまして。」

「それでよし。」

「うお、絶壁！」

「なにを！！！」

だが天子はそれ以上怒りはしなかった。

「全く……。それより、どこか怪我とかない？大丈夫？」

「お前こそ、足大丈夫か？血でてるぞ？」

「コレくらい平気よ。」

「ふーん。」

それ以降は沈黙が続いた。

「……。なあ天子。何で俺に抱きついてんの？」

すると天子は力を入れた。

「理由は聞かない方がいいわよ。」

「ああ、そうだな。」

すると永琳が咳払いをした。

「！！！」

天子は忘れていた永琳の存在に気付き、ソラから離れた。

「……。媚薬くらいならつくれるけど？」

「よ、余計なお世話よ！！！！！」

ソラは真顔で、

「永琳。50個ほど作ってくれないか？」

「え……。？」

天子と永琳はソラを黙視した。

## 立ち止まっではられない

目を覚ますと、空と地面の境目が茜色に染まっていた。どうやら朝になったらしい。寝る場所がどこにもなく、どこか寝れる場所を彷徨っていたソラは限界が近づき、仕方なく壁に描いたハンモックで寝ることにした。心地はいいが少し肌寒かった。

朝日はどんどん光を増し、目をさした。

「・・・朝か。」

ハンモックから降りると、古びた廊下の床がぎしつと音を立てた。それと同時に足の裏に冷たさが感じられる。

「・・・。」

目の前にいた天子と妹紅はまだ眠りについていて。起こすわけにもいくまい。ソラはその場を離れた。

居間に出ると、霊夢達が起きて話し合っていた。

「あら、おはようソラ。」

ただ事ではない雰囲気。それも見受けられる。なんせ頭首や神が円をなしていたからだ。

霊夢を真ん中とし、その隣にレミリアと咲夜。そして幽々子。永琳、神奈子と諏訪子と早苗がいる。

「・・・神奈子達はいつ来たんだ？」

「ついさっきよ。」

神奈子はソラを見た。

「良く無事だったね。あんた、やっぱり可笑しな奴だ。」

笑ってはいるものの、今の神奈子の雰囲気はただものではない。言葉交わさずとも、これほどまで神奈子のけたたましさが感じられるとは・・・。

「そうね。貴方が思うとおり、山の神は本気を出せば強いわね。」  
神奈子の反対側から声が聞こえた。

「・・・あ。」

そこにいたのはさとりだった。

「初めまして。古明地さとりと申します。」

「・・・初めまして。」

ソラは一応初めましてとっておいた。しかし可愛い。

「私はそこまで可愛くないですよ。でも、とても嬉しい言葉です。」

あ、そうか。心の声読まれるんだった。

「ええ。」

「なら、包み隠さずにはなした方が良いね。頭撫でていいですか？」

「駄目です。」

「だよな。」

するとまた声が聞こえてきた。

「それより、本題に入りましょう?」

聖 白蓮は落ち着いた素振りでは話を戻そうとした。

「そうね。」

霊夢は腕を組んだ。

「皆も知っている通り、今幻想郷には今までにないくらいの異変がおきているわ。青い鬼が入り込んできたり、妙な宇宙人が入り込んできたり、変なうねうねした化物。3つの敵が襲ってきている。今までは何も知らないことが多かったから攻撃は出来なかった。でもそれだけじゃ解決はしない。」

霊夢はさらに声を大きくした。

「なら、立ち止まって入られない。進むべきだわ。」

レミリアはかすかに笑った。

「攻撃は最大の防御。」

神奈子は頼杖を突いている。

「無茶をしても、幻想郷を、仲間を守り抜く。」

おちついた素振りを見せている幽々子も口をあけた。

「一人は皆のため。」

さとりも口をあけた。

「皆は一人のため。」

続くように永琳も、

「全てを救う。」

霊夢はソラをみた。

「ソラ。」

「ん・・・？」

霊夢はいつになく真剣な顔と声でソラに問いかけた。

「あなたはどうしたいの？」

そういわれたソラは、

「お、俺はもちろん――」

一緒に戦いたい、というつもりだった。だが霊夢はソラがいうよりも早く言葉を放った。

「単刀直入に言うわ。下手をすれば、」

次に霊夢が放った単語を聞いたソラは固まった。

「死ぬわよ。」

霊夢はおふざけでいっているわけじゃない。本気でいっている、  
『死』と言う単語。

それだけで身体が震えた。

「もしあなたが死にたくないのなら、今すぐこの場から離れなさい。紫はまだ気絶しているからこの世界からは逃げられないだろうけど、藍と一緒にいれば助かる見込みは有るわ。」

霊夢はソラからの返答をまった。

もちろん一緒に戦いたかった。でも、

「怖いよね？」

さとりになんていわれた。頷けなかった。でもそれは確かにそうだ。あの痛みや恐怖はそうそう味わいたくはない。

なんせ俺は普通の人間だ。弾幕こそ打てるようになったものの、普通の人間。勝ち目などは早々あるわけではない。フランに勝てたのは、あれは偶然だったからだ。偶然が勝利を呼んだ。それだけのこと。

「・・・俺は、」

それ以上言葉がでない。それを見た霊夢はかすかに笑った。

「ソラは少しここに残りなさい。まだここには幽香や慧音達も残るわ。ころあいを見て避難場所を探しなさい。」

霊夢は踵を返してレミリアたちのほうを見た。

「さ、いくわよ。」

霊夢達は外で出て行った。

ソラは、跡を追えなかった。

「文さん。私も妖怪の山を確認してきます。」

「一人でですか？危険です。だったら私も―――」

「もし二人で行って攻撃されたらまずいです。ここは用心して一人ずつ行きましょう。」

「でも……！」

文と桜が言い争っているのを魔理沙が止めた。

「落ち着けお前ら！」

二人はとりあえず口論を止めた。

「……ここで言い争っても仕方がない。確かに心配になるのはわかるけどさ、」

魔理沙は帽子をかぶりなおした。

「私もアリスが気になる。てなわけで桜。途中までは私と一緒にいこうぜ。」

桜は魔理沙をみた。

「……ま、まあそれくらいなら。」

桜と魔理沙は庭に出た。

「桜！」

文に呼ばれた桜は振り返った。

「1時間です。もし1時間経って戻ってこなかったら私もそちらに

向かいます。いいですね？」

椛は笑った。

「・・・はい。」

そして椛と魔理沙は飛んでいった。

「・・・。」

文は時間を待つかのようにその場に座った。

「藍しゃまに言われたとおり、家で待ってみたけど、藍しゃまはいつ帰ってくるだろう・・・。」

橙は家の縁側で藍の帰りをずっと待っていた。結界を見に行つてからというものの、帰りが遅い。

「・・・紫様もまだ起きないし、」

橙は心配になってきた。昨日の夜もやはり家に籠ったまま外には出ていない。

理由は外に出現する化物の事だ。いくら弾幕を打てるとはいえ、式の式。まだまだ力は劣る。

それに今この家を守るのは私しかない。

「頑張らなきゃ！藍しゃまや紫様の分まで・・・！！！」

気合を入れるように頬をペチペチ叩いた。

「うつ、痛い・・・。」

とりあえずお腹がすいたのでご飯を用意しようとその場に立ち上がろうとした。

その時だった。

台所の方からお皿の割れる音が響いた。

「！？」

それ以来音は聞こえない。

「な、なに・・・、今の？」

橙は駆け足で台所の方へ向かった。

「・・・。」

引き戸の隙間から覗き込んだ。

お皿は見つかった。綺麗に割れたお皿は床に落ちている。だがそのほかに変わりはないかった。

「・・・落ちちゃったのかな？」

お皿を拾いにいこうとした。

——バキヤ・・・ツツツ——

橙は肩を振るわせた。

また、あの音だった。

あの夜聞いた、何かの碎ける音。

「っ・・・！！！！」

橙は息を荒げ、冷や汗をかいた。

『怖い』

それだけが頭をよぎった。あの夜見た二つの眼光。あれを見ただけなのに、とてつもない恐怖を与えたあの目が脳裏をよぎった。

足ががくがく震え、立つのが困難になってきた。

（嫌だ・・・。絶対に嫌だ・・・！あの恐怖は、味わいたくない・・・っ！！！！）

この音があの時と同じものかどうか分からないのに、物凄く怖くて、恐ろしくて、嫌だった。

それでも、橙は動いた。向こうの部屋には紫が寝ている。流石に

紫でも気絶して寝ているところを襲撃されたらたまらない。それだけは考えもまとまる。

「ツツツ・・・!!!!!!」

意を決した橙はゆっくりと奥の部屋に進んだ。

奥に進むに連れて禍々しいオーラが感じ取れるような気がした。

空気が重い。まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

たかだか数十秒の道のりが数十分に感じた。ようやく紫様が寝ている部屋についた、とそう思ってしまった。

「・・・。」

恐る恐る部屋を覗き込んだ。

だがやはり怪しい点は見られない。天井に穴が空いているだけだ。「・・・そういえば、あのお兄さんはここから。」

橙はずっと天井を見つめていた。

刹那、腕に何かが当たった。

「・・・？」

腕を見た。

橙の腕からは大量の血が流れていた。

「え・・・。」

真横を見た。

真横で、青鬼が、微笑んでいた。

「あ、あああ・・・。」

橙は青鬼に拳を振り回され、外に吹っ飛ばされた。

「あがつ・・・!!!!!!」

木のよろい戸が締まっていたため、橙はそれにぶつかり、呻き声をあげた。

橙が地面に崩れると、青鬼も出てきた。

「はっ……！はっ……！」

橙はぐるぐる回転する視界の中、その場を離れようとした。だが身体が動かない。青鬼はどんどん近づいてくる。口は大きくひらいていて、唾液がぼたぼたと零れ落ちている。

橙は悟った。これでは、死んでしまう、と。

（ああ……。消えるのなら、せめて、藍しゃまにさよならを、言いたかった。）

橙は目を瞑った。

式輝「狐狸妖怪レーザー」

聞き覚えと見覚えのある弾幕が見えた。

「すまない、橙。一人にして苦しめてしまった。」

橙は涙を流した。

「……あいた、かったです。藍、しゃま。」

橙を守るように立ち上がったのは藍だった。安心した橙はそのまま眠るように気絶した。

藍は青鬼を睨んだ。

「失せろ。」

青鬼は立ち止まった。

藍は、凄まじいほどの殺気を青鬼にぶつけていた。

「二度言わすな。失せろ。」

青鬼は、無意識のうちに下がっていた。本能的に恐れたからだ。

目の前の式神に。

そして青鬼は木々の中に消えていった。

「……。」

藍は橙を抱きかかえた。

「本当にすまない。」

そして部屋の中に入ると、今度は紫を背負った。

「ここは危険すぎる……。はやく、永遠亭に向かわなければ……！」

「……ソラ。」

幽香から声をかけられた。

「……。」

ソラは縁側に座ったまま動かない。

「どうしたの？」

ソラは数秒たってから言葉を口にした。

「怖かったんだ。」

「……？」

「死ぬってことが怖くて、霊夢達と一緒に行けなかった……。それがさ、情けなくてさ。不甲斐なくて、気分が沈んでたんだ。」

幽香は黙ったままソラの言葉に耳を傾けた。

「そりゃ、俺はただの厨二病の微オタクの普通の青年だよ。でも、ここにきて、能力を手に入れて、弾幕を打てたときは、そりゃ、信じられないくらいの嬉しさだったんだ。これさえあれば、俺は何でも出来るって思ってた。フランも倒したし。」

ソラは少しだけ俯いた。

「でも、駄目なんだ。俺ヤッパリ弱いよ。こんな時ばかり、足がすくんで、ヘタレで……。誰の力にもなってやれない……。」  
ソラは膝を叩いた。

「震えて、動かなくなっちまうんだよ。このふざけた足がさア……」

声は笑っているのに、震えていた。

幽香は理解できた。

ソラは、泣いているのだと。

「皆は、どんどん恐怖に向かって立ち止まらずに進んでいくのに……。俺だけ……。俺だけがその場に立ち止まって、皆から遠ざかっていつてさ……。」

ソラの顔から涙が次々と零れ落ちていた。

「皆に、助けてもらってばかりで……。それなのに、俺はなんにもしてやれなかった……。フランも、助けてやれなかった……。あのまま俺がずっとついていれば、助けてやれたかもしれないのに……。」

次の瞬間、ソラは絵の入ったケースを壁に投げつけた。

「……。っ！」

幽香は吃驚して少しだけ肩を振るわせた。

「なんだよ。なにが絵を実体化させる程度の能力だよ。馬鹿じゃねえの？何の役にもたちやしねえじゃねえかよ……。馬鹿……。馬鹿馬鹿馬鹿……。っ！！！」

ソラはその場で地団駄を踏んだ。

「ここにきても天子を苛めてばかりで、ただの私利私欲のためにここに来てるだけじゃねえか……。幻想郷に異変が起こっているつてのに、なんにもしてやれねえで……。こんなところにいる資格すらないのに、俺はこんなところで何馬鹿やってんだよ……。！」

幽香は、ソラの言葉を聞いて少しだけ握りこぶしを作った。

「……。すみません幽香さん。少し、放っておいて下さい。」

これ以上ソラになにもいつてやれなかった。これ以上の不甲斐なさはない。

幽香はその場から離れようとした。

「馬鹿あああああああああああ！！！！！！」

突然ソラの頭に氷の塊がぶつ飛んできた。

「ぬこはっ・・・！？」

ソラは頭から地面につっこんだ。

「ソ、ソラ！？」

幽香はソラに駆け寄った。すると向こうから声が聞こえた。

「ほんつとソラは馬鹿だよ！！！！」

ソラは頭を押さえながら声がする方向を見た。

そこにいたのはチルノだった。

「ソラは弱くなんかない！だってソラはあたいを倒したから！そしてあたいと親友になってくれたから！ソラはすごく、すっごく強いよ！！！！」

チルノはズカズカと駆け寄ってきて、ソラの目の前までやってきた。

「それにソラは馬鹿じゃない！」

「さっき馬鹿っていったわよね？」

幽香は即座につっこんだ。

「あたいはそんな後ろ向きなソラは好きじゃない。どこか変なところはあるけど、面白くて、優しくて、そんな凄い力を持つてるじゃん！」

チルノは笑顔でソラにいった。

その言葉を聞いたソラは、言葉を失った。

「・・・。」

目の前の妖精は、ただ笑顔でソラのことを話した。それだけなのに、ソラはかなりの力をもらえた気がした。

「チルノの言うとおりだよ。」

妹紅も姿を現した。

「ソラは気づいてないだろうけどさ、ソラの力はものすごいよ。なんだか不思議で、どこか怖いところも有れば可愛いところもある。可笑しい能力だけど、なんだか凄い力を感じるよ。まるでソラそのものみたい。」

次々と繰り出される褒め言葉（？）に少しだけソラは照れた。

「そーだそーだ。」

屋根の上から声が聞こえた。

「!？」

屋根の上には小町がいた。

「あたしの背中の中の悩みなおしてくれたのはソラが初めてだよ。ありや気持ちよかったねえ。」

今度は茂みの方から聞こえてきた。

「あたしだって感謝してるわ!!!」  
すると天子が飛び出てきた。

「私をあれほど楽しませてくれたのは貴方が初めてよ!」

ソラはあたりをキョロキョロした。

いつの間にかソラの周りには笑顔がこぼれていた。

「ソラ。」

幽香から声をかけられた。

「もう少し自信をもちなさい。あなたは、他の誰にも負けない輝きをもっているわ。もちろん、私以上のなにかをもっていることもある。それは貴方自身を必ず強くする。」

幽香は踵を返し、そしていった。

「立ち止まっただけはいけない。突き進みなさい、ソラ。ドSと名乗るのなら、困難にぶつかってうたれ強くなりなさい。うたれ強いドSこそ、真のドSというものよ。」

なんて緊張感のない台詞だろう、と思った。

でも、それだけでソラには大いなる力だった。

「。。。。」

ソラは帽子をとった。

「チルノ。」

突然とばれたチルノは首をかしげた。

「いったよな。俺に、幻想郷に何か起きたとき、この帽子を守って

くわって。」

ソラはチルノに帽子をかぶせた。

「ん……。」

「俺からの願いだ。この帽子と、そしてチルノの大切な仲間を守り通せ。最強のお前なら出来る。」

帽子を見つめたチルノは自信たっぷりの笑顔になった。

「あつたりまえじゃない！！あたいは最強なのよ！どんな敵でもけちよんけちよんにしてやるわよ！」

するとチルノは猛スピードで廊下へと進み、3秒で大勢の妖精達を連れて戻っていた。

「あたいの仲間達は最強軍団だー！」

「ちよつとちよつと、これはなに！？」

リグルは突然の事に戸惑いを隠せないでいる。

「チ、チルノちゃん！どうしたの！？なんでそんなに張り切って・

・！」

「吃驚したのかー。」

「ソラ！これがあたいの最強の武器よ！！！」

ソラは安心したかのように笑みを零した。

「・・・最強じゃないか。まさしく。」

ソラはみんなの方向を向いた。

「・・・皆。」

全員はソラの方向を向いた。

「・・・足手まといになるかもしれない。でももしかしたら、誰かが足手まといになってしまいかもしれない。でも、実際のところはそんなことは気にしていられない。」

ソラは真剣な眼差しで全員を見た。

「俺は、だれかが危機に陥ったとき、絶対にそいつを助ける。だからお願いだ。」

ソラは、笑顔を零した。

「俺が危機に陥ったら、気にせず突き進んでくれ。」

その言葉を聴いた皆からも笑顔がこぼれた。

「遅しくなったわね。」

「でしょ？」

ソラはいつもの顔つきになり、散らかった絵を整えた。

「さーて、」

身支度を整えると、ソラは背伸びをした。

「ふう・・・。」

そして、ソラは青く澄み渡った空を見上げた。

「一心不乱の、大戦争だ。」

堕ちてゆく・・・

アリス・マーガトロイドは息を殺して潜んでいた。

「・・・まずいわね。」

永遠亭に向かおうとしていたアリスはある原因があり逃げ遅れてしまった。

昨夜の事だ。普段のように本を呼んでから寝ようとしていたら、突然窓ガラスが割られ、蠟燭の日が消えると同時に暗闇になってしまったのだ。

「・・・あれは、一体なんだったのかしら。」

すると後ろから声が聞こえた。

「聞かせてくれるかい？」

アリスは後ろを向いた。

そこにいたのは萃香だった。

「・・・まあ、一日中私を守ってくれたんだものね。」

アリスは昨日の夜のことを語った。

「・・・可笑な夜だったわ。」

――昨夜の晩の事――

「シャンハイ。明かりをつけてくれる？」

シャンハイは急いで蠟燭に明かりをつけた。

「やっぱりお風呂上りには物語を読むのが一番よね。」

本を取りにいくと棚を見た。

「あら・・・？」

人形が一体落ちていた。

「この人形、この前私の家の玄関の前に届いてた、差出人不明の人形ね。」

アリスはゆっくりと近づき、人形を手にとった。

「本当に不思議ね。一体誰のものかしら・・・。」

アリスは人形の目をまじまじと見つめた。

「・・・。」

なんだか眠くなってくるようだ。よほど風呂が効いたのだろう。なんだかどんどん眠くなってくる。

すると突然窓ガラスが割れた。

「!?!」

吃驚して人形を落としてしまった。しかし今は人形を拾うところではない。

風圧で蝋燭の火が消えた。

「な、なに? なんなの・・・?」

咄嗟に机の影に隠れたアリスは人形達を呼び寄せた。

「動いちゃ駄目よ・・・。」

なにやら外が騒がしい。流石に危険を察知したアリスは気付かれないうちに裏の小さな扉から出て行った。

「一体何が起こっているの・・・?」

遠くから自分の家の玄関を見た。

なんとそこには多数の大きな人影が蠢いていた。

「!?!」

「人影?」

萃香は眉をひそめた。

「ええ。なんだか変な形をしていたような気がするわ。所々から殺気を感じられたし。」

「なるほど・・・、それで？」

「・・・えっと、確かその先は、」

『魔王様！設置は確認できています！』

『なるほど。この作戦も無事遂行できているな。全く楽しみだわい。』

『しかし、またこの作戦を使うのですか？いくらこの存在の力が強いとはいえ、研に一度敗退しています。また勝てる自信が・・・。』  
アリスは聞き耳を立てて聞いていた。

（作戦？無事遂行？あいつらはなにを言っているの・・・？）  
すると一際大きな人影が言葉を放った。

『一番頼りなのはお前だ。よろしく頼むぞ。』

『わかっています。全ては手はずどおりに。』

大きな人影の前にいた人は物凄いスピードで消えていった。

「・・・？」

『さあ、我々も作戦を遂行するぞ！』

『おー！』

そのものたちは消えていった。

「・・・なんなの、あいつら。」

「なるほど。意味不明な会話が聞こえてきたと。」

「うん。」

萃香とアリスは周りを伺いながら会話を交わしている。

「あれ以来私は家には戻ってないわ。」

「どうしてだい？」

アリスは冷や汗を流した。

「・・・戻れない、というより、戻りたくなかった。」

アリスは少しだけ体を手で覆った。

「物凄いきさつきを感じたのよ。あいつらが消えてから・・・。」

「・・・ふーん。」

回りの安全が確認できたのか、萃香は立ち上がり、その場を離れようとした。

「ま、ここらへんはアリスの方が詳しいから任せるよ。私はすこし霊夢達と合流しなきゃ。」

「ええ、ありがとう。」

「どういたしまして。」

萃香は木と木の間を器用に走り抜けていった。

「・・・。」

アリスはまたその場に座り込んだ。

「・・・やっぱり、調べてみなきゃ分からないわね。」

アリスは自宅に戻る事にした。

——白玉楼（庭中央）——

「・・・。」

妖夢は刀を抜いた。

「やはり来ましたね。」

妖夢の目の前に煙状の化け物が蠢いていた。

「霊界までご苦労様です、といたいところですが、今回はかりは即座に帰っていただきます。」

妖夢が刀を化物に突きつけた。

それと同時に煙状の化物は妖夢に突き進んでいった。

——妖怪の山（滝壺付近）——

「異常はなし、か。」

柊は滝の近くで様子を伺っている。

「敵はいない。コレならすぐ戻れそうかも。」

そのまま滝つぼにジャンプして近道をしようとした。

すると岩の隙間からあの煙状の化け物が出てきた。

「っ……!?!?」

突然の出来事に驚いた柊はバランスを崩してしまった。

「しまった！」

柊は突き出した岩にモロに背中を打ち付けてしまった。

「ぐっ……!?!?!」

そのまま柊は滝つぼに落ちた。

（ま、まずい……!）

背中から血が流れ始めた。

（殺気を感じられなかった……？まさかあいつは、殺気を消せるのか……？）

柊は滝つぼの中を泳ぎ、滝の裏に逃げ込んだ。

「げほっ……!げほっ……!」

焦ってしまい、大量に水を飲んでしまった。

「はア……。はア……。まずい……。」

コレだけの深手を負ってしまったら一旦身を引くしかない。

「あと20分……。そしたら文さんが来る……。それまでに戻らないと……。」

柎は滝つぼから出ようとした。

「……。？」

目の前がぐるぐる回り始めた。

(え……。な、なに……。これ？)

どんどん視界が黒ずんできく。

(……。！)

傷口に先ほどの黒い煙状の化け物が侵入してきていた。

「！？」

柎は驚愕し、手で追い払おうとした。

だが無理だった。その化物はついに柎の傷口から体内へと入ってしまった。

「……。？」

目の前がどんどん黒ずんでいき、意識も朦朧としてきた。

(あ、文……。さん。駄目……。来ちゃ……。だ……。め……。)

柎は刀を地面に落とした。

—— 妖怪の山の真下 ——

「……。？」

文は妖怪の山の真下に来ていた。約束の1時間よりも20分早く来てしまった文は周りに敵がいないかを見張った。

「少し早いですが、まあそれもいいでしょう。」

意を決して山に入ろうとした。

「ねえ、君。」

文は肩を震わせて一瞬で後ろを向いた。

「頼みたいことがあるんだ。ちょっと。」

そこにいたのは、謎の美少年、星君だった。

「・・・あなたは？」

「ああ、自己紹介が遅れてしまったね。僕の名前は星。この幻想郷に幻想入りしてきたんだ。」

「ということは、アナタもソラさんと同じ人、というわけですか。」

「ソラ？ああ、確かこの幻想郷をある意味騒がせているっていう。」

星君は笑った。

「助けてあげたいのはやまやまですが、私も懸案事項を抱えています。すみませんが、後にして下さい。」

文は飛んでいった。

「・・・残念。」

星君も走って文のあとを追いかけた。

「・・・！」

文は栞を見つけた。

「栞！」

名前を叫び、目の前に降り立った。

「こんなところにいましたか。」

文は栞の身なりを見た。かなりボロボロになっている。

「・・・誰にやられたんですか？」

栞は黙っている。

「・・・栞？」

栞は再び刀を握り締めていた。

「・・・！」

栞は、ゆっくりと刀を文に突きつけた。

「栞、貴方まさか・・・。」

しかし、栞はまだ文を攻撃しようとしなない。

栞は、ぶつぶつと何かを呟いていた。

（誰……？目の前にいる人は……。分らない……。分らないのに、愛おしい……。この人は、この人だけは、傷つけたくない……。ああ、でも、わからない……。）

そして、**柊は涙を流した。**

「  
・  
・  
・  
げ  
・  
・  
・  
て  
・  
・  
・  
。」

- 
- 
- 
- ?

文は栳の目を見た。

「……にげ……で……。早く、にげて……。」

栳は手を振るわせた。

「  
 椀  
 ・  
 ・  
 ・  
 〇  
 」

山窩「エキスペリーズカナン」

椀のスペルカードが飛び交った瞬間、椀はにたりと笑った。

「きひ……きッヒヒヒヒひひひひはははははははは!!」

!!!!

椛は高い声で笑いながら文を攻撃した。文はギリギリで攻撃を避けた。

「.&lt;.&gt;.!&gt;」

空中で回転し、華麗に着地した文は椀と距離をとった。

「椛……！正氣に戻りなさい！私です、文です……！！」

呼びかけても無駄だった。黒くにこった椀の目からは生気が感じられなかった。

「.....!!!!!!」

文は空中高く飛び上がった。

（あの目……。フランさんと同じ目をしていた……。じゃあ、今椛はフランさんと同じ状況下に陥っている……。だとしたら、あの化物に取り付かれたと考える他ない。でも、どうして……。？）  
文は猛スピードで椛の周りを旋回した。

（決定的証拠……。糸口を解決する決定的証拠を見つけなければ！）

文は目を凝らした。

「あ……。！」

見つけた。フランと同じ共通点。

妖夢は化物に切りかかった。

「はっ！」

俊足で化物の身体を通りすぎ、刀を振った。

だが化物は切れていない。

（やはり切れない……。相手の身体は肉体ではなく、細かい煙状の塊でできている。これじゃあ切りかかってても意味がない。）

化物は恐ろしいうめき声をあげて襲ってくる。妖夢はその動きを見切り、ギリギリで攻撃を避けた。

（動きは早くはない。しかし規則性がない。気を抜いたらやられる……。）。）

妖夢は構えた。

幽鬼剣「妖童餓鬼の断食」

幾多の弾幕が化物の周りを被った。

しかしその化物は起用に身体をくねらせ、全ての弾幕を避けきった。

「くっ……！！！！」

負けじと次のスペルカードを繰り出した。

獄界剣「二百由旬の一閃」

死角を狙い、今度は的確に相手の急所をついた。化物は吹っ飛び、枯木に激突した。

「よし！」

攻撃してわかったことがある。

一つは相手が全く攻撃をしてこないという事。

もう一つは相手の身体は煙状の身体で出来ており、普通の攻撃は全く聞かないということ。

そして最後……。

「……あの化物は、煙でも影でもない。」

切りかかりにいく直前、相手の身体を間近にみた妖夢は気付いた。

この化物の構成は、煙ではなく、他の何かの小さな何かの集合体なのだ。

だがそれがわからない。間近で見たとはいえ、それが一体なにできているのかが……。

「それが分からない以上、下手に近づく事も、攻撃する事もままならない……。」

選択肢は一つ。相手が攻撃をして来れないなら、一旦身を引いて、作戦を練るほかない。

妖夢はその場を離れようとした。

突然目の前に何かが掠った。

「?!」

頬にかすり傷が出来た。鮮血が頬を伝い落ちる。

なんだ……。何が起きた……。?

妖夢の目線の先には、枯木の太い欠片が転がっていた。

「枯木……。?」

はつとした。妖夢は化物に目を戻した。

信じがたい光景が広がっていた。

化け物が、枯木を、食していた。

「な、なぜ……。!?」

相手には触れられない。逆を突けば相手もこちらに触れられない。

だとしたら何故、あの化物は木を食している。

そして次々と木の破片が投げつけられた。妖夢は見切り、木々をきりつける。

「くそ……。つ!!!」

このままではキリがない。相手を倒す方法がないのでは勝利する事はままならない。

妖夢は一旦その場を離れようと決意し、刀をしまおうとした。

だが化物はそれを見逃さなかった。化物は木を飛ばし、妖夢の納めようとした刀を弾き飛ばした。

「なっ・・・!？」

しかもそれだけではなかった。刀を弾き飛ばされたと同時に、手の甲に傷が出来てしまった。

すると化け物が急接近してきた。

「!」

妖夢はギリギリでよけた。

(手の甲に傷がついた瞬間に襲い掛かってきた・・・?)

化物は隣の部屋につつこんでしまい、妖夢を見失ってしまった。頭の回転は弱いらしい。

「よし・・・!」

妖夢は刀を取りにいった。

「今のようにすれば時間を稼げる。今のうちに霊夢さんたちに報告を――」

妖夢は刀に触れたまま静止した。

刀が風呂敷に刺さっていた。しかもその風呂敷から液体がこぼれてきている。

「・・・これは。」

妖夢はコレを覚えていた。

そうだ。これは、あの時ミステアの屋台で買った、焼酎だ。

するとまた化け物が襲い掛かってきた。

「っ・・・!」

妖夢は咄嗟に効きもしない刀を化物に振りかざした。

「!？」

すると妖夢の目の前で、信じられないことが起こった。

「いくら見張りとはいえ、流石につまらないなア……。」

天子は縁側近くで見張りをしていた。

「仕方ないだろ？今は特効薬を作ってる最中で、敵も来たらまずいし、第一花の妖怪がメディスンをつれてくるのを見つげなくちゃならないわけだし……。」

小町は屋根の上から遠くを見ていた。

「お前らぶつぶつ言っただけで見ててくれよ。」

ソラは雛と会話をしていた。

「つまり、俺に凄い厄がついてるから俺の周りをうろついていたと？」

雛は笑顔でソラの真正面に座っている。

「ええ。近くにいるとものすごい厄たちが私を刺激してたまらなかつたわア、クセになっちゃうくらいで。」

「はア……。」

「ほら、もう思い出ただけでこんなに身体がぞくぞくしちゃう……／＼／＼」

「……。」

身もだえしている雛をあまり直視できないソラは目をそらした。

「……見る？」

雛はずいっと体を寄せてきた。

「見ない……！」

「あらア、我慢しなくてもいいのよー？」

雛はソラにすがりついた。天子はその光景を物凄い目で睨んで唸り声を上げていた。

「……なんだこの殺気。」

小町は少しだけ天子から遠ざかった。

「なによあの厄神……。いちゃいちゃとソラにすがりやがって……。」

天子はゆっくりと近づいた。

「あの厄神、今のうちに肅清しなくては、ソラを奪われる……。」「天子はゆっくりと厄神に近づいた。」

「あら……。」

雖は天子が近づいてくるのを見逃さなかった。

「……。」

とりあえず気付いていないフリをして人差し指を突き出した。

「厄くなーれ♪」

と小声で言った。すると、

「やっと思つきましたよ。」

小町は真横を見た。

「え？」

天子もその声が聞こえた屋根の上を見た。

「総領娘様。」

屋根から降ってきたのは衣玖だった。

「い、衣玖！？」

「肅清です。」

衣玖は天子の顔面を踏みつけ、地面につっこませた。

「げふえああああああ？！」

雖はくすくす笑っている。

「おー、衣玖だ。」

ソラがボソツと呟いた。

「あら？」

衣玖はソラを見た。

「お久しぶりです。この前のお昼以来ですね。」

「へ……。？」

ソラは衣玖の言っている事が分からなかった。だが衣玖はまるでソラを知っているかのように話しかけて来た。

「吸血鬼の妹さんが転んだ直後に貴方もあそこに通りかかって、なにやら変な煙が貴方を覆っていましたか、大丈夫なんですか？」

「え……、なにいつてるんですか？」

ソラの反応を見た衣玖は首をかしげた。

「そちらこそ……。私、貴方に話しかけたじゃないですか。遠くから話しかけたので、聞こえてなかったのか、すぐ向こうに行っちゃいましたけど……。」

ソラはますます意味がわからなくなった。

確かにフランと一緒にはいたが、先日のお昼頃ときいてひっかつた。

フランとはお昼頃に別れたはず。その前に衣玖に話しかけられたら気付くはず。気がつかなかったほど遠くから話しかけていたのか？でも、変な煙に囲まれたってことは、それはありえない。しかもその変な煙っていうのは今騒がせている化物の事。だったら尚更ありえない。

「……あの、それって本当に俺だったんですか？」

「ええ。見た目も風格もあなたそっくりでしたよ？」

すると天子が起き上がり、唸り声とも似た声で喋り始めた。

「無視っていえば……。ソラってあの時も私を無視し続けてたわよね……。」

ソラは天子をみた。

「無視って……。いつ？」

天子はすねたような顔をした。

「幽香の家を出たときよ。貴方私より先に出て行ったじゃない。追いついて私が何度も話しかけても無視しまくって……。拳句の果てには後ろから強力キックよ……。覚えてるでしょ？」

「……へ？」

と、ソラは初めて聞いたかのような反応をした。

「とばけないですよ。ひょっとしてまた私をからかって――」

「おいおい。おまえこそ何言ってるんだよ。俺、幽香のところを出たのは確かにお前より早かったけど、その前に鞆忘れちゃったから引き返したんだ。それでまた帰ろうとしたらお前がなんか叫んでるからさ。なんか五月蠅いからキックしただけで、無視はしてないぞ？」お互い沈黙が続いたが、先に口をあけたのは天子だった。

「は、はア？嘘いわないですよ！あれは絶対ソラだって！見間違いないわよ！」

「・・・え、ちょっとまってよ。」

ソラは一旦会話を止めた。

ありえない。そんなこと・・・。

「まさか、それって――」

「ア、誰か来るぞ！」

小町が叫んだ。全員はその方向を向いた。

「・・・あれって、」

天子が呟いた。

向こうから来ていたのは、紫と橙を背負った藍だった。

「・・・。」

藍は黙ったまま永遠亭内に入ってきた。

「だ、大丈夫か！？」

小町が降りてきて手伝った。

「すまない・・・。」

すると奥から慧音と妹紅が出てきた。

「お、おい。大丈夫か！？」

慧音と妹紅も手を貸した。藍はずっと御礼をいうだけだった。

「……。」

すると藍がソラを見た。

「っ……。」

だがすぐ視線をそらしてしまった。

「？」

紫達は隣の部屋に寝かされた。

「助かった……。」

藍は安心したかのように肩を落とした。

「……。」

ソラは隣で見ていた。

「……お前か。幻想郷に入り込んできた人、というのは。」

「ん、ええ。」

「……そうか。」

藍はソラを見た。

「覚えているか？お前が幻想郷に入ってきたとき、紫様に頭部をぶつけて気絶させたのを……。」

「え、じゃあ幻想郷に入り込む瞬間頭に何か違和感があったのって……。」

「ああ、多分お前がぶつかった証拠だ。」

「それで紫が……。俺頭すげえ固いしなァ……。」

「……。」

藍は橙を見た。

「……ソラ、と言ったな？」

「ああ、はい。」

「……少し耐えろ。」

「え……？」

藍はソラの首を掴んで壁際にたたきつけた。

「っ……!？」

その音を聞いた皆が部屋に入ってきた。

「藍！何をしているんだ！！！」

慧音は藍を止めようとした。だが藍はソラをにらんだまま怖い声でいった。

「お前に問うぞ。この異変、お前の仕業か？」

「ち、ちが……！！！」

「正直に答える。お前がこの幻想郷にきてからと言うものの可笑しな事続きた。妙な鬼が入ってきたり変な化け物がうろついていたりと……。オマケに結界の破壊だ。全て、お前が幻想郷に入ってきたから怒った。いいか、もう一度言う。正直に答える。」

藍の首を絞める力が強くなってくる。ソラは咳き込んだ。

「げほっ……。ち、ちが……。俺は、なにも……。！」

「今現時点で紫様と橙は怪我をしているんだ！！お前が関わっていないとも言い切れないだろ！！！」

皆は藍を止めていた。だがソラは、抵抗をしなかった。

実際否定できないからだ。藍のいう通り過ぎて。

自分が入ってきてから、異変が起きた。それは紛れもない事実。自分でもそうなんじゃないかと思うくらいだ。青鬼にジュラル星人だぞ。俺が知ってるやつらばかりじゃねえか。笑いがこみ上げてくるほどだ。

俺のせいかもしれない異変で皆が傷ついている。ああ、これじゃあ画面の向こうの連中にぶち殺されるな。もういつそ殺された方がよかったりしてな。そりゃフランを肩車したり、妹紅の下着姿みちまったり、拳句の果てに霊夢と一つ屋根の下だ。殺されない方がおかしい。

だが、一つだけいえる。俺は、人を悲しませるような傷つけ方はしない。相手を喜ばせる傷つけ方。それが俺の第一のドS魂。矛盾だな。矛盾してるよなア。

ソラは藍の手首を掴んだ。

「っ……！」

「藍さん……。確かに紫を気絶させたのは俺かもしれない。でも、俺は相手を殺すまで傷つけたりはしない……。説得力はないけど、俺は、皆の笑ってる顔がすきなんだよ。だから漫画家の道を選んだ。俺は、俺はな、」

ソラは笑いながら藍をみた。

「……。絶対に、大切な奴らを悲しませない。」

藍は戸惑った。

「……。」

すると藍の背中が小突かれた。

「！」

小突いていたのは、橙だった。

「藍……。しゃま。駄目……。お兄さんは、悪くない……。」

「橙……。何故だ……。？」

橙は震える手でポケットから飴玉を取り出した。

「その人、優しい笑顔で、これくれたから……。そんな人は、悪い事をしません……。絶対に……。」

藍は飴玉をみた。橙は、悲しそうな目で藍とソラをみている。

「……。」

藍は少しだけ手の力を緩めた。

「……。まだ、信用できない。」

ソラは藍から手を放した。

「私は、まだお前を信用できない。決定的な証拠がない限り――」

「――」

「証拠なら有るわよ。」

その場にいた全員は声のした方向を見た。

「ソラは嘘をついていないわ。嘘をついているのなら、この私にあ

ばけないはずがない。」

そこにいたのはさとり達だった。

「地霊殿の・・・!」

藍は驚きの声を上げた。

「ほらほらー、苦しんでるよー?」

ソラはいつの間にか地面に尻もちをついていた。

「あ、あれ?」

「いつのまに・・・!」

藍とソラは突然の不可解な出来事にわが目を疑っていた。

「横だよ、横ー!」

ソラと藍は声のした方向を見た。

「あ、こいし!」

「地霊殿の主の妹まで・・・!」

こいしは明るい笑顔で笑っている。

「お姉ちゃん。一応あの人もよんでおいたけど心配はない?」

「ええ。大丈夫よ。そろそろこっちにもくるんじゃないかしら?」

小町が疑問に思っただけで聞いた。

「・・・来るって、誰が?」

「私ですよ、小町。」

上空から声がした。

「へ?」

小町は顔をあげた。

「今まで仕事をサボった罰です。」

小町の頭上には四季映姫がいた。小町はモノの見事に上空からの映

姫のけりを顔面にくらった。

「えぐっ・・・!?」

小町は地面に倒れ、映姫は華麗に着地した。

「呼ばれてきてみれば、初めて見る顔がいますね。」

「・・・。」

ソラは映姫を目視した。

「そんなに固くならずとも、判決をするだけです。」

映姫はソラの前に建った。

「あ、小さい。」

「なにかいいました？」

「いえ、なんでもありません。」

映姫は中心に立ち、周りのものは映姫に注目した。

「・・・ではこれより、この者が白か黒か、はっきりつける審議を行います。」

「おい、アリスー？」

魔理沙はアリスの家の前まで来ていた。

「おかしいな・・・。いないのか？」

魔理沙はドアノブをひねった。

「あれ？」

鍵が開いている。魔理沙は首をかしげた。

「・・・アリス？」

魔理沙は中に入った。中は綺麗に整頓されている。

「アリスー。いないのかー？」

台所や風呂場を見てみたが誰もいない。

「・・・もう逃げ出したのか？」

仕方ないと思った魔理沙は家を出ようとした。

「・・・ん？」

不意に机の上に目が言った。机の上には一体の人形が置いてある。

「こんな人形、あいつもってたっけ？」

魔理沙は人形に手をそえ、持ち上げた。

「すっごい古びた人形だな・・・。」

魔理沙は人形の目を見つめた。

「・・・綺麗。」

魔理沙は数秒間人形を見つめた。

すると、突然魔理沙を眠気が襲った。

「あ、あれ・・・。」

アリスは自宅に向かって疾走していた。

「はぁ・・・！はぁ・・・！」

やっと自宅が見えてきた。アリスはさらにスピードを上げて家のドアを乱暴にあけた。

「うわあっ！？」

中にいた魔理沙は驚いて人形を落とした。

「び、吃驚したぁ・・・！」

「ま、魔理沙！？」

「突然どうしたんだよ！」

魔理沙はアリスに近づいた。

「あなたこそ、うちでなにしてるのよ。」

「なにつて・・・。」

魔理沙は頬をかいた。

「心配だったからさ・・・。アリスが家にいなくて・・・。」

そういわれたアリスは顔を真っ赤にした。

「な、ナナナナナにいつてんのよ・・・！！！！！！！」

「と、とにかく怪我はないのか？無事なんだな？」

魔理沙はアリスの腕を掴んだ。

「ぶ、無事に決まってるじゃない！馬鹿にしないで！」

「そうかぁ・・・。」

魔理沙は落ち着いたようにため息を吐いた。するとポケットから何かを取り出した。

「見つけた・・・。フランさんと、同じ共通点・・・。」

文は椀の背中を見た。

「傷・・・。おかしくなった人は皆、傷がついてる・・・。」  
そして、文は気付いた。

「まさか・・・、あの化物は・・・。」

「な、なぜ・・・。」

妖夢は化物を見た。

今まで切れなかった化け物が、真っ二つに切れていた。

「・・・っ！！！」

妖夢は気がついたように刀を見た。

焼酎でぬれた刀を見た妖夢はゆっくりと真っ二つに裂けた化物を見た。

「これは・・・、こいつは・・・。」

「無事だったのかあ。それじゃあ・・・。」

魔理沙はアリスの目の前にミニ八卦炉を突きつけた。

「・・・え。」

アリスは魔理沙を見た。

魔理沙は、笑っていた。

「今すぐ壊さなきゃな・・・。」

魔理沙はアリスに向かってマスタースパークを放った。

化物の正体に気がついた文と妖夢は同時に叫んだ。

「この化物は、病原菌なんだ・・・。」

堕ちてゆく・・・（後書き）

定期的に作品の感想や意見、小さな要望などを受け付けております。  
もしよかったらメッセージや感想等ください♪

## オノノキ（前書き）

諸注意：この話数には、ところどころオリジナル弾幕やスペルカードが出てきます。また、他作品のキャラ崩壊等も見られますので、分からない人はしっかりと原作を見ることをおススメします。それではごゆっくり！

## オノノキ

アリスは冷や汗を一筋流した。今現時点でおきていることが理解できていなかったからだ。

「……。」

魔理沙が、攻撃をしてきた。それが理解できなかった。

「……魔理、沙？」

魔理沙はいつもと違う、別人のような笑顔でアリスを見ている。

「どうしたアリス？なんで私から離れるんだよ？」

ゆっくりとこつちに近づいてくる。アリスは後ろに退いた。

「や、やめて！こつちにこないで！！！」

「何故……？私はアリスを壊したいんだ……。壊さなきゃ作戦は遂行できない。だからここで壊れてもらう。」

「なによ作戦って……。！魔理沙。貴方なにを言ってるのよ！」

魔理沙はアリスの問いかけを無視し、猛スピードでアリスに近づいた。

「っ……。！！！」

魔砲「ファイナルスパーク」

「っ……。！！！」

アリスはギリギリでよけたが、肩に掠ってしまった。

「お願い……。！止めて魔理沙……。！！！」

魔理沙はとうとう言葉すらかけなくなってきた。

「なんで、こんなこと……。」

アリスは拳をかためた。

操符「ドールズインシー」

（傷つけないように遅い弾幕にしたけど、動きは止めなきゃ……。）

予想通り魔理沙は軽々と弾幕を避けた。

「何かがおかしい……。ひょっとしてソラがいったあのフランをおかしくさせたって化物に……？」

そうとなれば今すぐ永遠亭にいった薬をもらわなければ。

その時、何かが切れるような音が響いた。

「……！」

アリスは魔理沙をみた。

魔理沙の右腕が、まるで操り人形の糸が切れたかのようにダルンとなっている。

「……？」

良く目を凝らしてみた。

「あれは……。」

魔理沙の近くになにやら糸状に光るものが見えた。いや、アレは……。

「・・・糸？」

すると後ろから声が聞こえた。

『正カーイ』

「っ・・・！？」

動符「等身大操り人形劇」

全く覚えのないスペルカードの音が聞こえた。その瞬間魔理沙の右腕が動き出した。

アリスは声の聞こえた後ろの方角をじっとみていた。

「・・・どういう、こと？」

アリスに、近づく者がいた。

『スゴーい。本当に弾幕がツカエター。』

アリスは息を飲んだ。

「あ、あなた・・・。」

アリスに近づいてきたのは、アリスの家に届けられていた、あの人形だった。

『魔王様に命令させてジツト待ってたけど、スキだらけだったよー？まあ、研ト戦った時に比べテ私も少し改造されたけどねー。』

人形は腕を下ろした。すると魔理沙は動きを止めた。

「・・・あなたが、魔理沙を操っていたの？」

『そうダよ。とりあえず誰でも良いからアヤツレって魔王様に言わ

れたから。最初は貴女を操ルつもりだったんだけど、少しタイミングがずれちゃったし。ジユラル星人達は後先考えずに動いちゃうからなあ。星のやつは頭は良いし攻撃力も高いけど、見境がなくなる動きがねー。」

アリスは人形から退いた。

『ああ。そんなに怖がらなくても大丈夫だよ。いまあの魔法使いノ動きはトメてるから。』

アリスは魔理沙をみた。確かに魔理沙は身動き一つしていない。

「・・・貴方達の目的はなんなの？」

そう人形に問いかけた。

『私に聞かないでよ。私はなにもきかされてナイんだから。でも私はね、』

人形は首をカクンとさせた。

『人が倒れていく様を見るのは大好きなんだヨ』

そして人形は腕をダルンとさせ、言い放った。

飛符「千本包丁」  
サウザンドナイフ

人形の周りに幾戦もの包丁が飛び出てきた。

「なっ・・・！」

『さあ、串刺しにナツチャエ』

人形はアリスに向かって包丁を投げ飛ばした。

「……。」

ソラは頭を抱えていた。

「一体何がおきてるんだよ……。」

ソラが悩んでいる原因は、映姫の一言だった。

「は……？」

映姫は戸惑った顔をしている。

「……白黒、付けられません。」

回りの皆は驚いていた。

「ちょ……、四季様！それどういことですか……！？白でも黒でもないって……！」

「分かりません……。こんなのはありえない……。今現在ソラさんは、白でも黒でもない……。いや、白でも黒でもあるんです……。」

すると天子が介入してきた。

「ちよつと待つてよ……。確かにソラは私には色々したし、フランにも弾幕勝負を挑んだわ……。でもそれと異変になんの繋がりが……！」

映姫は叫んだ。

「それでも、おかしいんです！ソラさんが吸血鬼の妹や天人にしたことは確かに端から見れば怪しいものですが、それは白が下りました。ですが、ソラさんが幻想入りしてきたこと。それが曖昧に判決されたんです！こんなの、本当にありえないことなんです……！」  
映姫はソラに言った。

「……あなたは、一体なにをしたんですか？一体なにをすれば、こんな白黒はつきりしない判決が下るんですか。」

「そんなこといわれたって、分かるわけないでしょ……。」

「まあ、落ち着きなさいよ……。」

「そうよー。落ち着けば安心するわぁ。」

安心できねえよ。天人と厄神に両サイドに座られちゃ……。

「……しかし、」

ソラは玄関先を見た。

「幽香さん、遅いな……。」

「なんせあの毒使いをつれてくるんだからねエ。手間取ってるんですよ。」

まだまだかかりそうだなと思ったソラは立ち上がった。

「ちよつと、にとりの様子を見てくる。」

「うん。」

「いつてらっしゃーい。」

雛が手を振ると、ソラはバナナの皮で滑って転んだ。

「なんで！」

「……。」

にとりはおきているのだろうか。まだ寝ているのなら、あまり起こしたくはないんだが……。

「まあ、確認だ。」

ソラはノックをした。

『……あ、どうぞ。』

にとりの声だ。どうやらおきているらしい。ソラはドアをあけた。

「にとり……?」

にとりは少しだけ肩を振るわせた。

「あ……。ソ、ソラ……。」

まだ傷がいていないのか、俺を見るたび震えている。よほど効いたんだな。青鬼のやつが。

「傷は大丈夫か？」

「ああ、うん。大丈夫。こうみえて傷が治るのは早いから。」

「そうか。ならよかった。」

ソラはにとりを見た。

「にとり。お前が襲われた時の事、少しききたいんだ。」

「……。私が襲われた時のこと？」

「ああ。」

するとにとりは俯きながら話した。

「……。ソラと別れたあと、私はなにか色々なものが幻想郷に入ってきてないか探しにいったの。そしたらロケットを見つけて、私は木の影に隠れた。ロケットが爆発して数秒後に、私は襲われたの。とっても怖かった……。精神を破壊されそうな感じで、抵抗すら出来なかった……。」

改めて青鬼の怖さを実感した。それほどは……。

「ソラ。」

「ん、なんだ？」

にとりは困惑した顔でソラに問いかけようとした。

「……。なんで――」

「ソラ！」

突然扉が開いた。入ってきたのは慧音だった。

「うわ、吃驚した！なんだよ急に……。！」

「たった今、幽香とメディスンがきた……。」

「どう、メデイスン？」

メデイスン・メランコリーは化物の欠片を調べていた。

「うん。永琳のいうとおり、大体はこの薬のリストですね。」

メデイスンは見学しに来ているみんなを見た。

「あと、この幻想郷にはないものがはいつてました。」

「入っていないもの？」

妹紅はしかめっ面をした。

「ええ。私は時々阿求さんやパチュリーさんの本を借りるので、その時に色々毒のことについて勉強しています。丁度それが出ていたのは吃驚しました。」

「で、何が入っていたんですか？」

優曇華は興味心身に問いかけた。

「名前は確かー、えーっと……。」

全員は息を飲んだ。

「……アナフィラキシー、とかなんとか。そんな毒と成分が一致していました。」

全員が頭上にハテナを浮かべる中、ソラは愕然としていた。

（アナフィラキシー……。なんでスズメバチの毒がこんなところに……。）

「それと、もう一つ情報が有ります……。。」

奥から声が聞こえてきた。

「妖夢……。！」

妖夢は息を切らしながら入ってきた。

「……その化物は、ウィルスで出ています。恐らく、その不可解な毒と、永琳さんの作った薬がなんらかの反応を起こして、菌に進化したのかと……。それと、」

妖夢は懐から木の破片を取り出した。

「そのウィルスは、おかしいことに、木を食してました……。触れることすら出来なかったのに。木を食べていたんです。」

「木を……。？」

幽香は少しだけイラついた。

「はい。ですが、その後に解決策を見つけました……。」「

妖夢は焼酎を取り出した。

「なるほど……。菌だから、か。」

ソラはいった。

「ええ。これもソラさんのあのときの豆知識のおかげです。」

「それはよか……。」「

ソラの言葉が途切れた。するとソラは突然鞆の中を探った。

「ソラ？」

天子は鞆の中を見た。そしてソラは鞆の中から文々。新聞を取り出した。

「……。まさか、」

目が行ったのは、こーりんの店の記事。

「……。白蟻、アナフィラキシー。」

ソラは心臓が跳ねるような音が聞こえた気がした。

「……。まさか、そんな。」

アナフィラキシー。その毒をもつのはスズメバチ……。幻想郷には存在しないスズメバチの毒が、ここにきた理由。覚えているのは、あのときしかない。

「俺が、幻想入りする前の、あの時の……。スズメバチ!?」

真っ先に思い出したのが、紫のスキマにはいる前に子供達が見つけた俺が怖がっていた、スズメバチだ。まさか、あの時スズメバチも一緒スキマに侵入していた？

いや、それ以外考えられない。あの時意外にスズメバチがこの中に入っただけで、それ以外ありえない！

「・・・そんな、」

ソラの頭の中で、全ての鍵が一致した。

「・・・この化物は、偶然なんだ。」

全員がソラを見た。

「もしかしたら、この化物は、必然でもなく、偶然で生まれた・・・」

「・・・どういうこと？」

妹紅は問いかけた。ソラは答えるように説明をした。

「・・・憶測だ。憶測だが言ってみる。いいか？俺が幻想入りする理由。それは蜂に驚いたから俺はスキマに入ってしまった。もしかしたらその時、その蜂も入り込んでしまったのかもしれない。そして木を食す理由。」

ソラは全員に新聞を見せ付けた。

「ここにこーりんの店の記事が有るだろ？白蟻のせいで家が崩壊しかけている。つまり、木を食すってことは、その薬の中にシロアリが紛れ込んだからだ。でも、それは直接じゃない。間接的にだ。」

天子はまだ頭を抱えている。

「んー、わかんない！もつと簡単に説明してよ！」

「・・・天子。あの時おれはフランと弾幕勝負をしていた。その時フランは、弾幕でこーりんの店を吹っ飛ばしていただろ？ひよつとしたら、あの時、フランにシロアリがくっついたんじゃないかと思う。そしてフランは家出をしていると伝えにいこうとした。その帰り道、てゐが零した薬があったはずだ。帰り道だしな。」

ソラはさらに説明を続けた。

「衣玖が言ってた。天子を探している途中、猛スピードで帰ろうとしているフランを見かけたと。だがフランは飛んでる途中、突然バランスを崩して地面に落ちたと。ここで俺の推測だ。」

ソラは人差指を突き出した。

「ひよつとしたらフランは、飛んでる途中スズメバチにぶつかったんじゃないか？それで驚いたフランはバランスを崩して運悪く薬に

尻もちを突いた。だがその時フランは咄嗟に能力を発動させてスズメバチを壊してしまった。だがスズメバチを知らないフランは毒までは壊せなかった。そして、その時偶然にも、そのアナフィラキシ―とシロアリが、薬に混入して、こんな化け物が生まれたんじゃないか……？」

全員は黙ってる。

「……すまん。やっぱり無理か。」

「い、いや。なんかそれが一番しつくり来るっていうか……。」

小町が驚きの声を上げている。

「自分を馬鹿馬鹿って言ってる割に、すごい的を射た考えだな。」

妹紅も小町と同等の声を上げていた。

「褒めないで……。すっげえ恥ずかしくなってくる……。。」

ソラは蹲った。

「それより、今から八雲邸に向かおう。」

「どうしてだ？」

藍は問いかけた。

「俺が一番最初に入ってきたのが八雲邸だ。もしかしたら何か分かるかもしれない。」

「だったら私が案内を、」

「いいです。藍さんは紫さんや橙についてあげてください。」

「……そうか。」

ソラは永遠亭を出ようとした。

「ソラ。」

藍に呼び止められた。

「はい？」

「すまなかったな。」

藍に突然そんなことを言われたソラは戸惑った。

「……？」

「……こつちも憶測でお前の首を絞めてしまった。苦しかっただろ？」

「気にしなくていいですよ。こっちは小学校卒業前日に友達に首絞められて気絶したといういい思い出も持つてくるくらいですし。」

「ろくな思い出じゃないわね……。」

永琳がツツコミを入れた。

「……紫様が気絶して、お前はまだ外の世界には返れない。だから、お前に一つお願いをしても良いか？」

「なんですか？」

藍は深々と頭を下げた。

「……この幻想郷を、守ってほしい。」

「……！」

「ここは、私たちの育ったところだ。そう簡単に壊されたくない。お前の能力は便利だ。だから頼む。」

藍は繰り返した。

「幻想郷を、守ってくれ。」

ソラは微笑を浮かべた。

「……ええ、もちろん。」

ソラは踵を返して背伸びをした。

「さーて、いくぞー！！！」

するとソラの後ろに誰かが並んだ。

「お……？」

後ろに並んでいたのは、妹紅・天子・幽香の3人だった。

「水臭いぞソラ。あたし達も行く。」

妹紅はソラに笑顔を向けた。

「こんな体たらく共じゃ心もとないしね。」

幽香はからかうように笑っていた。

「どーせ不死身と花の妖怪には天人には勝てないわよ。あたしに任せときなさい。」

「天子だけ心配だ。」

「せめて私にも笑顔を作らせなさいよ！！！」

そんなやり取りを繰り返したあと、ソラ達は外をみた。

「さーて、戦争開始といきますか。」

すると何かに気がついたソラは優曇華に言った。

「優曇華。焼酎をミステリアにもらっとけ。」

「え？」

「少なくとも、もう既にフラン以外に誰か感染者が出ているはずだ。だったら、傷口にそれをかけてやれば助かるはずだ。それは妖夢の件で立証済み。今のうちに助けられる奴は助けておけ。」

「そ、そうですね・・・！ミステリアさん、焼酎は？！」

「あ、あります！手元には少ないですが、店には在庫がたくさんです！」

「では、案内して下さい！」

「はい！」

そういつてミステリアと優曇華は出て行った。

「なら、私も焼酎を使ってアルコールをいっぱいつくろつかしらね。特効薬が身近にあって助かったわ。」

永琳は奥に引っ込んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9779w/>

---

甘党絵描きが幻想入り

2011年11月23日14時45分発行